
B A B E ベイブ (ドラゴンハンドラー)

小室 仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B A B E ベイブ（ドラゴンハンドラー）

【Nコード】

N 1 3 4 1 Q

【作者名】

小室 仁

【あらすじ】

海洋大国、
ストリレ・ツ王国の第三王女、
ベイビルト。

幼い頃、乗っていた帆船が海賊に襲われたのを、
自国の海賊討伐団に所属する「ドラゴン・ハンドラー」に助けられ、
その炎を噴く凶暴なドラゴンを自在に操る、
黒髪の少年のハンドラーに憧れて、

いつか自分もなろうと決意する。

しかし、その海賊討伐団というのは、国内、国外から集めた、命知らずのならず者ばかりの集団だった。

そして、

ドラゴンの卵の入手は、
寧猛な火を噴くドラゴンの巣の中に入り込み盗み出すという、
非常に困難なものであり、
その上、巨大な猛獣の訓練飼育は、
屈強な男が、何人も命を落としている想像を絶するもの。

幼いころからの夢をかなえるため、
意に反した婚儀を拒否したのをきっかけに、
王女という身分を捨て、
ベイビルトは、そのならず者の男の世界に向かっていく。

果たして、ベイビルトは、
「ハンドラー」になることが出来るのか。

冒険ファンタジーです。

焦がれ

マストの上で望遠鏡を持ち、

海上の見張りをしていた兵士が大声で叫んだ。

「海賊だ！！」

甲板上にいる兵士達が、目視で海上を確認すると、黒い船が数船、離れた先に見えた。

そのマストの上に、遠目でも黒い旗がはためいているのが見える。

この辺りで一番の海洋大国「ストリレッツ王国」の、王族が乗船している船と知っての事なのか。

ストリレッツ王国の抱える海賊討伐団、民間から集められた猛者達の巡回のおかげで、この辺りの海を航行する船は、ここしばらくは、襲撃されることは無かったのだが。

王族が乗っている船を襲うということは、他の民間の商用船を狙う単なる略奪とは、わけが違う。

その国の権力までを奪おうとしているのだ。敵対するよその国の策略なのだろうか。

とてつもない爆発音と共に、船体に物凄い衝撃が走る。
決して小さい船ではないのに、帆柱がぐらりと揺れ、
甲板が大きく傾いた。

美しいブロンド。

腰までの長い髪を綺麗にカールさせ、
頭の上には美しい緑のリボンをしめて、
レースで縁取られている紅いベルベットのドレスを着ている7才の
少女が、

船のデッキの手すりにしがみつき、
食い入るように海の様子を眺めていた。

その青い瞳はきらきらと輝き、
今自分の置かれている命がけの緊急の事態よりも、
とうとう憧れていた瞬間にめぐり会えるのかと、
その白い頬はピンクに上気して、
わくわくとした期待に燃えていた。

「ベイビルート様！何をなさっているのですか！」
お付の侍女が、デッキの手すりにしがみついている、
ストリレッツ王国の第三王女に叫ぶ。

「王と王妃様のおられる船室の中にお戻りください！」

危ないではありませんか！」

侍女が船の揺れに耐えながら、

必死でベイビルートの手すりにしがみつく手を解こうとする。

ベイビルートは体全体で侍女に逆らいながら、

夢に見た瞬間を待ちわびた。

黒い旗を掲げた海賊船達は、次第にその姿が大きくなってくる。

近くなるにつれて、影響を受ける砲弾の数も増えてきて、

王族の船の上はパニックになった。

このまま海賊に服従の旗を揚げなければ、船を止められ乗っ取られて、
皆殺しになってしまう。

もう一発、かなり近距離に砲弾が着水し、

ベイビルートの体が甲板に放り出された。

辺りにも悲鳴が沸きあがる。

その瞬間、耳を劈くような獣の咆哮が船の上から聞こえ、

甲板に放り出されて体をしたたかに打っていたベイビルートは、

息を飲んで、手で両耳を押さえた。

ふいに船上を何か大きな影が覆い、船の上が暗くなる。

そして煽られるような、強い風が船の上を駆け抜け、

ベイビルートの美しい長いブロンドの髪が、ぶわっと空中に逆立った。

風によるめきながらも逆らって、慌てて立ち上がり、
ベイビルートは甲板の手すりまで走って近づいて行く。
船を覆っていた影が、船の上からどく。
ベイビルートは自分の真上の空を、勢い良く見上げた。

頭上数メートル。

ここからでも、その体の動きに波打つ、
粗い赤褐色のうろこが見える。

腹の下には鋭い爪が伸びている、鳥に似た大きな足が二本見える。
そして、長い口は閉じていても、巨大な鋭い牙が数本突き出ていた。

黄色いとかげのような大きな目には、
横に緑の線が一つ走り、その中に黒い瞳孔が見える。

一瞬だけぎょろりと、自分を見上げている小さなベイビルートを見
下ろして、

次の瞬間には大きな前足の翼を羽ばたき、
それは強風と共に船の上から去っていた。

一頭の大きな翼を持つ赤いドラゴンが鋭く羽ばたいて、
砲弾を打ち続ける海賊船に向かって、
向かっていく。

そのドラゴンが、打ち上がってくる砲弾を巧みにかわしながら、
こちらの船から離れて行くに従って、
その背に乗る一人の黒髪の男の後ろ姿が見えた。

「ハンドラーだわ！」

ベイビルーツは叫ぶと、

食い入るように、その小さくなって行く姿に見入った。

ストリレッツ王国の海賊討伐が、

他の国のものと違い、これだけ成果を挙げているのは、

ドラゴン・ハンドラーなるものの存在があるからだった。

まだ他の国には例を見ていない。

ストリレッツ王国にも、

今まだ二人のみのハンドラーが、存在するだけだった。

ハンドラーとは、

ストリレッツ王国の領海にある無人島に生息する、

火を噴くドラゴンを訓練し、自由自在に扱う人間のことである。

以前、ある民間人が、

偶然に手に入れたドラゴンの卵から孵化したその幼獣を、

飼育し思うとおりに操れるようになったのが、きっかけだという。

空を飛び、火を噴く巨大な猛獣を自由自在に操れるとなれば、

砲弾を撃つなどよりも、よっぽど強力な戦闘力になる。

ただ、その卵の入手は、

寧猛な火を噴くドラゴンの巣の中に入り込み盗み出すという、

非常に困難なものであり、

その上、巨大な猛獣の訓練飼育は、

屈強な男が、何人も命を落としている想像を絶するものであった。

しかし、ドラゴンを見事飼育したハンドラーには、ストリレッツ王国でも高い身分を保障されている。

それがどれだけの荒くれ者で、身分の低い卑しい生まれの者でも、その凶悪な犯罪歴でさえも黙認され、歓迎されるのであった。

何故なら、そのドラゴンを操る能力というのは、

ハンドラーひとりの資質を超える能力であり、

海賊が蔓延^{はつ}るこの広い海域を領海とする、

海洋王国にとつては、他国にも恩恵を施す、
国の財産なのだった。

遠くで赤いドラゴンが、

海賊船達に、炎を噴いているのが見える。

「もう、大丈夫だ！」

「やった！」

船上の兵士たちから、歓声が上がった。

海賊船達からの砲撃は一気になくなり、

ベイビルートの乗る船の誰もが安堵のため息をはき、
抱き合っていた。

赤いドラゴンが炎を噴出し続けていると、

ベイビルートの乗る帆船を、追い越していく帆船が5隻。

ストリレツ王国「海賊討伐団」の旗を掲げている帆船が、ドラゴンに追いついたようだった。

国内、国外を問わず、

腕に自信のある、命知らずの荒くれ者だけを集めた集団。

一歩間違えば、海賊たちとなんら変わらないならず者の集まりが、絶えず、この領海を見張っていた。

国に雇われているというだけで、血の気の多さでは、

海賊以上かもしれないかった。

でも、悪を討伐するには、

それと同等か、それ以上の力がないと抑えられないのは事実だ。まさしく、歯には歯を。

海賊船にかなりのダメージを与えた赤いドラゴンは、海賊たちに向かっていく「海賊討伐団」と、すれ違いにこちらに戻ってくる。

ドラゴンの噴く炎は無限ではない。

なので、ドラゴンの海賊襲撃の後は、必ずこうして討伐団がフォローして、海賊を壊滅するのが常だった。

船室にもぐっていたベイビールートの両親、ストリレツ王国の王と王妃、

そして事の成り行きに怯えて泣いていた、
ベイビルートの二人の姉も、甲板に出て来る。

戻ってきた赤いドラゴンが、
王族の乗っている帆船の上で旋回する。

低く海上すれすれまで降りてきた時、
ベイビルートは、そのハンドラーの姿をはっきりと見た。

動物の皮で作った、衝撃に強いであろう袖なしの衣服。
目元に被ったゴーグル。
黒い髪が、ドラゴンの起こす風にたなびいている。
衣服からのぞく、肩や腕のたくましさは、
目を見張るものだった。

王がそのハンドラーに、
甲板上から、叫んで声をかける。
「働きに感謝する！素晴らしい仕事だ！」

その黒髪のハンドラーは、
ドラゴンの上でゴーグルを脱ぎ、
その顔を現した。

髪と同じ黒い瞳、

自信に溢れた強い視線、

そして、快活な笑み。

体は逞しく、

ドラゴンを扱う様は慣れているようだったが、

そのゴーグルを脱いだ顔は、

まだあどけない少年の面影を残していた。

「朝飯前だ！」

国王に怒鳴るように言って、

そのハンドラーの少年は、ゴーグルを被り直すと、

ドラゴンは物凄い煽り風を残して、

海上はるかに飛び去って行った。

ベイビルトは、

その赤いドラゴンと黒髪のハンドラーが去っていた海上を、
いつまでも見ていた。

噂を聞き、ずっと憧れていた存在は、

おとぎ話のように大人たちの作り物ではなく、

実在していた。

ベイビルトは、その目ではっきり見たのだ。
ハンドラーを。

この時から、ベイビルトの中では、

これまでの憧れを通り越し、
己の魂が、焦がれているのを知った。
そして、ベイビルトは、
必ず近づくと誓った。

私は、あの黒髪の少年のような、
ハンドラーになる。

この自分の王国の海の上に広がる空を、
ドラゴンと自在に飛んでみせる。
絶対に。

7歳の少女が、
願いを呟くその口の中に、
血の味がするような誓いを立てたのだった。

訓練

ベイビルトは息を切らし、木の陰へと走りこんだ。

その顔の脇すぐを銃弾が数発、風を切って過ぎていく。

「ちよつと！真面目に本気で撃つことないんじゃないの！」

ベイビルトは木の陰から銃弾を撃ってきた相手に叫んだ。

「本気でやらないでどうする。お前が望んだ事だろう！」

男は答えると、また容赦なくベイビルトに向かって銃を撃った。

今のベイビルトの姿には、城から抜けて来た時に着ていた青いドレスはなく、

白いシュミーズのような下着姿に、黒いブーツだけという出で立ちだった。

長い美しいブロンドの髪は編みこみ、頭の上に丸め上げてある。

腰にはウィブクラックという、2本の長さが違う鞭を身に着けていた。

赤いドラゴンを自在に操るハンドラーに憧れた日から、

10年の月日経ち、ベイビルトは17歳になっていた。

また飛んできた銃弾をそのままよけると、

次の瞬間、ベイビルトは木の陰から飛び出て、

地面に転がりながら、

腰にくくつてある長いほうの鞭の柄を掴み、

片手で勢い良く振り出した。

完全にコントロールされた鞭の先端が、

10メートルほど離れている相手の銃を、その手から叩き落す。

しかし手から銃を落とされた男は、
即座にもう片方の手で三本のナイフを、ベイビルトに向かって投げつける。

ベイビルトは俊敏に体の向きを変えて、飛んできたナイフをよけ、地面に刺さったその内の一本を引っかむと、相手の胸に向かって投げつけた。

ビシリツと鋭い音が響いて、ナイフは相手の胸に突き刺さる。

「良かるう」

相手の男は自分の胸と衣服の間に入れてあった、

厚い木の板に刺さったナイフを手で抜きながら言つと、

ベイビルトは大きく息をついて、その場に座り込んだ。

白い下着は泥にまみれている。

「このストリレーツ王国の第三王女を、本気で殺そうとするなんて！

衛兵が知つたら、バルク、あなた死刑免れないわよ？」

ベイビルトが肩で荒い息をしながら、バルクを見上げて言つ。

「お前、本当に王女か？」

バルクと呼ばれた、毛皮のついた黒い皮のベストにブーツを履いた男は、

苦笑いをしながら、不意を狙ってベイビルトに、

自分の胸から抜いたナイフを投げつけた。

ベイビルトは咄嗟に、手に持っている鞭の柄で飛んできたナイフを打ち払った。

「女ながらに、どこかの国の傭兵になれる」
大きく笑った。

「そついう風に育ててくれたのは、バルクあなただけだね」

ベイビルトは立ち上がると、
毛皮を着ている堂々とした体躯のバルクに近づいて、
その長い顎ひげの生えている顔を見上げた。

バルクが左脇のベルトから違う銃を取り出す。
と、同時にベイビルトは右側に体を回転させ、
バルクの銃を掴んだ手を押さえつけてよけると、
自分の右足を回し上げて、そのかかとをバルクの首元に寄せた。
ブーツのかかところから鋭い仕込みナイフが飛び出している。
少しでもバルクが動けば、ナイフは首に沈む。

「試験は合格かしら？」

ベイビルトが小さく笑って、バルクに聞く。

「まあ、これなら一週間は生き延びれるだろう」

「嬉しいほめ言葉ね。でももう一押し」

足を上げた姿勢のまま、

いつの間にか拾っていた、さっき鞭で打ち落としたバルクの拳銃の
銃口を、

バルクの腹に強く押し当てて、

ベイビルトは片眉を上げてバルクを見る。

「一ヶ月はもつかない」

バルクは両手を肩の上に上げて、肩をすくめた。

ベイビルトは今の戦闘が嘘のような、

17歳の若く美しい笑顔に戻ると、

仕込みナイフをしまった足を下げ、

手に持っていた銃をバルクに返した。

「いいか、俺のように片方が義足のやつは討伐団の中にはいない。それも女と見れば、陵辱^{りようじやく}の相手にしかみていない、脳みそのない野蛮な奴らばかりだ。

そんな猛獣が三百人も、うようよしている中に、

お前は若く美しい女の姿で入っ^いていこうとしているんだぞ。

油断は決してするな」

バルクが強く言う。

ベイビルトは頷いた。

「では、明日の早朝にここで待つ」

バルクが言う。

「本当にいいんだな？」

ベイビルトは真剣な目つきで頷いた。

自分が自分として生きる道は、

もうこれしかないのだ。

「ええ、お願いします」

ベイビルトは言う^{きひす}と踵を返し、

側の木にかけてあつた、城から着てきた青いドレスを取り、

泥だらけの下着のまま、頭を通して着る。

裾の広がった美しいドレスだった。

胸のリボンを留め、バルクにもう一度笑って見せると、

ベイビルトは木立を歩いて抜け、

自分の馬をつないである場所まで歩いた。

編み上げてあるブロンドの髪は、
すっかりほつれて、ベイビルートの顔にかかっている。
きつと顔も下着に負けずに泥だらけだろう。

ベイビルートは気にせず、馬に飛び乗ると城へと戻る道を走らせた。

バルクの存在をベイビルートが知ったのは、
あの赤いドラゴンを操るハンドラーの姿を見てから、
間もない頃だった。

海賊討伐団の初代のハンドラーが怪我により引退して、
城の近くの森に住み着いたと、
城の従者達が噂をしていたのを、
7歳のベイビルートが聞きつけ、
すぐさま従者達にその住処を探させたのだった。
ドラゴンハンドラーに憧れてやまない末の王女のおどけない願いを、
従者たちは微笑ましく叶えてやった。
ハンドラーのサインでも欲しいのかと思ったのだ。

森の家の場所を従者に教わると、
ベイビルートは毎日通って、
その小さい粗末な家の入り口に座り込んだ。
時間の許す限り、長い時は3時間も4時間も。

美しいカールしたブロンドの髪を持ち、

青い瞳の愛らしい7歳という少女が、自分の家の前に座り込み、その願いを口にしてバルクを見上げるのを見て、バルクは戸惑った。

「ハンドラーになりたいの。どうやったらなれるのか教えて」

三ヶ月間、毎日家の入り口に座り込まれて、とうとうバルクは折れたのだった。

ももとの身体能力は、

その辺の男なんかよりもずっと機敏で素晴らしかった。

しかし何よりもベイビルトの能力を甚だしく向上させたのは、そのどうしようもないほどの、

ハンドラーになりたいという熱意だった。

王女という身分を越え、女という性別を超え、

それは絶望的なほどの願望。

10年の間、バルクの容赦ないトレーニングに耐えてきた。

今のベイビルトには、

その辺の海賊数人の相手は、何ていうことはないだろう。

バルクは明日ベイビルトを連れて、

海賊討伐団のドラゴンハンドラー候補としての、

入団の公開試験を受けさせるため、町に連れて行くのだった。

ベイビルトの、一生の願いを叶える第一歩を踏み出すために。

バルクは大きく息をついて、

義足の片足をひきずり家の中に入っていた。
最近のベイビルトの本気の相手をするのは、
非常に骨が折れていた。

決別

城に着き、馬を従者に預けると、
ベイビルトは城の階段を上がって、
中へと入っていく。

顔は泥で汚れ、結ってある髪はほつれている。
ブーツも泥だらけで、歩く床には黒い汚れが後に残る。
城の従者達がベイビルトを見て、
ひそひそと話をしているのを見ながら、
気にせずドレスの裾を手に持ち、
自分の部屋へと向かった。

ストリレーツ王国の第三王女のベイビルトは、
頭が少しおかしいと噂されているのは、
本人も重々承知していた。

毎日のように森へ出かけ、泥だらけになって帰ってくる。
森に住む悪魔に身を捧げたとまで、悪口を言う者もいた。

「明日は決して、出かけてはなりません」
自分の部屋に急いでいるベイビルトを見つけると、
青白い顔をして母親の王妃が、鋭く声をかけてくる。

明日はベイビルトの嫁ぐ日。
三人姉妹の中で、ベイビルトが一番に嫁入り先を決められていた。
まだ17歳だというのに、相手は30も年の離れた小さい山国の王。

それも亡くなった前王妃の後妻。

頭のおかしい王女でも貰ってくれるという人があるうちに、さつさとやっかいばらいをしようという両親の魂胆は、城にいる誰にでも分かる事だった。

酷いとは思っけれど、

ベイビルトは仕方のない事だと思っていた。

これも結局は自分が招いたこと。

自分が決め定めた自分の人生を、生きるためのものなのだ。

何一つ、親である国王や王妃の言う事を聞かずに育った。

幼い頃に抱いた自分の夢のために。

従順な二人の姉達に比べたら、

どうしようもない末娘だったのは、自分でも良く理解していた。

「分かっております」

ベイビルトは王妃に答えて、自分の部屋へ戻った。

部屋に入ると、汚れた姿のまま、

ベイビルトは自室の窓へと歩いて行く。

両手でボタンと窓を開けると、目の前に美しい景色が広がった。

所々にそびえ立つ背の高い美しい岩、

その向こうには青い煌々^{きらめ}海が、どこまでも続いている。

生まれた時から毎日見て育ったこの海を、

見ることの出来ない山国に嫁ぐなど、ベイビルトには考えられなかった。

「この海は私。この国は私の国。私なりの方法で愛し守るわ」
固く自分に誓って、ベイビルーツは海を眺めた。

次の日の早朝。

美しい花嫁のドレスを身に着けたベイビルーツは、
窓から差し込む太陽の光が、
鏡に映っている自分を眩しく照らしているのを見つめていた。

金糸を贅沢に使った純白のドレス。
美しく巻かれたブロンドの髪は、腰までゆったりと下げられていた。
青い瞳は、決心に揺らぎのない光をたたえている。

ベイビルーツは鏡の前から離れると、
クローゼットの中に入れておいた、バルクから渡されていた大きな
カバンを持ち、
自分が17年暮らしてきた、美しい海に見える部屋をしばらく見回
して、
ひとつ息をつくとも部屋から出た。

すれ違う従者達が、今日の美しいベイビルーツを見て、
頭を下げながらも、また違う噂話をしている。
そしてその手に持っている、ウェディングドレスには不釣り合いな、

不恰好なカバンを見て、みな首を傾げていた。

ベイビルトは、早足で城の外へと続く階段を下りると、丁度、一頭の馬を厩舎から引き出してきた従者に出会った。足をますます早めて、ベイビルトはその馬のもとへ急ぐ。「どいて」

ベイビルトが従者に声をかける。

従者が驚いている隙にカバンを持たせ、

ベイビルトはドレスの裾を翻して、馬に飛び乗った。

啞然としている従者の手から預けたカバンを取り上げて、にっこり笑うと、

「有難う」

ベイビルトは言つて、馬を強く蹴った。

「王女さま?!」

従者が素っ頓狂な声を上げて、

ベイビルトが城の外へ、馬と共に駆けて行くのを見ている。

「ベイビルト様!」

振り返らずに、ベイビルトは目的の場所へ向かった。

途中通りかかった海辺の高い断崖絶壁の、眺望の良い場所で馬を止めると、

ベイビルトはカバンと共に馬から下りた。

そして、着ているウェディングドレスを脱ぎ始める。

薄い下着だけになるまで全てを脱ぐと、

ベイビルトはカバンの中からはさみを取り出して、脱いだ美しいドレスを、はさみで切り裂いた。

大きく何箇所か切り裂くと、崖の上から海に放り投げる。他の脱いだ下着類やアクセサリーなども、全て崖の上から投げ捨てた。

この辺りには海賊もいるが、鯨もたくさんいる。海に落ちれば鯨に食い裂かれるのは、ごく自然なこと。

ドレスに合わせてあつらった、美しい銀色の靴も脱ぐと、それはそのまま崖の上に置くことにした。まるでこの靴の主は、ここから身を投げたかのように。

バルクにもらったカバンから、特製の服を取り出す。カバンには、ベイビルトのためにあつらえてくれた服が入っていた。

男物のような動物の皮で出来ている茶色のパンツは、足を通すとまるで皮膚のようにぴたりと、ベイビルトの下半身に張り付いた。

上の羽織る上着も、体の動きを最大限に考えてあるような、体にぴったりとした袖の無い白いシャツ。

今までベイビルトが着てきたどのドレスよりも、まるきり色気の無い格好だったけれども、でも、今までのどのドレスよりも、ベイビルトの鍛錬されているしなやかな肉体のラインを、はつきりと浮き彫りにするものだった。

すらりと伸びた手足、無駄のない強靱なばねを持つ体、

まだ少女の面影を残すような二つの可憐な胸、くびれたウエスト。

ベイビルトはまたはさみを手に持った。

そして、カールしている腰までの美しいブロンドの髪を掴んで、耳の下からばつさりと切り始める。

豊かな金色の房が、

自分で見下ろす、ベイビルトの手の中にあつた。

17年間、ほとんど髪を切ったことは無かった。

ベイビルトは、その手も崖の上から差し出すと、全ての指を開いて中身を海に捨てた。

「さよなら、今までの私」

風に金の無数の糸が舞った。

耳までの散切りブロンドになったベイビルトは、

カバンに残っていた、防寒性の高い、

軍隊の払い下げから買ってきたと聞いていた皮のジャケットを羽織ると、

待たせていた馬に走り寄り、バルクと待ち合わせている場所へ急いだ。

獅子（ライオン）

雑踏。

ここはストリレーツ王国の中でも、

海からやって来る他国の者、海へと出て行く者、

それらがごったになって、ひととき賑わっている港町だった。

ならず者を歓迎する海賊討伐団のカラーが強いせいか、
どう見ても、柄の良い町とは言えなかった。

絶えず、あちらこちらで怒号が聞こえ、
罵声が上がっている。

喧嘩はそこら中で起きていて、
殴られて吹っ飛んで来るならず者にぶつからないよう、
雑踏の中を歩くのも、一苦勞だった。

ベイビルトはそんな人ごみの中を、
バルクの後にくっついて歩きながら、辺りを見回していた。
自分の国でも、この町に来たのは初めてだった。

「討伐団って、こんな感じの人達がたくさんいるの？」
歩きながら、バルクに聞く。
「この中から選りすぐった悪党どもだ」
バルクは答えた。

しばらく人ごみの中を歩き続けると、開けた場所に出た。
広場の中央に、大きいがっしりとした鉄の檻が置いてある。

大きさは10×10メートル位。
高さは5メートル程の高さ。

赤く濡れたその床を、一人のごつい男が、
水をかけて掃除していた。

檻の側に、ぼろぼろのテントを張って、
ドラム缶の中に暖を取る火を燃しつつ、
椅子に腰掛けて、たむろしている数人の男たちに、
バルクは近づいていく。

眼光鋭く、ひげを生やしている者もいない者も、
全てが体の大きい男たち。
胸板は厚く、とても綺麗とは言えない汚れた服から出ている二の腕
は、

どれも筋肉で盛り上がっていた。

中の一人がバルクを見ると、頷いて見せる。
バルクはその男に近づいて行つた。

男達の吸う煙草の煙で、ベイビルートの目に涙がにじんだ。
辺りには男たちが、水代わりに飲んでいる強いアルコールの匂いも
漂っている。

「よう、バルク」

頷いた一人の男が声をかけてくる。

「どうだ、コンドラッド調子は」

バルクも答えながら、男に近づいた。

「今日は一人」

バルクにコンドラッドと呼ばれた、白髪が目立つ茶色の髪をした男が、

親指で首の下に横に一の字を書く。

「死にはしないだろうが、片腕食いちぎられたから、

まともには戻らんだろうな」

肩をすくめて、鉄の檻をその親指で指して言った。

「今月は合わせて二人が檻に入ったが、どっちも使い物にならねえ」
コンドラットは短くなつた煙草を口に銜^{くわ}えて、

煙に目を細めて、ぶつきらばうに言った。

「お前が引退して10年、今もまだ俺を入れて3人しかハンドラーはいない。

俺ももうそろそろいい年だ、早く若いやつが欲しいんだが、

可能性のあるやつを見つけるのは、難しい」

バルクは頷いた。

「だろうな。なかなか良い人材は見つからないだろう」

ふと、コンドラッドはバルクの後ろにいる短い金髪の少女に気がつく、

首を傾げて、

「後ろにいるのは、まさかお前の娘とかって言うんじゃないだろうな」

眉をしかめて言う。

バルクは笑った。

「まさか」

そしてベイビルートを自分の後ろから、コンドラッドの目の前に押し出す。

「ハンドラー候補だ」

バルクが真面目な顔をして言うと、コンドラッドが呆気に取られた顔をして、

ベイビルートの顔をまじまじと見た。

「初めまして」

ベイビルートは、コンドラッドに小さくお辞儀をすると、じろじろと自分を見るコンドラッドから目を伏せた。

女として背の低い方ではないベイビルートでも、コンドラッドを始め、

この辺りにたむろしている男たちは、

皆、ベイビルートが見上げるような背の高さだった。

しばらく言葉を失ってベイビルートを見ていたコンドラッドは、やがて大きな声で笑うと、銜^{くわ}えていた短い煙草を投げ捨てた。

「冗談だろう。俺たちは別にえげつないショーをやっているわけじゃない。」

国の事業の一環として、ドラゴンハンドラーになるやつの資質を試す試験をやってるんだ」

「だからだ」

バルクが真面目に続ける。

一瞬、二人の間に沈黙が流れて、

コンドラッドは首を左右に振った。

「どういう事をやるのか、お前は分かっているだろう?」

コンドラッドが言うのに、バルクは頷く。

コンドラッドはバルクからベイビルートの方に向き直って、

「お嬢ちゃん、ここはあんたのような女の子が来るような場所じゃない。」

女の子はハンドラーにはなれないんだよ。

さあ、このおじさんに家に連れて帰って貰いな」

コンドラッドが言うのに、

「帰る家はもうないの」

ベイビルトは言う。

「私はハンドラーになるためだけに、この10年生きてきた」

ベイビルトは真っ直ぐにコンドラッドの目を見て言った。

「その試験っていうのを、私に受けさせて」

コンドラッドが絶句して、ベイビルトを見る。

そして、またバルクに目を戻して、

バルクも前言を撤回しないのを見て、ため息をつくと肩をすくめた。

「俺は責任を持たないぜ」

コンドラッドが言うと、ベイビルトは頷いた。

「名前は？」

コンドラッドがベイビルトに聞く。

何かの書類に記入するようだ。

自分の名前を言いかけて、ふとベイビルトは口を閉じる。

ベイビルト・オブ・ストリレーツ、それが本当の名前。

でも、国の名を持つ王族の名前だ。

断崖絶壁から身を投げた王女の名前を言うわけにはいかない。

「ベイブ」

ベイビルトは答えた。

「ベイブ（お嬢ちゃん）ね」

コンドラッドが記入する。

「で、苗字は？」

続けて聞いた。

「そんなの無いわ。ただのベイブよ」

コンドラッドは肩をすくめて、

「まあ、いいだろう」

別にベイブが試験に受かることなど、まるきり期待していない口調で、

どうでもいいという風に言った。

ベイビルートは、この瞬間からただのベイブになった。

「ルールは単純だ。あの檻の中で5分間、生き延びればいい」
コンドラッドが広場の真ん中の檻を指して言う。

「降参するのも自由だが、助け出すまでに時間がかかる。
かなりの危険を覚悟して臨んで欲しい。連れて来い！」

コンドラッドが回りの者に声をかけると、
数人の男たちが駆けて行き、
見ていると大きな台車に乗せた何かをこちらに運んで来る。

ベイブは息を飲んだ。

男達が運んできたのは、狭い檻に閉じ込められている巨大な獅子。
その茶色い体は全体に、べつとりと血糊のような黒っぽいものがこ
びりつき、

毛皮はよれて汚れていた。

鼻先に皺を寄せて恐ろしい唸り声を上げている。

赤くめくれている唇の下から、黄色い巨大な牙が覗いていた。
目は片方つぶれていて、

残った眼にはぞつとするような怒りが、炎のように燃えていた。

あの獅子と、その檻に入れということか。
ライオン

ベイブの顔が青ざめる。

ふとベイブは、真っ直ぐ自分を見ているバルクに気がつくと、
一つ鋭く息を吐き、着ていたジャケットを脱いだ。

「手負いだ。下手にナイフや銃で手を出すと返って凶暴になる。
やるならひと思いにやらないと、さっきの男のように腕を食いち
ぎられる」

コンドラッドが本気でやるのかという感じで、

ため息をつきながら言った。

ベイブはさっきまで、檻の中を掃除していた男を思い出す。確かに赤く染まった床を洗い流していた。

白い袖のない体にぴったりとしたシャツ、足に張り付く茶色の皮のパンツの腰の両側に、二本の長さの違う鞭^{ウィップ}が下がっているのを、ベイブは改めて確認する。

そして、ポケットから指先の出る黒い皮の手袋を出して、両手にはめた。

足に履く、黒く重いブーツの足首を軽く回す。

そしてベイブは、檻の方へ歩き出した。

ベイブが檻の入り口を開けてもらうのを待っていると、辺りの空気が、騒然とし始める。

まさか、あの少女が檻に入るのか？

あつという間に騒ぎが辺りに広まり、檻の周りには、柄の悪いむさくるしい男達が、群がるようにして集まる。

ベイブが辺りの野次馬の様子を見回していると、檻の入り口が開けられた。

ベイブは中に入って、檻の中央まで進んだ。

獅子^{ライオン}の入っている檻も、
ベイブのいる檻の入り口に据えられる。

「開始だ」

コンドラッドが言うと、

獅子^{ライオン}の檻の入り口が開けられた。

獅子^{ライオン}はのそりと、狭い檻の開かれた入り口から、
広い檻の中へと足を踏み入れた。

ベイブは短い方の鞭^{ウィップ}に手をかける。

そして、檻の上に向かって鞭^{ウィップ}を勢い良く放った。
鞭^{ウィップ}の先端は、檻の上部の鉄の棒に絡みつく。

次の瞬間、獅子^{ライオン}が、ベイブに向かって飛び掛ってきた。

ベイブは鞭^{ウィップ}にジャンプして掴まると、檻の上に向かって鞭^{ウィップ}をよじ登った。

両手で強く鞭^{ウィップ}を握り締め力を入れると、両足を檻の上に向けて振り上げる。

檻の天辺に届いた両足のブーツのつま先を鉄の棒の間に入れ、
ベイブは鞭^{ウィップ}から手を離すと、檻の天辺から逆さづりになった。

獅子^{ライオン}は、急に姿がなくなった目標に体のバランスを壊し、
はずみで転がり、檻の反対側の鉄の棒に体を打ちつけている。
檻全体が、ぐらぐらと揺れた。

ベイブはもう一本の長い鞭^{ウィップ}をベルトから外すと、
狙いを定めて、獅子の首へと射ち放った。

ベイブの完璧なコントロールの鞭は、獅子の首を捕らえ何重にも巻

きついた。

驚いた獅子^{ライオン}が、体をうねらせる。

ベイブは今放った鞭の柄を、檻の上部の鉄の棒の間をくぐらせて引っ掛けると、

その柄を両手できつく持ち、体重を支えていた足を離して、檻の天辺から鞭^{ウィップ}を引っ張りながら、勢い良く飛び降りた。

体重200キロはあるだろう獅子^{ライオン}の巨体も、

首を絞められた上、その首を絞める鞭^{ウィップ}を引っ張りながら、

5メートル上から飛び降りたベイブの体重の勢いで、

前足を少し宙に浮かす。

鞭^{ウィップ}の長さが足りずベイブの足は床には着かなかったけれど、

その鞭^{ウィップ}の柄にある、普段はベルトに引っ掛けるためのフックを、

檻の横脇の鉄の棒を掴んで引っ掛けた。

フックが折れなければいいと、ベイブは祈りながら、

でも、自分を真っ直ぐに見ていたバルクを信じて、

手を離すと檻の床へ飛び降りた。

服だけではなく、ベイブの鞭^{ウィップ}も、

バルクの特製だった。

獅子^{ライオン}は、首を絞められ微妙に前足を浮かし、

檻の天辺から、鞭^{ウィップ}で吊り下げられているような形になり、

檻の中でもがきながらも、身動き出来る範囲は狭まられてしまっていた。

ベイブはその動く範囲外の檻の隅に退き、

首を絞められ、吊るされて苦しみながらも、

咆哮を上げている獅子ライオンを見て、肩をすくめた。
そして、コンドラッドに檻の柵越しに言った。
「5分、待つのはいいけど、可哀想じゃない？」

「終了だ！」

即様、コンドラッドが叫んだ。

途端、獅子ライオンを運んできた男達が、

ベイブのいる檻の扉を開けてベイブを出し、
獅子ライオンを檻から出すために動き始めた。

「あ、鞭ウィフは、返してね」

檻から出ながら、ベイブが男達に言っているのを見ながら、

「バルク、あれは何者だ」

コンドラッドがバルクに怪訝に言うのに、

「ストリレーツ王国の王女だよ」

バルクは、笑って答えた。

コンドラッドは、バルクの最上の冗談だと思っただけ、
鼻で笑って、ベイブを振り返った。

そして、ふと何かを思い出すような表情になる。

「ダグも、俺が見つけた時は、あんな風に若かった」

コンドラッドが言うのに、

「そのダグに、憧れた少女がベイブだ」

バルクは言った。

コンドラッドは真面目な表情で言う。

「でも、子供だけならまだしも、ベイブは女だ」
バルクは黙っている。

「討伐団に女が入るなんて、お前に想像出来るか？

それも、ハンドラー候補だ」

バルクは首を左右に振った。

「何があっても、責任は取れないぜ。

女に餓えている野獣の住処が、討伐団だ」

コンドラッドが言う。

「ベイブは俺が引退してから、初めてで最後の弟子だ。
心配するな」

バルクが言うと、

コンドラッドは、ふっと小さく笑った。

「10年前、お前に仕込まれたダグが聞いたら驚くだろうよ。
新しい妹弟子が来たってな」

二人は顔を見合わせて、お互いの肩を笑って叩いた。

妹弟子

ベイブが檻から出ると、辺りの野次馬どもが騒然とした。

にやにやしながらベイブを見つめる男どもに、
無然とした一瞥を投げるとバルクの元に戻り、

ベイブは脱いでいたジャケットを着た。

獅子から外された二本の鞭ライオン
ウイプが戻ってきて、
腰に戻す。

「ベイブ、俺と一緒にするのはここまでだ」

バルクがベイブを見て言う。

「この後は、このコンドラッドについて行くんだ」

ベイブは小さく頷いた。

そして、バルクを抱きしめる。

「今まで10年間、本当に有難う」

「どうしても辛くなったら」

ベイブの耳元で、バルクは呟くように言う。

「城には帰れなくても、俺の元へ戻って来ればいい。

いつでも帰って来い」

ベイブはバルクを抱く手を緩めて、

「ドラゴンと一緒に里帰りするわ」

笑って答えた。

ベイブはバルクの長いあごひげに指を伸ばして、

そしてその口の脇に小さくキスをした。

バルクはベイブのブロンドの短い髪を指先で撫でた。

バルクに貰ったカバンをひとつ持つと、

ベイブはコンドラッドと一緒に歩きはじめた。

振り返ると、もうそこにはバルクの姿は無かった。

ベイブは目を地面に落とすと、

気を取り直して顔を上げ、コンドラッドの後を追った。

海賊討伐団の施設は海沿いにあった。

倉庫のような建物がいくつか並んでいる。

海に係留してある討伐団の帆船が6隻見えていた。

他の船は海に出ているのだろうか。

さつきベイブの檻を取り囲んでいた野次馬となんら変わらないような、

柄の悪い体の大きい男たちが仕事をしながら、

コンドラッドとベイブが中に入っていくと、

ベイブをいぶかしげに眺めた。

「分かっていると思うが、ここで働く女はベイブ、お前だけだ。

ご覧のとおり」

辺りを見回して、

「ここには、頭の中まで筋肉で出来ているような連中しかいない。

女と見ると何かしら、お前に構ってくる奴もいるだろう。

一応、命令として後で連中に伝達はするが、身の保障は出来ない」
仕方なさげに言うコンドラッドに、

「分かってるわ。自分の事は自分でする」
ベイブは頷いた。

「ここには今三人のハンドラーがいる。
そして、ハンドラーを追いかけて、帆船で討伐に当たるやつ等が400人。

俺が最年長のハンドラーだ。そして、一応このまとめを任されている。

よろしくな、ベイブ」

コンドラッドが改めて手を出してくる。

ベイブはその手を握った。

「あと二人のハンドラーの中に、黒髪で黒い目をした人がいる?」

ベイブが握手を解いた後、コンドラッドの顔を覗き込んで言う。

「10年前、赤いドラゴンに乗ってたハンドラーなんだけれど」

ベイブの心臓の脈が速くなる。もういないと言われたら、どうしよう。

コンドラッドはベイブの言葉を理解すると、

「ああ、ダグの事だろう。ダグラス・マーレイ。知り合いか?」

「いいえ、ただ小さい頃、海賊から助けて貰った事があって」

コンドラッドは頷いた。

「俺は少し用事がある。この建物の中に食堂があるから、

中に入って食事をするといい。後の詳しい打ち合わせは、食堂でしよう」

ベイブをある建物の前まで連れてくると、

コンドラッドはベイブを置いてどこかへ行った。

潮風に焼けている石の古い建物。

ベイブは中に入って行った。

カバンを手にして廊下を歩く。

すれ違う男どもが全て、短いブロンドの少女のベイブを見ると立ち止まった。

ベイブはそれを気にせず、食堂を探して歩き続ける。

「よう、お嬢ちゃん。どこへ行くんだい？」

禿げた頭の汚れたランニングを着ている太った男が、
とうとうベイブに話しかけてきた。

「食堂を探してるんだけど」

ベイブが言くと、

「食堂？何でまた？」

にやりと笑って、ベイブに近づいて言う。

「今日からここで働くからよ。働く者達のための食堂があるでしょ？」

男はあっけにと取られて、大笑いした。

「お嬢ちゃんみたいな娘っこが、一体ここで何をしようっていうんだ？」

「それは後で分かるわ。食堂はどこ？」

ベイブが物怖じせずに言くと、男は素直に食堂の方を指差した。

「有難う」

ベイブが言ってその方へ歩き出すと、面白がっているのか、
その禿げた男もついて来た。

食堂につくまでには、ベイブの後をついて来た男は8人になっていた。

ベイブは後ろを振り返りながら、ため息をついた。

入り口を入ると、そこはなんだかとても薄暗い部屋だった。まるで、場末のバーのような雰囲気だ。漂っている煙草の煙、酒の匂い、

古臭い木のテーブルと椅子にかけている人相の悪い男たち。

食堂ってというような代物じゃないのは、確かね。

ベイブは心の中で呟いて、

げんなりしながら空いているテーブルを探すとカバンを置いて、食事を配っているカウンターに歩いて行った。

テーブルは7割がた埋まっていた。

数十人の男達がいるだろう。

やがて、そこにいる男達の全ての視線が、

ベイブに集まりだした。

ベイブは辺りの様子に神経を張り巡らしながらも、トレーに料理の皿を受け取る。

ベイブに皿を差し出すコック姿の男ですら、

口に煙草をくわえ、目つき悪くベイブを睨んでいた。

ベイブは刺さるような多数の視線から目を伏せながら、自分の荷物を置いたテーブルに戻る。

皿の料理も、骨のついたままの肉の煮込みで、ベイブの食欲をそそらないものだった。

椅子に座ろうとしていると、

ふと、あの禿げて太っている汚いランニング姿の男が、
ベイブに近づいてきた。

「お嬢ちゃんよ、ここがどんな場所だか知ってるんだろっな」
にやりと笑うと、ベイブに体を寄せてくる。

煙草のやにと、酒の臭い。

ベイブは顔をしかめた。

そしてベイブは自分の尻を、その男が撫でているのに気がついた。
皮のパンツの上からでも、嫌悪に身の毛がよだつ。

ベイブは尻を撫でている男の手に自分の手を伸ばすと、

その親指だけを握り締めて、体の体重を全てかけて捻りあげた。
苦痛の悲鳴を上げて、その禿げた男はあっけなく膝を床につく。

ベイブは体の向きを変えると、親指は掴んだまま、

その男の股間を、思い切り自分の重いブーツのかかとで蹴り上げた。
倒れ込むその眉間にも、もう片方の足のかかとで蹴りを入れる。

ベイブのブーツにはわざと重りを仕込んである。

敵を蹴り上げた時のダメージが大きくなるようにだ。

禿げた男は何の抵抗も出来ず、

そのままベイブの足元に崩れ落ちて動かなくなった。

辺りの雰囲気騒然とする。

もう一人のごつい体をしたモヒカン頭の男が、
指を鳴らしながらベイブに近づいてきた。

ベイブは腰の短い方の鞭ウエップに手をかけて、
その男に向き合った。

男が勢いをつけてこちらに来るのを見ると、

ベイブは自分の料理の皿を男に向かって投げつけた。

男がひるんでいる間にベイブはテーブルの上に飛び乗る。

そしてモヒカンの男に向かって鞭ウィフを振ると、

その首に巻きつけた。

男がベイブに飛びかかるうとする瞬間、

ベイブは鞭ウィフを両手に強く持ったまま、

男の肩を蹴飛ばして、遠くに飛んだ。

ベイブが着地すると、モヒカンの男は後ろに引き倒されて体のバランスを崩し、

首を絞められて、なんとか立っている状態だった。

苦しそうなうめき声が上がっている。

ベイブは持つている鞭ウィフの柄で、

腕を大きく回して後ろから、その男のこめかみを思い切り殴った。

男の体がぐらついて、床に膝をつく。

もう一度、ベイブは反対に体を回すと、

足で男の首に蹴りを入れた。

即座に、モヒカンの男も動かなくなる。

ベイブは鞭ウィフを男の首から外すと、

もう一度、憎らしげにその頭を蹴り上げた。

そして、ベイブは鞭ウィフを手にしたまま、

辺りを見回した。

次の相手が出てきたら、とことんやってやるつもりだった。

倒れているどっちの男も、

ベイブよりもはるかに大きい体の荒くれ者。

それが一瞬でベイブに倒されたのだ。

様子を息を飲んで見ていた男どもは、
目の前の光景が信じられないようで、ただ固まっていた。

ふと、どこかの席でやじるように口笛が鳴る。

ベイブは、その席を目で探した。

頭に血が上っていた。

女だからって舐めたら、容赦しない。

そして、口笛の鳴った奥の方のテーブルに向かって、
その辺にあったフォークを掴んで、ベイブは投げつける。

口笛の主は、ベイブの投げたフォークを顔の前で掴み取り、
真っ直ぐにベイブを見た。

バルクでもなければ、絶対にベイブの投げたフォークはよけられないはず。

ベイブはいぶかしげに、自分の投げたフォークを掴んだ男を見た。

黒い髪、強い視線をたたえる黒い瞳。

その唇には面白そうな笑みが浮かんでいる。

ベイブは息を飲んだ。

それはあの顔だった。

日に焼けた肌、10年前のあの日の幼さはもう無く、

すっかり大人の男の顔になっていたけれど、

ベイブが一日たりとも、

決して忘れた事のなかったあの顔だった。

焦がれて、焦がれて。

いつかその顔の主に近づけることだけを考えて、
ベイブはこの10年を生きてきたのだ。

ベイブはよろよろと歩き出すと、
そちらの方へ近づいて行った。

今、

このたった今が、
逃げないように。

ベイブは走り始める。

物凄い剣幕でこちらにやって来るベイブに、
黒髪の男は驚いて、椅子から立ち上がった。

ベイブは、その黒髪の男のもとにたどり着くと、
背伸びをして、その首に思い切り抱きついた。

「会いたかった!」

ベイブが叫ぶように言う。

ベイブのその声を聞いた途端、
辺りの男どもから、ブーイングともため息とも取れる、
大きい声が上がった。

「なんだよ、ダグの女かよ」

「だったら、最初からそう言えよ」

「そんなんじゃないよ！」

ダグは辺りに叫びながら、

自分の首にしがみついているベイブを引き離す。

「お前、一体何なんだよ」

怒鳴るように言って、ベイブの顔を覗き込んで、

ダグは絶句した。

ベイブは泣いていた。

ぼろぼろと涙は、後から後から瞳から流れ出てくる。

ベイブはもう一度、ダグの首にしがみついた。

ダグはため息をつくと、

ベイブにされるがままになって、そのまま立ち尽くしていた。

コンドラッドが食堂に入ってきた。

床に倒れている二人の男を見て、首を傾げる。

でも日常茶飯事の出来事なので、コンドラッドは別に気にせず、
ベイブの姿を探した。

そして、ダグの首にしがみついているベイブを見つけると、

片眉を上げてダグを見る。

「いや、俺は別に何もしてない」

ダグが両手を上げて言うと、

コンドラッドはダグに抱きついているベイブの腕を掴んで、

「ベイブ、大丈夫か？」

ベイブに話しかけた。

ベイブはコンドラッドに気がつくつと、

涙が流れるままに頷いて見せた。

ベイブの涙を見て、

コンドラッドがダグを睨む。

「だから、俺は何もしてないって。

つか、あそこに倒れてる二人の男は、こいつがぶちのめしたんだぞ？」

倒れている男たちを指して言うダグに、

コンドラッドは何も答えずに、

ダグが座っていたテーブルにいるもう一人に目を向けると、こちらに来るように手振りで合図をする。

長い銀髪、顔は化粧をしているのか、唇には紅が塗られている。

どうみても体は男のように大きいのに、着ている服は女のものだった。

その見た目は異様だったけれど、美しいと言えない事も無かった。

「紹介しよう。新しいハンドラー候補のベイブだ」
コンドラッドが言う。

「ベイブ、この黒髪がダグだ。ダグラス・マーレイ。

さっき聞いたな。こいつで間違いがないか？」

コンドラッドが言っただけでベイブを見るのに、ベイブは大きく頷く。
ダグはわけもわからず、眉をひそめているだけだった。

「私はドーン・バルンタイン」

銀髪の女装の男が、ベイブに言っただけで小さく微笑む。

「このダグが来て以来の久しぶりのハンドラー候補が、

まさか女の子とはね。それだけやっぱり、

今の時代は、男がだらしなくなっているのかしら。

一緒にお仕事が出来ると言ってくるのを、楽しみにしてるわよ」

ドーンが言うと、ベイブの頬に唇を寄せた。

「あなたの闘いぶり、かつこよかったわ。女はああじゃなきゃね」

ベイブはたじろぎとして、

ドーンに小さく笑い返すだけだった。

「ということで、久しぶりのハンドラー候補だ。

ダグ、貴重な人材を泣かせたんだから、

お前がこれから面倒を見る」

コンドラッドが言うと、

ダグは納得いかないような顔をして、

「俺は泣かせてないっての。勝手にこいつが泣いたんだよ！

それに何で俺が面倒をみなきやいけないんだ？

俺は女は嫌いだ。面倒くせー生き物だしな」

コンドラッドが、ふと笑って言う。

「ただの女じゃない。ベイブはバルクの弟子だ。

お前の妹分なんだよ」

ダグがコンドラッドを見る。

「バルクが引退してから、10年かけて育てたそうだ」

ダグが驚いてベイブを見ると、

ベイブは頷いて、小さく笑った。

すれ違い

ダグはベイブをじろじろ見た。

「バルクに10年か。で、お前一体、いくつなんだ？」

ダグの無遠慮な視線に少しむっとしながらも、

「17才よ」

ベイブは答えた。

ダグは呆れたように大きく笑って、

「7才の頃から女がバルクに師事するなんて、一体お前何者だ？」
ベイブを見て続けて言った。

「あなたには関係ない事でしょ」

ベイブの長年の憧れの人に会えた感激は、ダグの意地悪い口調にだんだん薄れていく。

「お前ら、聞いてただろう！この17才のガキはこう見えても、バルクに10年師事してたんだと！到底、お前たちの敵う相手じゃない。」

ま、そこに転がってる奴みたいにならなくなきゃ、近寄らないことだな」

ダグは食堂中の男たちに叫んで言うと、コンドラッドを見て言った。

「一回りも年の違う妹弟子だかなんだか知らないが、

初代の偉大なるハンドラーのバルクに10年も習っていたなら、

俺が改めて仕事を教える必要もないだろう」

そしてちらりとベイブを見て、

「俺は基本的に、女は嫌いだ。」

必要な時には、町に行って金を出して買えばいくらでも上玉が買

える。

余計な話をしなくて済むような都合のいい女がな。

仕事でも、そんな小娘なんかに関わりたくないんでね。

悪いが、子守はドーンにでも頼んでくれ」

ベイブの顔から血の気が引いた。

「あなた、意地悪で最低な人ね」

怒りをこらえた低い声で、ベイブが言う。

ダグは息を大きく吐いて、

「俺の何を一体知ってるってんだ。

たった今初めて会ったお前に、そんな風に言われる筋合いはない」
言い返した。

ベイブの頬が怒りに燃える。

「コンドラッドさん、こんな人に仕事を教わらなくても、

私一人の力でハンドラーになってみせるわ。大体のことはバルクにも聞いているし、

詳しい手順と方法だけ教えて下されば、結構ですから」

コンドラッドに強く言うと、

ベイブはその場を離れて食堂の一番端のテーブルまで歩いた。

椅子に腰をかけて、コンドラッドがやって来て、前に座るのを待つ。

7才のベイブの初恋。

ベイブは食堂を出て行くダグの、背の高くたくましい背中から目を

そらした。

瞳には、さつきとは違う種類の涙が浮かぶ。

この10年、ずっと憧れて来た人が、
あんなやつだったなんて。

ベイブは血がにじむほど、唇をかみしめた。

絶対、負けない。

あいつを越すハンドラーになってやる。

ベイブは瞬いて涙をこらえると、
コンドラッドの話に聞き入った。

コンドラッドが話を終えて席を立つと、
そのままテーブルにいたベイブに、一人の男が近づいてきた。
ベイブがはっと顔を上げる。

それはカウンターの中で料理の皿を配っていた、
コック姿の男だった。

目つきも相変わらず良くはないし、煙草も銜^{くわ}えたままだ。でもその手には、

ハムとレタスのサンドイッチと、じゃがいもを揚げたものがのっている一枚の皿を持っていた。

もう片方の手には湯気の立っているマグカップ。

「バルクの弟子だって？」

コック姿の男がベイブに言って、テーブルの上に皿とカップを置いて言った。

「ええ」

ベイブが頷く。

「奴には若い頃、だいぶ世話になったんだ。今も元気なのか？」

男が自分の煙草の煙に目を細めて聞くのに、

「元気よ。ストリレーツ王国の城の近くの森に一人で住んでるわ」

「そうか」

男は口の端を少し上げて笑うと、

「ベイブって言ったな。何も食ってないだろう。」

さっき渡した料理の皿は、あそこで伸びてた奴に投げつけてたしな。

しかし、あれは痛快だった」

コックの男は笑った。意外に笑顔が似合っていた。

「良かったら、これ食いな」

思わぬ優しさに、張り詰めていたベイブの肩の力が少し抜ける。

「有難う」

につこりと微笑んで、ベイブは皿を受け取った。

「ダグは、なんていうか」

肩をすくめて、男は続ける。

「悪いやつじゃないんだが、人見知りをするっていうか。きつとあんたの存在に慣れて来れば、もう少し当たりも柔らかくなるだろうよ。」

なんせ、女つてものに免疫のないやつだから」

ベイブは力なく俯いて、男のために無理やり小さく笑って見せた。

「俺はこの食堂の専属コックのライスだ。大した料理は作れないが、これからは、少しお嬢ちゃん向けのメニューも考えてみるよ」

見た目と違う優しい言葉に、ベイブの目がうつすらと潤む。

「本当に嬉しいわ」

ベイブが言っと、一つ頷いてライスは戻っていった。

男のくれたマグカップの中身は、

ホットミルク。

城にいた昨日までは、毎日寝る前に、

従者がベイブのベッドまで持ってきたものだった。

今頃、城ではどんな騒ぎになっているだろうか。

嫁入りから逃亡したベイブを、

王と王妃はどう思っているのだろう。

嫁ぎ先の王はどう思っているのだろう。

切り裂いたドレスは、海岸で見つかっているだろうか。

色々な思いが次々に浮かんでくる。

結局、やはり私は、

我がまままで自分勝手なだけの人間なんだろうか。

ダグへの盲目的な憧れから、こうして目が覚めてみると、
一国の王女が自分の義務を放棄して、自分の夢だけを追いかけるな
んて、

本当は許されるものではないのだろうとも思う。

人は一体、何のために生きるべきなのか。
自分のためなのか、人のためなのか。

人に背いて自分のために生きるのと、
自分の気持ちに背いて人のために生きるということは、
どちらが正しい道なのか。

いくら考えても、

今は答えが見つからない。

ベイブは頭を振って考えるのをやめると、
サンドイッチを手にとって齧った。

ハンドラーになるための条件は、
ハンドリングするドラゴンを手に入れること。

当たり前と言えば、至極、当たり前なことだ。

それには海に出て、小さな船で片道丸一日かかる航海をして、
聳え立つ岩からなるドラゴンの生息する島^{そび}に行き、
ドラゴンの巢から、飼育する卵を盗んでこなければならぬ。
ハンドラーになるには、まずこれが必須だった。

勿論、バルクに話は聞いていたし、
それ向けの訓練もしてきた。

ただ、コンドラッドは数人の助っ人を連れて行くようにと、
ベイブを説得したのだ。

この討伐団の中から、少なくとも3人は連れて行くようにと。

ベイブは断固として、コンドラッドに抗議した。
こんな風に自分を襲うような輩^{やから}に、助っ人なんて頼めない。
一人で十分だと。

そこですれ違いが出来た。

ベイブが助っ人を連れて行く事を承諾するまで、
ベイブをハンドラー候補として、認めないと言われた。

通常、ハンドラーはドラゴンと一緒に寝起きをするため、
他の討伐団の400人らとは別格の扱いを受ける。

一人一棟、大きいドラゴンの飼育棟が連結しているコテージを与え
られる。

一人暮らしには十分な大きさの家だ。

ハンドラー候補の試験に合格したベイブにも、もちろん、その用意はあったのだが、

コンドラッドのいう事を頑^{かたく}なに拒むベイブに、コンドラッドは肩をすくめて言った。

「ならば、しょうがない。ドラゴンの卵を入手するか、

この申し入れを受け入れるかしなければ、

他の討伐団の団員と同じ扱いになるが、それでもいいか？」

「もちろん」

ベイブは頷いた。

「ハンドラー候補扱いになるまでは」

コンドラッドが続けた。

「他の400人の者達と、変わらないオペレーションの仕事をしてもらう。」

明日からは、ドラゴンのえさと排泄物の世話だ」

ベイブは言われて、

「面白そうな仕事だわ」

あくまでコンドラッドに折れずに、答えたのだった。

用意が整い次第、

一人で海に出ようと、ベイブは思った。

そのためには装備を整えなければ。

道具はきつと探せば見つかるはずだ。

今夜の休む場所は、しょうがない。

他の団員と一緒にの部屋。

一部屋に10人近くの男達が寝ている部屋に、

ベイブも寝るしかなかった。

ベッドだけが整然と並んでいる部屋。

空いているベッドを探して、バルクから貰ったカバンを置いた。

ベッドに腰掛けて、部屋の中を見回すと、

男達は見るともなく、ベイブを意識しているのが分かる。

今夜は寝られそうにもない。

ベイブはため息をついた。

いくら腕に自信があっても、
眠ってしまったては闘えない。

「ベイブちゃん？」

ふと、雑魚寝部屋の入り口で声がする。

「ここににいるのかしら？」

顔を上げて、部屋の入り口を見ると、

あのこつい体に女装をしている、長い銀髪のハンドラーの一人のド
ーンが、

部屋の中を覗いていた。

そして、ベイブの姿を見つけると、

「こんな野蛮な猛獣みたいな男達と一緒に寝るなんて、

私がそんな事はさせないわ」

ドーンが脅すように辺りの男達を見回す。

見られた男達は、みな恐れて身をそらした。

確かに、言葉は女言葉で柔らかいけれど、

見た目はある意味、この部屋にいる誰よりもぎよっとするものだったし。

それに、ドラゴンハンドラーなのだ。

ここにいる全ての男たちの上役だ。

ドーンはベイブに、近づいてきて、

「さあ、行きましょう。」

ここよりは安全に眠れる場所があるから」

ベイブのカバンを手に持ち、ベイブの手を掴んでドーンが言った。

「あの、有難うございます」

ベイブは言って、ドーンと一緒に部屋から出た。

「ねえ、一つ訊いていい？」

廊下に出て、ドーンがベイブを見て言う。

「ずっと気になっていたの。」

どうして、あなたは食堂でダグに抱きついて泣いたの？」

ベイブは立ち止まり、俯いた。

「初めて会ったんでしょう？ダグはそう言ってたわ」

ベイブは、ドーンに顔を上げると、

「7才の頃、ダグさんに海賊から助けられたんです。

危機一髪でした。家族もろとも、死にかけました。

でも、赤いドラゴンに乗ったダグさんに助けられて、

そして、颯爽さっそうと笑っていたあの顔をみて」

ベイブは、苦く小さく笑った。

「憧れたから。彼に近づきたくて、

ハンドラーになりたくて、10年ずっとそれだけで生きてきたん

です」

ベイブは、また自分の目に涙が浮かぶのを、笑顔を浮かべてごまかした。

「馬鹿みたいでしょう？ダグさんにとっては、

私なんて、仕事を教えるのさえ迷惑なたんなるガキなのに」

ドーンはベイブの言葉に微笑むと、

ベイブの短いブロンドの髪に手を伸ばして、そつと撫でた。

「ある意味、運命かもしれないわね」

ドーンが言う言葉がわからずに、

でもベイブは、ドーンに背中を押されるがままに、

廊下を歩き続けた。

肖像画

ドーンに連れられて、ベイブは建物から一旦外に出る。

夜の海は暗く、

湾岸沿いの町の光が、ぐるりと遠くまで小さく瞬いて続いていた。

ドーンは黙って、ベイブの肩を抱いて歩いている。

やがて、大きな建物にたどり着いた。

数えると、奥に数棟あるようだった。

常夜灯のついている一番手前の棟の扉に行くと、

ドーンはこぶしを作って、ドンドンとノックした。

しばらくして扉が内側から開く。

シャワーを浴びていたのか、上半身裸で濡れた黒髪をタオルで拭きながら、

ラフなパジャマのようなパンツを履いているダグが、顔を出した。

ベイブは驚いて、咄嗟に下を向く。

「この子、しばらくあんたのところに置いてやりなさいよ」

ドーンは言うど、ダグの返事を待たずにベイブの腰に手を回して、ずかずかとダグを押しわけ、部屋の中に入って行った。

「おい、何だよ、ドーン！ちょっと待てよ！」

ダグが慌てて追いかけてきた。

それを無視して、ドーンは部屋の中を見回す。

黒い大きいソファが二つ、黒いテーブルが一つ、書棚、書き物の机。

ソファの一つをずるずると持ち上げると、

ドーンは次の部屋に続く扉を開けた。

「一体、何をしてるんだ」

ダグがドーンに強く言う。

「あんたのところは、大して物も無いから、

何にも使っていない空いてる部屋があるでしょう？」

そこをベイブちゃんに貸してやりなさいって言うてるのよ」

ドーンは怪力で、ソファを肩に担ぎ上げて隣の部屋に運び入れながら言った。

「あんな脳みそこっ足りない野獣の中になんか、寝せられないわよ。一人一人はカスでも、束になったらいくらベイブちゃんでも敵わないもの」

ドーンは言いながら、そのソファを隣の部屋の真ん中に置く。

壁につるしてあるランタンの火をとすど、がらりとしている部屋を眺めて、

ドーンは肩をすくめた。

「本当に何にもないわね」

「お前のところに置いてやればいいだろう？」

同じ造りの部屋なんだ」

ダグが言うど、

「私のところはお洋服がたくさんあつて、一杯なのよ」

自分の着ている紫色のストンとしたデザインのドレスを見下ろして、

「これだけでも色違いで8着あるんですもの。私の部屋は満杯なの」

「だからって、何で俺のところに、こいつを泊めなきゃいけないんだ？」

ダグが肩にタオルを下げて、ベイブをアゴで指して言う。

「ベイブちゃん、いいからあのソファに今夜は休みなさい。

奥にちゃんとバスルームも、もうひとつあるからね」

言うて、勝手知ったる風に簡易キッチンへ行き、

沸かしてあつたお湯でカップにお茶を入れると、ベイブに渡した。

につこり笑つて、ベイブの肩を隣の部屋に向かって軽く押す。

ベイブはダグをちらりと見て、ドーンに頷くと部屋の中に入ってい

った。

「おい、ドーン」

ダグが納得いかないように、ドーンを睨む。

「あら、なら」

ドーンはダグを見て、

「これいらないのね。新作なんだけど」

ドーンが言って、服のポケットから何かを取り出す。

それは一枚の肖像画。

「新しいのがあったのか？」

ダグは途端に口調が変わって、ドーンの持っている肖像画に見入った。

ベイブは隣の部屋のやりとりを聞きながら、ソファに腰掛けてカバンを自分の脇に置く。

ここなら寝られそうだとほっとして、渡されたお茶を飲んだ。

ガキ扱いされている自分は、そういう目的でダグに襲われる心配もないだろう。

「市場の絵師に頼んでおいたのよ。ほら、今日、お嫁入りになられたじゃない？」

その記念でたくさん注文があったようだから、一枚取っておいてくれって頼んだのよ」

ドーンが言くと、

「これは美しい。青いドレス姿の絵は初めてだ。ドーン、恩に着る。ベイブ、しょうがない。しばらくそこを使ってもいいぞ。ドーンに礼を言っただな」

ダグがご機嫌な声で、ベイブに言った。

ベイブが隣の部屋からお礼の言葉を言っていると、

ダグはまるで聞いていないように言葉を続ける。

「しかし、１７歳でお嫁入りとは。何故上の二人の姉王女達がまだ嫁いでいないのに、

第三王女のベイビルト様だけ、お嫁入りになったんだ？

もうあの麗しいお姿を見られないと思うと、がつくりくるよ」

ダグの言葉を聞いて、ベイブは飲んでいたお茶を吐き出した。

そんなベイブの方を、いぶかしげにダグが見る。

「お前、きたねーな。何やってんだよ」

ベイブはお茶を置くと、ダグとドーンのいる部屋に戻って、

「すみません、私にも見せてください」

二人が眺めている絵を覗き込んだ。

美しくカールした、長い腰までのブロンドの髪。

少し俯き加減の目を伏せた横顔。

上品に頬に片手をあてて、何か物思いにふけっているような姿。

この美しい青いドレスのデザインには、見覚えがあった。

脱いだこのドレスを木に引っ掛けて、下着姿でバルクとの訓練にいらしたものだ。

「これ・・・」

ベイブが絵を見て呟くと、

「ダグはね、昔まだハンドラーになりたての時に、

王族が乗った船を海賊から守ったのよ。

その時に、まだお小さかった末王女のベイビルト様を見かけてね、

あまりの愛らしさにそれ以来、すっかりファンになってるのよ」

ドーンが言って笑う。

「本当に愛らしいお方だった」

ダグが絵に見入って続けた。

ベイブは呆気にとられていた。

ダグが私のファンだって？

ベイブが絵を見て、続けて言う。

「こんな物を市場で売ってるんですか？」

「こんな物ってなんだ。王室の三姉妹の王女は、国民のアイドルだぞ。」

国民は、みな誰かしら、王女の三人の方の内のだなたかのファンだ」

ダグが憤然と言う。

驚いて感心しているベイブに、ふと、ドーンが思い出したように言った。

「そう言えば、ベイブちゃんもダグに助けて貰ったって言ってたわよね？

小さい頃、海賊から守ってもらったって。それでダグを見かけて憧れて、

ハンドラーを目指したって」

「はい、まあ」

ベイブが苦笑いをして、ドーンを見て答えると、ダグがベイブを見て、首をかしげた。

「悪いが、覚えてないな。」

敵の海賊側の船には、お前に似たような子供がいた気はするがな。男の頭をブーツのかかとで蹴飛ばすような」

言って大きく笑った。

「でも、ベイブちゃんもブロンドなのよね。そして名前も似ている」ドーンがふと、思いついたように言う。

「同じブロンドでも、輝きが違う。こんなにざんぎり頭でもないしな。」

ドーン、一緒にするな」

ベイブはダグの王女への思い入れの凄さに、噴出した。

「一体、ダグさんは王女様のどこがお好きなんですか？」

「この憂いを含んだ表情と、姿形の美しさだ。」

可哀想に、王族に生まれたばかりに、政略結婚させられたのだから」

頭がおかしいと思われていたから、
やっかい払いされただけですけど。

「あっ！」

ベイブは思い出して、思わず小さく叫んでしまう。

「何だ」

ダグが言って、ドーンもベイブを見る。

「い、いえ、何でもありません」

ベイブは言っと、与えられた部屋に戻った。

「では、失礼して休まさせて頂きます」

ベイブが言って扉を閉めると、ダグはこちらを見ずに頷き、
ドーンは小さく手を振って見せた。

あんだけ執心の第三王女が、その結婚を嫌って、
崖から飛び降りて自害したと知ったら、ダグはどうするだろうか。
気の毒になって、ベイブは肩をすくめた。

仕事

ダグに借りた部屋には、別個でトイレとバスルームがついていたので、

シャワーを浴び、服を着替えて洗濯をした。

ベイブは城を出てから、初めてブーツを脱いで、カバンに入れてあったゆったりとしたシャツに着替えて、心地がついていた。いつも腰につけていた鞭ウィップも外して、カバンと一緒に床に置いてある。

毛布と枕はドーンが持ってきてくれたから、城の自分の部屋のベッドというわけにはいかないけれど、ソファといえ、十分快適だった。

あの雑魚寝部屋で眠るのに比べたら、ダグの住まいとはいえ、扉がついている一人の部屋。リラックス出来て、ベイブは安心して眠りについた。

長い一日だった。

ふと。

意識が呼び戻される。

荒い息。

ハアハアとせわしない、荒い息だ。

ベイブの耳元に生暖かい吐息が吐かれる。

すぐ近く。相手の毛が触るのか、
こめかみ辺りがくすぐりたい。

寝付いてすぐの、深い眠りに入ろうとしていた矢先だった。

ベイブは、ハッと目を開ける。

部屋のランタンの明かりは、つけたままにしておいていた。

ベイブは自分の顔に近づいている物を見た。

まさか、ダグが？

至近距離に、二つの丸い黒い目。

大きな茶色い毛むくじらの顔。

赤い舌。

白い牙！！

人間じゃない！

ベイブはソファの上から転がり落ちて、悲鳴を上げた。

床に転がり落ちたベイブを追って、
またその大きい毛むくじらの顔をした生き物が飛んでくる。
そして、ベイブにのしかかり顔をべろべろと舐めた。

ベイブの悲鳴にダグが起きたのか、
一部屋挟んだ、向こう側のダグの寝室から人が出てくる音がする。
こちらに歩いてきて、ベイブのいる部屋の扉を叩いた。

「こら、ジャスパー。こっちに來たら駄目だろう」

相変わらず上半身裸のままのダグは、ベイブの部屋の中を見て、

「悪い、こいつのこと言っただけだったな。俺の犬なんだ。

閉まってる扉も開けちゃうもんでな。でも人懐こいから、

悪さはしないんだが、驚かせたみたいだ。悪かった」

「犬？」

ベイブは改めて自分の顔を舐めているものを見る。

言われて見れば、それは茶色の長い毛がわさわさと生えている、モップのような犬。

かなり大きい犬だ。ベイブと同じくらいの体重はあるのではないかのしかかられてベロベロ顔を舐められるまま、ベイブは啞然としている。

「こら、ジャスパーこっちへ来い」

ダグが言くと、ジャスパーはベイブの上からどいて、

太く大きい尻尾をぶんぶん振りつつ、

何度もベイブを振り返りながら、ダグの元へ戻った。

ダグが扉を閉めて、犬と一緒に自分の寝室へ戻っていく。

ベイブは大きくため息をついて、肩をすくめた。

そして、もう一回、

呆れたように独り大きく呟く。

「犬！」

ベイブはバスルームに行くと、

犬のよだれでべたべたになった顔を洗った。

ダグラス・マーレイ。

ストリレーツ王国に、

今たった3人しかいない貴重なドラゴンハンドラーの一人。
背は高く体はたくましく、黒い髪と精悍な黒い瞳をした美形な青年。
ベイブより一回り年上だというから、29歳のだろうか。

無愛想で、意地悪。女嫌いだって言うくせに、

ファンの王女の肖像画集めるような意外な面があったり、
その上、大きい犬まで飼ってる。

一体、ダグって人はどんな人なんだろうか。

「って、第三王女って私だし！」

ベイブは聞こえない程度に声を出さずに、
でも、搾り出すように部屋の中で叫ぶ。

「肖像画集めるくらいのファンで、どうして気がつかないのかって
いうの。」

長いブロンドの髪とドレスしか見てなかったんじゃないの？
ダグって人は本当に、理解不能だわ」

首を横に振って、ベイブはもう一度ソファに横になった。

ハンドラーとして、まだ認めて貰えていないベイブの明日の仕事は、朝食前の早朝の一仕事なのだった。
三頭のドラゴンの食事の用意を、コンドラッドから言い渡されていた。

まだ日が昇りきらぬうちに、ベイブは支度をした。

昨日着ていたものと同じ服が、3着あった。

干してあるものはそのままに、新しいものを身に着ける。

白い袖なしの体にぴったりと張り付くシャツと、皮のパンツ。

そして、足元はいつものブーツ。

鞭は念のため、短いものだけ身に着けていく。

これ一本あれば何かあったとしても、ここでは対処出来るだろう。

扉を開けて、居間になっている真ん中の部屋へと出る。

ダグが寝ている部屋の扉は静かに閉まっている。

まだ寝ているのだろうか。

ベイブは入り口のドアを出て、仕事場へと向かった。

夜と打って変わって、海は明るい色を湛えている。

朝焼けの赤い雲が、海に映って赤く染めていた。

気持ちのいい潮の香りを胸一杯に嗅いで、ベイブは深呼吸した。海沿いの王国の王女に生まれてから、毎日の習慣。

この潮の香りが嗅げなくなる時があるとしたら、

それはベイブの命が終わる時かもしれない、そんな事を思う。

ふと、海岸を見ると、

無人の砂浜に、ぽつりと人の姿がある。

そして、人でないものの姿も。

よく見ると人はダグで、人でないものはジャスパーだった。

ダグは昨夜のような上半身裸ではなく、部屋着のようなルーズな上下の服を着て、

朝焼けの砂浜を、ジャスパーと走っている。

時々、じゃれつくジャスパーに砂の上に押し倒されたりして、大きく声を上げて笑っていた。

その魅力的な笑顔は、ベイブが7つの時海賊船に襲われたあの日、ダグが国王に向かってゴーグルを外した時の、快活で眩しい笑顔と同じものだった。

ベイブはしばらく見とれてしまった。

懐かしいときめきが、ベイブの胸を襲っていた。

ダグを見つめて立ちすくんでいるベイブに、

ふと、砂浜のダグが気がついてベイブを見た。

ベイブは目をそらすと、急いでその場を離れた。

ドラゴンの餌は魚がメインで、
一頭につき、一日3トンだという。
3頭で9トンだ。

スコップを渡されて、

ベイブはしばし啞然と、目の前に積まれた魚の山を眺めていた。
海から上がって来た魚、契約されている漁師が水揚げしたものが、
毎日こうして船着場に、山のように積まれるらしい。

それをスコップで大きなバケツに移して、ひたすらドラゴンのいる
飼育棟、

いわゆるハンドラーの住まいまで運んでいるとか。

魚は、大小種類さまざま。

スコップでバケツに魚を入れても入れても、
まるきり減る様子がないような気さえする。

ベイブは魚といえば、今まで自分が知っているのは、
ムニエルとフライとシチューだけ。
もともとの魚っていうものが、

こんなに物凄くなんとも言えない、悪臭がするものだとは思わなかった。

「お嬢ちゃん、無理しなくていいぞ」

一緒に魚をすくってバケツに入れている、柄の悪い男がベイブに言った。

討伐団のオペレーション団員の一人だ。

見てくれの悪さの割りに、ベイブをさつきから気にしてくれている。

「大丈夫よ、有難う」

言って、ベイブはスコップを使って、男と同じように魚をすくい始める。

「ハンドラー候補だっけ聞いていたが、どうしてこんな雑用やってるんだ？」

魚を威勢良くバケツに入れながら、男は聞いてくる。

「色々とね、事情があつて」

ベイブは肩をすくめて言った。

「もし、お嬢ちゃんが卵を探しに、

ドラゴンの島に行くメンバーが決まらないときは、

俺が付き合うぜ、お嬢ちゃん。声かけてくれよ。

魚の運搬より面白そうだ」

坊主頭で傷だらけの体、大きいピアスを耳にして肩には刺青があるけれど、

その言葉を言った時の男の目は、優しげに笑っていた。意外な発見に、ベイブのスコップが止まる。

もしかしたら、ここにいる全ての柄の悪い人が、そのまま見た目と同じではないのかもしれない。

そんなことを思う。

でも、確かに考えてみれば、
ここにいる者たちは、海賊という「悪」を討伐する目的の団体に属しているのだ。

ぼーっと考えているベイブに、その男が「あつ」と声をかける。

ベイブが反応した時には遅かった。

新しく港にたどり着いた漁船から、漁師達によって勢い良く放り出された魚たちが、

スコップを魚の山に入れたまま止まっていた、ベイブの頭上から落ちてきていた。

計画

頭から魚のうるこや、何だか分からない生臭い汁まみれになりながら仕事を終わると、

一緒に仕事をしていたピアスの男が、ベイブにタオルを投げてください。

「別嬪^{べっぴん}さんが台無しだな」

気の毒そうに言うのに、

ベイブは苦笑して、顔についた魚のうるこを拭った。

使っていた台車やスコップと一緒にしまいに行く。

ピアスの男が連れて行ってくれた巨大な倉庫には、

数々の色々な道具が、棚に並べられ整然と並んでいた。

ベイブが目走らせる。

どうやら、ここにベイブが欲しいと思っていたものが全てありそうだった。

海に出る小さい帆船、ヨットのようなものはすでに、

昨日海賊討伐団の大きい帆船を繋いである場所に、作業用のをいくつか見つけてある。

「朝飯、食べに行くか？」

ピアスの男が言う。

「少し用事があるから、先に行つて下さい」

ベイブは言つて男にタオルを返し、にっこり笑った。

「どうも、有難う。助かりました」

男はタオルを受け取り、顔に似合わず照れて頷くと、

ベイブを置いて倉庫を出て行った。

ザイル、チェーン、チョーク、ハンマー、その他。

ベイブは何がどこにあるのか、棚の中を見て回って調べると、頭の中に物の配置を覚えて、倉庫を出た。

ここの食堂は朝でも薄暗い。

ベイブは食堂の入り口を入ると見回してため息をつく。まったく、酒場かつての。

朝一の仕事を終えた男たちが、ベイブのように食堂に集まりつつあった。

カウンターに行き、コック姿のライスに笑いかける。

「お早うございます」

ベイブが言くと、相変わらず銜^{くわ}えタバコをしながら、ライスがベイブに頷いてみせた。

「今朝はシーフードのシチューだ。お嬢ちゃんの口に合うといいけどな」

「有難う」

ベイブはお礼を言って料理の皿を受け取りながら、今の私が生臭いシーフードだわ、と思いつつも続ける。

「あの、ライスさん、お願いがあるのだけれど」

ライスは首を傾げてベイブを見た。

「今日の夕食の時に、チョコレートとクラッカーとチーズを一欠けら、

譲って欲しいの。出来るかしら？」

ライスが小さく笑って、

「お嬢ちゃんの夜食かい？」

「ま、そんなところ」

ベイブが笑い返して言うと、

「お嬢ちゃんはまだ少し肉がついた方がいいな。

たっぷり用意しておいてやるよ」

無愛想な態度とは裏腹な、優しい口調でライスは言った。

ベイブはにつこりと笑った。

朝食のトレイを手に、席を探す。

「ベイブちゃん」

ドーンの明るい声が聞こえて、ベイブはそちらを見た。

今日はショッキングピンクの女物の服を着ている長い銀髪のドーン

が、

食堂の隅のテーブルから、ベイブに向かって手を振っている。

隣には黒い袖なしのシャツに黒いパンツという、

ドーンと正反対の黒づくめの格好のダグがいた。

「昨夜は泊めて頂いて、有難うございました」

テーブルに近づいて、ベイブはダグに頭を下げる。

途端、ダグが顔をしかめて、

「お前、何やったんだ？すげー臭いだぞ？」

椅子から体をのけぞらせて言う。

「いやん、ベイブちゃん。人間の臭いじゃないわよ！」

ドーンも鼻をつまんで、叫ぶように言った。

「あ、ごめんなさい。ドラゴンの餌の魚をさつき頭からかぶったものだから。」

さつさと食べて、シャワー借りに一旦帰ります」
ベイブはなるべく二人から遠くに座ると、トレイの料理に手をつけ始めた。

「コンドラッドが言ってたが、お前ドラゴンの卵取りに行くのに、誰も連れて行かないと言い張ってるんだってな。

だから、コンドラッドに締められて、

オペレーションの雑用をさせられてるんだろ？」

ダグがコーヒーのカップを口に運びながら言う。

ベイブは黙ってシチューを食べていた。

「一人じゃ絶対無理よ。物凄い場所なんだから」

ドーンも続ける。

ベイブは俯いたまま、黙って食べ続けた。

「ごめんなさいね。私ああいう虫とか蛇とかがうようよしてる」と、

苦手なの。そうじゃなければ、付き合って上げるのに」

ドーンが言うのに、ベイブは首を振って、

「大丈夫ですから」

笑って言った。

「俺は付き合ってやってもいい」

ダグがベイブを見て言う。

意外な言葉にベイブは顔を上げてダグを見た。

「どうか是非お願いします。一緒に行って下さい。

ってきちんと頭を下げて頼めば、の話だな」

面白そうに口の端で笑って、ダグがベイブを見る。

ベイブは片眉を少し上げて、そしてにつこりとダグに微笑むと、シチューを食べ終えて二人に頭を下げ、

何も言わずに、トレイを返して食堂から出て行った。

「本当に可愛くないな」

ダグがぼそりと言つと、

「ダグ、あんたが可愛くないから、

ベイブちゃんも、つられて可愛くなくなるのよ。

ある意味、似たもの同士つてところかしら」

ドーンは肩をすくめて、ベイブの食堂から出て行く姿を見ていた。

午後からのベイブの仕事は、また船着場近く。

今度は朝の仕事で扱った9トンの餌の魚が、

ドラゴンの体の中を通ってきた後の物を、

漁の撒き餌に安く買つていく、猟師の船に積む作業だった。

両手で抱えるほどの背丈ほどもあるバケツの中身を、

男たちと一緒に大きな漁船の船底にある、撒き餌を入れるタンクに移し変える。

バケツは一体、いくつあるのか、次から次へと運び込まれてくる。

想像を絶するアンモニア臭と、その茶色がかったグレーのどろりとした物体を運ぶのは、

いくらじゃじゃ馬とはいえ、王室育ちのベイブにはショッキングな仕事だった。

でも、これもれっきとした海賊討伐団の仕事の一環。

こつという汚れ仕事をする人がいるからこそ、

ストリレーツ王国の海上の平和が保たれるのだ。

討伐団だけの話ではなく、

きつと王国におけることも全てそうなのだろう。

色々な目に見えない地味でつらい仕事をしてきている人がいるから、

王国は成り立っている。

王族が毎日城で着飾って綺麗でいられるのも、国民のおかげなのだ。知らなかった事とはいえ、ベイブには深く考えさせられることだった。

ふと、何かの叫び声のようなものが聞こえる。

耳を突くような、獰猛な声。

ベイブは空を見上げた。

いつか見た赤いドラゴンがこちらに向かって、
大きい翼を羽ばたきやって来るのが見える。

「ダグだ。海賊が出たのか？」

辺りの男達が声を上げる。

「いや、海上で合図の大砲は上がってなかったから、

巡回だろう」

一陣の強い風とともに、

赤褐色のうろこを持つドラゴンが翼を動かし、

船着場のベイブ達の上で旋回する。

トカゲに似た横に一本緑の線の入った黄色い目が、ぎょろりとベイ

ブ達を見た。

長い尻尾が振られて、ドラゴンの体が斜めに傾ぐ。すると、その背にくくられているハンドラーの位置に座るダグの姿が見えた。

黒い髪をなびかせながら、ゴーグルを外しベイブを見る。

何か言いたげに。

ふとバケツの中身に気がつくと、

ベイブを見て、ふっと小さく笑った。

そしてゴーグルを被り直すと、赤いドラゴンは海の沖の方へと飛び去って行った。

「何よ」

ベイブはドラゴンと飛び去るダグの後姿を睨む。

今のダグの笑みに、かちんと来たベイブは、早速、今夜計画を決行することにした。

一日も早く自分のドラゴンを手に入れて、見返さなければ。

身投げ

午後の仕事が終わリ、夕食時前、
多くの人がみな食堂に集まる時間に、ベイブは朝に行つた道具の倉庫へと向かつた。

ここには何でも揃つている。

背中に荷物を背負うためのナップサックのようなものを見つけて、
ベイブはその中に必要な物を探して詰め込んだ。

二つに分けてすべて詰め込むと、両手に下げてベイブは誰にも見られないように、

ダグの家の自分の部屋へと戻リ、荷物をソファの後ろに隠して、出発の深夜に備えた。

食堂に行くと、夕食のステーキの皿の他に、

カウンター越しに、ライスがベイブに大きな紙袋を手渡す。

紙袋の中を覗くと、チョコレートとビスケットの箱、チーズが一塊入っていた。

「ライスさん、有難う」

ベイブが満面の笑みでライスに言うと、ライスも煙草を咥^{くわ}えたまま笑つた。

「お安い御用だ」

これでは海へ出るだけだつた。
方角や場所はバルクに聞いて知っている。

テーブルについて一人で食事をしていると、

ダグとドーンが食堂に入って来るのが分かった。

ダグがビールのジョッキを手にベイブのテーブルの正面の席に、体を投げ出すようにして座り、大きいため息をついた。

ベイブはステーキを食べながらも、ダグの様子が変わるのに気がつく。ドーンが遅れてステーキが５枚乗っている皿を持って来る。

そのステーキの量にも驚いたけれど、ベイブはドーンが言った事にもっと驚いた。

「第三王女のベイビルート様が、どうやら崖から身投げされたらしくて」

ドーンがベイブを見て言う。

「崖の上には王女の履いていた美しい靴が置かれていて、

海岸には引き裂かれたお嫁入りのドレスが流れ着いたらしいの。

海に落ちた後、サメに襲われたんだろうって情報が入ってね」

なら、ベイブの思惑通りに事が運んだということだ。

「可哀想に。よほど嫁ぐのが苦だったんだろう。まだたったの１７歳だったというのに」

ダグが心底悲しそうに言う。

「ここに逃げてくれば、いくらでもお守りしたのに」

ダグのその言葉にベイブはびっくりするやら呆れるやらで、

「良く言うわよ。ドラゴンの卵取りに行くのに、

頭下げなきゃ一緒に行ってやんないって言ったくせに」

不満げに小さく呟く。

「何だ？」

ダグがベイブを見た。

「いいえ、本当にお可哀想ですね」

ベイブが調子を合わせて言うと、またダグはため息をついた。

「お前も、確か１７歳だったよな。いいか、命を粗末にするなよ。可哀想な王女の分まで長生きしてやれ、それが国民としての努めだ」

何だか自分の存在とかけ離れている、

ダグの架空の王女への思い入れが癢しゃくに触って、

「案外元気に、その辺歩いていたりするかもしれませんよ？」

第三王女は変わり者で有名だったんですから」

ベイブが食べ終えたトレイを手に持って立ち上がりながら言うと、ダグが小さく睨にらんだ。

「王女の悪口を言うな。不謹慎だ」

ベイブはダグからぷいと顔をそむけると、食堂の出口に向かった。

ドーンが小さく首を振って、ため息をついた。

「どうして、あんたたち二人は仲良く出来ないのかしら。

ダグ、あんたも一回りも下の１７歳相手に、マジになって言い合ってるんじゃないわよ。

可愛い後輩なんだから、もっと優しくしてあげなきゃ」

「あいつが可愛い態度をとってたら、俺だってもっと優しくしてたさ」

ダグはビールを飲むと、ベイブが何やら紙袋を大事そうに抱えて、食堂の出口を出て行く姿を目で追った。

「あー、頭来る。何よ、王女王女って、一体どこの王女の話だったのよ。」

私の事なんか、何も知らないくせに。

ここに来れば、私をあゝの結婚から守ってやったのにですって？」

ベイブはダグの言葉を思い出すと怒り心頭に来て、

その場で地団太を踏む。

「だったらドラゴンの卵採ってきて、この王女様に捧げなさいって話よ！」

ブンブン怒りながらベイブはダグの部屋に戻ると、自分の借りている部屋に入り、

ジャスパーが扉を開けられないように、扉の前にソファを押し付けた。

そして夜中の出発に向けて、早い時間から仮眠を取ることにした。

「ベイブちゃん、本当に一人で卵取りに行っちゃったりしたら、どうするのよ」

ドーンはもりもりステーキを頬張りながら、ダグに言う。

「まさか、あの岩の壁に守られているドラゴンの島に入る唯一の方法は、

一番低いところでも600メートルの岩の壁を、越えなければならなんだぞ？」

あんな小娘がどうやってあの島に入るんだ？

ハンドラーとドラゴンにでも乗ってでもなければ、あの岩の壁は乗り越えられない」

ダグは何杯目かのビールを煽って言う。

ドーンも頷きながら、

「でも、私はあの子には何か感じるのよね。普通の人と違う何か。それが何なのかは、まだ分からないんだけど。

あの子ならやり通しちやいそくな不思議な勢いが」

ドーンは紅を塗っている口元を紙ナプキンで拭いながら言った。

「でも、一体あの子。どこからやって来たのかしら」

ドーンが首を傾げる。

ダグは黙っていた。

ブロンドの髪、名前の類似。

王女の身投げと同じタイミングの、ベイブのハンドラー候補の出現。

「まさか」

どうすれば、王室育ちの王女が、

手負いのライオンと同じ檻の中で、

5分生き延びるというハンドラー試験に合格するのか。

ダグは自分の思い付きを打ち消すと、もう一杯ビールを取りにカウンターまで行く。

ビールをジョッキに注いで、その後ふと思いついてライスのところ

へ行くと、

「ライス、何かあるかな」

ライスに話しかける。

ライスはダグを見て、首を傾げた。

「その、若い女が好きそうな甘いものとか」

ダグの言葉を理解するとライスはにやりと笑って、

「ご機嫌取りか？お嬢ちゃんの」

ライスの言葉にダグは顔をしかめると、

「そんなんじゃないよ。」

やっぱり甘いものより、何か酒のつまみをくれ」

ライスは小さく肩をすくめると、ダグに生ハムとチーズの皿を差し出した。

ダグが食堂から部屋に戻ったのは、深夜遅くだった。ベイブの寝ているであろう部屋の扉を見る。静かに寝静まっているようだった。

ダグは自分の寝室の扉を開けて、巨大な茶色いモップのようなジャスパーの、熱烈歓迎のジャンプキスを受けながら、ベイブの部屋を振り返った。

まさか、一人で本当にドラゴンの島に行こうとしているわけではないだろう。

バルクに師事していたのなら、事情は詳しいはずだろうし。

ダグは自分の考えが正しいと結論を出すと、自分の寝室の扉を閉めた。

ダグが帰って来てからしばらく、一部屋挟んだダグの寝室のバスルームやその他から、音が消えるのを、仮眠を取り終えたベイブはじっと待っていた。

一時間も待った頃、全ての音が消えて、ベイブは自分の部屋の扉を押さえていたソファをどけた。

島に向かうための荷物を全て両手に持ち、そつと扉を開ける。

途端、待ち構えていたジャスパーに飛び掛られて、悲鳴を上げそうになった。

ベロベロ顔を舐めるジャスパーをなだめて、
ベイブは思い立って荷物の中からチーズを一欠けら千切って、それを部屋の端の方へ投げた。
ジャスパーがチーズの匂いを追って走っていく。

ベイブはその隙に、家の出口の扉に走った。
扉を閉める瞬間、ジャスパーがベイブに向かってやって来る。
「いい子にしててね」

その前でベイブは扉を閉めた。

「飼い主が無愛想だと、飼い犬は逆に人懐こくなるのかしら？」
誰に言うでもない皮肉を、ベイブはプンプンと言いながら、
ヨットのがある船着場へと急いだ。

上陸

朝になり、ダグが身支度を終えて部屋から出てくると、ベイブの部屋の扉は少し開いていた。

仕事に出かけて行った気配はしなかった。

不思議に思っ、ダグがベイブの部屋を覗く。

着替えなどの荷物はあるようだったが、

ベイブの姿は無かった。

首を傾げつつ考えていると、ダグの家の扉が叩かれた。

開けるとドーンがいて、

「海賊が出たわよ。他国からの貿易船が襲われているわ。

南東沖、国境付近よ」

ダグは頷くと、急いで家に隣接しているドラゴンの飼育棟へと向かった。

ダグは力一杯、飼育棟の大きな扉を引き開ける。鉄の板で出来ている重い扉だ。

天井についている窓から、飼育棟の中には朝日が差ししていた。

下が土になっている広い部屋。床にはドラゴンの好む草を敷き詰めである。

ドラゴンは体長4メートル、尻尾までの長さを入れると7メートルにもなる。

前足の大きい翼は広げると、左右10メートルにも及んだ。

「よう、バディ」

ダグが名前を呼ぶと、赤褐色のうろこに覆われたドラゴンは、

片方の翼を伸びをするかのように広げて、その黄色い目でダグを見た。

卵の孵化した瞬間から今までの10年のお互いの信頼関係は、完璧なものだった。

それは成長過程においての気長な訓練の賜物。

種族の違う生き物同士が、お互いの意思を疎通させることは容易ではないが、

不可能ではない。

まだハンドラーは三人のみとはいえ、

ドラゴンをトレーニングするマニュアルも、ほぼ定まりつつある。そのマニュアルも、ストリレーツ王国の宝になることだろう。

「バディ、仕事だ」

ダグは飼育棟に備え付けてあるキャビネットから、ゴーグルを取り出して顔にはめる。

黒い皮の手袋をすると、バディの背に飛び乗った。

バディの背には、ハンドラーの座る鞍が取り付けられている。

ハンドラーが手を置く場所から、二本の強靱な鎖が伸びていて、

それはバディの首に巻かれている鉄の首輪の、上と下とに繋がっていた。

足元から同じような二本の鎖が伸びていて、

それはそれぞれ左右の翼の根元につけられている鉄の輪に繋がっていた。

その4本の鎖を操り、バディに飛ぶ方向や速さを指示する。ドラゴンの動きは、全てハンドラーが誘導するものだった。

自分の体を固定するベルトをすると、
ダグは手元の右の鎖を強く引いた。

バディの首輪の上側に強い振動が伝わる。

バディは一声耳をつんざくような声を上げると、
飼育棟から出て海へと駆け出すと、空へと飛び上がった。

朝の海は眩しい太陽の光を映して、
その反射に目を開けているのがやっとだ。
強い風に髪をなびかせ、前方を見ると、
ドーンと彼のグレーのドラゴン「ジェシカ」が、
やはり、海賊討伐に向けて羽ばたいていた。
コンドラッドと彼のドラゴンは、
コンドラッド自身が司令塔ということもあって、
緊急時以外はほとんど飛ぶ機会はなかった。
出動はほとんど、ダグとドーンの二人だ。

ドーンは今日は虹色の女ものの服を着ている。
やがて、ダグが追いついてドーンの横に並ぶと、
ゴーグルをしたドーンは、親指で右を指した。
そしてすぐに右に旋回する。
ダグは右足の鎖を引いた。バディはドーンのドラゴンの後について、
右に方向を変えた。

遠くに大きな帆船が二つと、
それを取り囲むようにふた回りほど小さい帆船が六つ見える。

小さい帆船には、どれも黒い旗がはためいているのがここから見えた。

ダグとドーンのドラゴンはみるみるその船たちに近づくと、一気に高度を落とした。

朝の光が、海に空に満ちてくる。

ベイブの乗る小さいヨットは、順調にドラゴンの島に向かって進んでいた。

風が強くなってきている。

この調子だったら、思った以上に早く島に着くだろう。

手の中の磁石を見ながら、ベイブはヨットの帆を調整した。

もうここまで来ると、辺りには水平線しか見えない。

少し心細くなりながら、ベイブは思いついてナップサックからチヨコレートを取り出すと、

大きく欠片を齧って、自分を奮い立たせた。

今夜には島に着けるだろう。

そして、浜で朝を待ち壁を登ろう。

ドラゴンの卵を手に入れ、ダグを見返すんだ。

ベイブはもう一口、チョコレートを齧った。

海賊討伐団の一日の仕事が終了し、
無事今日も、海賊船に襲撃された貿易船が救えて、
討伐団の中にはお祭りモードになって、
食堂で酒を浴びるように飲んでいる者達も多かった。

ダグもビールのジョッキを持ってはいたが、
でも今日はどこにも、ベイブの姿が無いのが気になって仕方が無かった。

ダグは通りかかったコンドラッドを呼び止めて言った。

「ベイブの姿が、朝から見えないんだが」

ダグの顔を見るとコンドラッドは肩をすくめた。

「今日、オペレーションの仕事には来なかったな」

その言葉に、ダグが眉をひそめる。

「嫌になって逃げ出したか、それとも一人でドラゴンの島に向かったか。」

どちらにしろ、もう少し様子を見る必要はあるだろうが」

言って去ろうとしたコンドラッドの肩を掴んで、

「悪いが、明日一日休みを貰ってもいいか」

ダグは言った。

コンドラッドは小さく首を傾げてダグを見ると、

「ようやく、後輩育成に乗り出すのか？」

真面目な顔をして言った。

「まあな」

ダグは答えると、椅子にどかと座って、
ビールのジョッキに口をつけた。

ヨットの底に砂の感触があった。

深夜。

目を凝らしても、島の黒い巨大な影しか見えない。

でも、耳を澄ますと、

さまざまな命の営みの音が聞こえてきた。

ベイブは月明かりだけを頼りに、下半身を海に入り、
砂浜に向けてヨットを押した。

ドラゴンの島についた。

浜に上がると、ベイブはナップサックからマッチを取り出し、
流れ着いているその辺の木片や枯れ草を拾って火をつける。
赤く燃える火を見ながら、ベイブは一人朝を待った。

岩の壁

朝もやが海から漂ってくる。

黒い海が、だんだん色を得て青に変わりつつあった。

ベイブは持ってきたクラッカーを齧りつつ、

朝日で姿を露にした、

目の前のドラゴンの島の岩壁を見上げる。

ドラゴンは、こうした岩の壁に守られ、

天敵のいないこの島で繁殖している。

翼のある生き物だけが出入り出来る島なのだ。

聞くと岩の壁の中は、

日の光と真水に恵まれたジャングルになっており、

そこだけで一つの生態系が成り立つほど、

豊かな島になっていると聞く。

600メートル。

一口に言えば簡単だけれど、それを自分の力で垂直に登るといっのは、

想像を絶する無謀な挑戦だ。

落ちれば死ぬ。

心の中で一人で呟いて、ベイブは小さく笑った。

私はもう崖から身投げして、

死んだことになってるんだっただけ。

意に沿わぬ結婚に絶望した、可哀想なベイビルト。

でも、今ここにいるのはベイブだ。

全てを投げ出してもどうしてもやりたいと思った事で、
結果、力が及ばず命を落とすとしたなら、

それは夢が叶ったことになるのではないか。

そんな事をベイブは思う。

一度きりの人生。

絶望して死ぬのも、夢を見て死ぬのも、同じ一度きり。

ベイブは、持ってきたナツプサックから、

頑丈なロープを取り出すと、岩の壁の下に歩いて行き、
巨大な岩にロープを結びだした。

解けない結び方は、バルクに教わった。

ロープは600メートル分あるけれど、

きりのいい長さで、多数に切つてある。

一人でロッククライミングをするのは、非常にリスクが大きい。

でも、やるしかない。

考えた拳句の、ベイブの方法だった。

ハンマーと、ロープを入れたサックを背負う。

重さは60キロ近くある。

ベイブはサックの位置をうまく直して、背負い易いようにする。ブーツを脱ぎ捨てると、裸足で岩の壁に向かった。

腰にはロープを岩に繋ぐための鉄の輪と、手の滑りとめの石灰の砕いたものを入れたポーチ。後は、持って生まれた運だけ。

地面の岩に結んだロープを引っ張って腰の輪に通すと、余っている残りの長さは肩に巻きつけ、ベイブは滑り止めの石灰の粉を手にとって、

両手に塗りながら、最初の岩の出っ張りに手をかけた。

ダグはじれていた。

次の日は、コンドラッドに休みを貰ったはずなのに、連続して早朝に海賊の襲撃があったため、ドラゴンの島へ行けずにいたのだ。

ベイブの姿を見なくなって二日目。

あのふてぶてしいベイブなら、もしドラゴンの島に、一人で行っても大丈夫だろうかと思う。でも、無茶をしているのではないかと思ったりもする。

しかし何故、ここまでベイブの事を気にしているのだろうと、自分で自分に、自問した。答えが出るわけもない。

ダグは明日こそは、ドラゴンの島に向かうと決めていた。

ベイブが一人で岩の壁を登る方法は、地面の重い岩にくっつけたロープを持って、素手で岩の壁を登り、ある程度まで来たら、ロープを通してから輪になっている形の鉄の杭を、

ハンマーで力一杯、岩に打ち込むというものだった。

そうすると、万が一ベИБが落ちた時に、その岩に打ち付けた鉄の輪がロープをささえ、下の岩の重さがあるため、輪がベИБの体重に持ちこたえられれば、ベИБの体は空中で、引つ張られる形で落下を防げるからだ。

でも、それは非常に気の遠くなるような作業だった。

ロープを通し鉄の輪を岩に打ち付けると、

長さの足りなくなったロープを背中のサックから出して足し、解けない結び方で結んでから、

また素手で岩の出っ張りを探しながら、上に向かう。

地道に地道に作業は繰り返され、

巨大な岩の壁は、ベИБに征服されつつあった。

ベИБは落下する事はなかったけれど、

一晩、岩の壁の途中で中吊りの格好で、眠るはめになった。

体中が痛かった。

下を見るのが怖かった。

何故、自分はここにいいのか、

朝目が覚めた時、

くらりと眩暈を誘う足の下の景色に、誰かを罵倒したかった。

でも、あたりには誰もいなかった。

生きているのが不思議だった。

ベイブは、頭を振って目をしっかり覚ますと、
壁の残りを登り始めたのだった。

ダグは待ちきれないように、休日になった早朝、
バディをドラゴンの島へと向かうべく、海へとけしかけた。

ドラゴンの島

疲労と眠気とで鈍る頭を振りながら、

ベイブの岩の壁での二日目が始まっている。

ふと、どこかでドラゴンが鳴いた。

ベイブは顔を上げた。その瞬間手を置く位置を誤った。

足が滑り、もう片方の手からも掴んだ岩が逃げていく。

腰のロープが悲鳴を上げる。

600メートルにあと少し。ベイブの体が岩の壁からゆっくりと離れた。

落ちながら壁に数回バウンドして、肌はすりおろされる様に岩に打ち付けられる。

必死で手がかりをつかもうとするけれど、虚しく空を切るばかりだった。

やがて、腰の鉄の輪に通したロープと、

岩の壁に打ち付けた鉄の輪に通したロープとの遊びがなくなり、凄い衝撃を伴ってベイブの体が空中で止まる。

足の下のはるか彼方の地面が揺れて、くらりと眩暈を誘う。

揺れ動く体が、そのうち岩の壁にくっついたままになると、

ベイブは岩の壁に手を伸ばして、また登る手がかりを探した。

ベイブの頬に恐怖の涙が落ちる。

大きく息を吐くと、ベイブは顔の傷から流れる血を手で拭いて、気持ちを切り替え、体の向きを変えて岩を捕まえ登り始めた。

どの位時間が経ったろうか、

とうとう、岩の壁の天辺にベイブの手が届いた。

重い体を壁の上まで引き上げると、そのままそこにしばらく横になる。

荒い呼吸をする胸は、大きく上下している。

自分の上がってきた岩の壁を横目で見下ろすと、

ぞっとするようなパノラマの風景が広がっていた。

自分の乗ってきた船が米粒のように見える。

白い狭い砂浜。あとはきらきら光る無限の青の海原。

ベイブはよろけながら立ち上がった。

壁の上は内側にすり鉢状になった地続きになっていて、見渡す限り、密林の緑が広がっていた。

ドラゴンの島。

ベイブは腰のロープを解いて、辺りの岩にくくりつけると、背負っているナップサックから水とチョコレートを出し、

口にしなから、林の中へ入って行った。

体のあちこちから血が出ている。

あざもいくつもあって、歩く度に体中が痛んだ。

ブーツは置いてきてしまったので、足は裸足だ。

幸い、足元は枯れた葉や草などが積み重なっている土で柔らかかった。

繁った木々の間から覗く空のどこかで、甲高い声が響く。
ドラゴンの声。

ベイブは林をどんどん下って行った。

やがて、水の流れる音が聞こえ始めるのに気がついて、
そちらの方へと歩いて行く。

あちらこちらに生き物の気配。

ベイブの足音に気がつく、逃げていく蛇や昆虫も数多い。
手に太い枝を拾うと、自分の目の前の草や地面を叩いて、
小さな動物たちを追い払いながら歩き続けた。

ドラゴンは水辺に巣を作ると聞いた。
ベイブは水辺を目指した。

しばらく下ると、木々が少なくなり開けた場所に出る。
上流から流れてきた水が、鏡のような美しく静かな池を作っている
場所に出た。

池の淵に近づいて、ベイブは側の大きな木の幹に捕まりながら、
水面に体を乗り出して、片手で顔の血を洗った。
冷たい水が傷にちりちりと痛い。
ベイブは大きいため息をついた。

ふと、何かの気配を感じてベイブは体の動きを止めた。
すぐ脇で激しい水音がする。
捕まっている木の陰にとっさに身を隠して、
ベイブはその音の方をこっそりと覗き見た。

黒っぱいうるこに覆われた一頭のドラゴンが、
ベイブのすぐ側で水を飲んでた。
体の大きさは尻尾まで入れて、約5メートルくらいだろうか。
でもその前足の翼の大きさは、ダグの赤いドラゴンと変わらないほ
ど立派だった。

広げれば10メートルくらいはあるだろう。
ただ形が変わっていて、その黒いドラゴンは頭のところダグの赤
いドラゴンにはない、

大きい鶏冠トウカのようなものが縦に並んでついていた。
自分の意思で動くのか、呼吸をするたびに左右に動いている。

ベイブは息を殺して、そのドラゴンの様子を見ていた。
ドラゴンはベイブには気がついていないようだ。

ドラゴンは一声大きく吼えた。

耳をつんざくような咆哮に、ベイブは体をすくませる。
すると少し離れた場所から同じような吼え声が響いてきて、

ベイブは木の陰からその吼え声がどこから来たのかを確かめた。

池の反対側に見える大きな岩の陰から、

もう一頭の同じ種類のドラゴンが顔を出していた。

そして岩の陰から出てくると、翼を広げて池の上をこちらに向かつて飛んでくる。

ベイブは木の陰に身を潜めて、小さく体を縮めていた。

ベイブの隠れている場所が、強い風に煽られる。

側にいたドラゴンも翼を広げて羽ばたいたようだった。

風が上に吹き抜けおさまってくると、ベイブは木の陰から顔を出した。

二頭の黒いドラゴンが尻尾をゆらし、一緒に空高く飛んでいくところだった。

つがいなのだろうか。

ベイブは心の中で呟いて、そして池の反対側の大きな岩を見る。
もう一頭はあの影から出てきた。

もしかして。

ベイブは池の周りを急ぎ足で、その大きい岩に向かって歩き出した。

段々とあの巨大な岩の壁が大きくなってきていた。

ヨットのような小さな船では、丸一日かかるドラゴンの島までの距離も、

バディのスピードなら数時間だ。

座る鞍の背にくくりつけてあるジャスパーの入ったゲージを、ダグは振り返る。

茶色いモップのような犬のジャスパーは、強い向かい風に目を細めながらも、落ち着いてダグを見返した。ダグはゲージを軽くはたいて親愛の情をしめすと前に顔を戻して、ドラゴンの島を見つめる。

きらめく青い海の上、高度を落として飛び続けると、ダグはベイブの乗ってきたものであろう、小さな帆船が砂浜にあるのを見つけた。

そして一気にバディの頭を上げて、岩の壁に沿って上昇する。

一本のロープが600メートルある岩の壁の一番天辺から、下に向かってぶら下がっているのを見つけた。

ダグは目を見開いた。そして口笛を吹く。

大した１７歳だ。

ダグはバディを岩の壁の上に着陸させると、ジャスパーのゲージを下ろした。

バディに手を振って「ラウンド」の指示を出す。

ハンドラーが持つ笛の合図があるまでは、少し離れた場所で待機しているという意味だ。

通常の海賊討伐では、ドラゴンとハンドラーは海賊船に最初の襲撃をするだけだが、

事情によっては、ドラゴンから降りて海賊船に乗船しなければならない時もある。

その時に、大砲などの砲撃を受けないよう離れるという指示を出すことがある。

それが、この「ラウンド」だった。

バディは低く小さく声を出すと、

もう一度海へ向かって、岩の壁を飛び降りて行った。

ダグはゴーグルを脱ぎ、背負っているバックにしまうと、ジャスパーのゲージの入り口を開ける。

「さあ、ここからがお前の出番だ。ベイブはどっちに行ったんだ？」
ダグが持参してきたベイブのシャツの匂いを、ジャスパーに嗅がせる。

ジャスパーは心得たとばかりに、地面の臭いを嗅ぎながら、
急ぎ足で歩き出した。

ホーブ

近づいてみると、あのドラゴンが陰から出てきた岩は、想像以上に大きかった。

ベイブは岩を見上げて裏に回った。

岩の下に、ぼつかりと黒い大きい穴が開いていた。洞窟と言った方がいいような穴。

ベイブは、その大きい洞窟のような暗い穴の中を伺った。空を見上げる。さっきの二頭の姿は、もちろんまだない。ベイブは意を決したように小さく息を吐くと、その穴に入ってしまった。

生臭いような、異様な臭いがする。じめじめとした湿った空気。

岩の肌の上には、水滴がしたたっている。

奥に行くほどに、暗くなつて何も見えなくなった。

足と手が泥だらけになるのも構わず、

ベイブは膝をついて、手探りで前に進んだ。

手に触るのは、濡れている土と草。

四つんばいになって先に進むと、やがて突き当たりの壁に出くわした。

ベイブは突き当たった壁から向きを変えた自分の足に、何かが触ったのを感じた。

硬い何か。

でも、石のように無機質で冷たい感じではない。

手を伸ばす。

それは両手で抱えるほどの大きさの、丸い物体。表面は少しぬるぬるしていた。

ベイブはそれを胸に抱えあげる。

そして、立ち上がると、ゆっくりと来た道を戻り始めた。

穴の中から出ると、ベイブは太陽の光の下で自分の抱えている物を見た。

うつすらと緑色がかった球状の物体。

日に透かすと、中に何かの影が見える。

ベイブは目当ての物が見つかった喜びに、体の痛みを忘れた。

さっきの親ドラゴンが戻ってくる前に、この場を去らなければ。

「私のドラゴン！」

ベイブは小さく呟くと、嬉しそうに満面の笑みを浮かべた。

背中に背負うナップサックを肩からはずして、

中身を全部投げ捨て、持っている卵をそっと入れる。

登ってきた岩の壁に向かう上りの斜面を歩きながら、ベイブは卵に気を取られて、

まるきり足元を見ていなかった。

ふいに足元の地面がなくなり、ベイブの体はふわりと落ちる。

小さく悲鳴を上げながら、ベイブは卵をしつかり胸に抱え込んだ。不注意の上に、草が隠していたせいもあって、ベイブは足元にぼっかり開いていた穴に、気がつかなかったのだ。

背中を強く打ちつけ、ベイブは穴の底に落ちた。拍子に左の足首を強く捻ってしまう。

呻きながらも、自分の胸に抱えた卵の無事を確かめて、ベイブは痛みが治まると、そろそろと身を起こした。

見上げる穴の入り口は、2メートル以上はあるだろうか。ベイブは立とうとして、左の足首に激痛が走ると顔をしかめた。穴自体は、そんなに大きいものではないのだけれど、覆う草の合間から、かすかに空が見えるその穴の入り口は、ベイブの手が届くような高さではなかった。

やっと、卵が手に入ったというのに。夢が叶うと思ったのに。

討伐団の誰にも、ドラゴンの島に行くとは言って来なかったし、もちろん、王宮の誰もがベイブは身投げをして死んだと思っているのだろう。

ここにこうして、ベイブが狭い穴に閉じ込められているなどと、この世の中の一人たりとも知っている人はいないのだ。

ベイブの心を、絶望が襲う。

このまま、ここで誰にも見つけられず、命を落とすのだろうか。

ベイブは声を上げて泣いた。

ベイビルートが死んだという噂が、本当のものになるのだ。

国王と王妃は、

父上と母上は、私が死んだに違いないと聞いた時、

一体、どう思ったんだろうか。

気が狂っている噂されている、

変わり者のやっかい払いが出来たとほっとしたのだろうか。

三人目の嫡子には王子を熱望されていたのに、

上の二人に引き続き、王女で生まれてきた私を必要とする人は誰もいなかった。

いう事を聞かない気の強い気性のせいもあったのだろう。

ベイブには、乳母にさえ愛しく抱きしめられた記憶はなかった。

でも、誰も支えてくれなかったからこそ、

ベイブは自分で立てるように、強くなりたいと思ったのだ。

男で生まれれば、どんなに良かっただろうと毎日思っていた。それが無理なら、せめて男のように生きたいと思った。

ドラゴンハンドラーになれば、

国王である父親が「素晴らしい仕事だった」と、

いつかダグに声をかけていたように、

自分にも声をかけてくれるに違いないとベイブは信じていた。

王女というだけで何の取り柄もない自分でも、

ドラゴンハンドラーにさえなれば、

愛するストリレーツ王国の役に立てる、国が自分を必要としてくれる、

そう信じて生きてきた。

ベイブは溢れ出てくる涙を流れるままにして、

抱え込んだバックから卵を出すと、頭上の穴からもれてくる光で眺めた。

うつすらと緑がかった卵。

ベイブの中で、ずっと前からまだ見ぬドラゴンの名前は決まっていた。

「ホープ、一緒に海の上を飛び回りたいかった」
喉から搾り出すように呟く。

ベイブは卵をナップサックに戻すと、痛む足を引きずりながら、ゆっくりと立ち上がった。

そして両手で卵の入ったナップサックを抱え、体で反動をつけて、穴の上へと放り投げた。

せめて、あなただけでも生き延びて。
私のホープ。

卵の入った袋は、光を注ぎ込む穴から外へと飛んで行った。

ベイブはしばらく卵の消えていった上を眺めて、
やがてずるずると崩れ落ちるように、その場に座り込んだ。

ベイブは、とても疲れていた。
体のあちこちも痛みが強まる。
もうこれ以上は、動けなかった。

ベイブはそのまま、穴の地面に倒れこんで気を失った。

ダグはジャスパーの後を追いつながら、
自分がかつてここに来た時の事を思い出していた。
あれはやはり自分もベイブと同じ年、17歳の時だった。
でも、ベイブとまるきり違うことは、
あの時はダグは、バルクに連れられて来ていたのだ。
それにダグは男だ。
当時の若さでも、ベイブよりも力は強いし体も大きかった。

鬱蒼^{うつそう}としている木々を見上げながら、
17歳の、それも少女が一人きりでこの中に入って来たのかと思う
と、

ダグの胸が痛んだ。

自分はとても意地悪な仕打ちを、大人気なく少女にしたのだ。

ベイブ、無事に見つけられればいいが。

ダグは後悔の念が沸いてくるのを止められなく、

苦々しく心の中で呟いた。

ふと、木々を縫い緑の斜面を下る途中で、ジャスパーが足を止め吠え立てる。

ダグは走ってジャスパーに近づいた。

草の上に、丸く膨らんだナツブサックが落ちていた。

ダグはそれを拾って中身を見る。

どうやらそれがドラゴンの卵らしいと分かると、

ダグは辺りを見回した。

ベイブが近くにいるのか？

そして、ジャスパーがしきりと地面に向かって吼えているのを見て、ダグは首を傾げた。

地面に何かあるのか？ 思いつつ、ジャスパーの鼻先の雑草を手で払った。

すると、黒い穴が草に隠れて口を開けているのを見つけた。

背中の中からナイフを取り出して、辺りの草を切り払う。

オイル式のライターを取り出して火をつけると、

ダグは穴の中を照らした。

オレンジ色の炎が、穴の底に倒れているベイブの姿を浮かび上げさせる。

変わり果てた泥と血にまみれたその姿に、ダグは息を飲んだ。

この二日、一体この少女は一人きりで何を耐えてきたのか。

ダグはロープを出すと、側の木につないでロープを中に垂らした。

穴の中に降りると、ベイブの体を抱き起こす。

その胸に耳をあて心臓が動いているのを確認すると、ダグは大きく安堵の息を吐いた。

「ベイブ、大丈夫か？」

声をかけて、頬を小さく叩く。

でも、ベイブの反応は無かった。

ダグは水筒の水を口に含むと、自分の唇でベイブの唇を開けて中に注ぐ。

三度繰り返して、ようやくベイブの喉が水を飲み込んだ。

ベイブがゆっくりと目を開けた。

焦点の合わない瞳が、ダグを見上げる。

「悪かった」

ダグは心からの気持ちを込めて、ベイブに謝った。

「大人げが無かったと、反省している。」

どうも、お前を見ていると昔の自分を見ているようで、

何か素直に接する事が出来なかった。

お前が優れているのは、もう十分理解した。

これからは、俺がどんな時もお前の側にいて、

ハンドラーとしての全てを教えてやるから」

ベイブの顔の泥と血を、サックから取り出したタオルで拭いながら、

「もう、一人でこんな無茶をするな。頼む」

ベイブの目に、かすかに力が戻る。

「もう誰も、来てくれないかと思った」

見る見る間に涙が玉になって、ベイブの瞳から流れ出す。

「私は今まで、誰にも必要とされた事がなかったから」

ベイブは自分を抱き起こしているダグの顔に手を伸ばした。

「私、まだ生きていてもいいの？」

ダグはベイブの言葉に衝撃を受けた。

一体、この少女はどういう生き方をしてきたのか。

ダグはしばらく言葉を失って、腕の中のベイブを見つめていた。
そして強い口調で言った。

「俺はお前の資質に正直感動している。どんな凄いハンドラーになるのか、

どうしても見極めたい。お前が例え他の誰に必要とされなくても、俺が必要としている。だから、俺のために生きろ」

ダグの言葉を聞くと、ベイブは涙を浮かべたまま小さく微笑んだ。

「俺の首に掴まれるな？」

ダグが聞くと、ベイブは頷いた。

ベイブを背負って、ダグはロープを上り穴から出た。

孵化

ふと、ベイブは自分の顔を撫でる潮の香りのする強い風に気がついた。

ほんのりと煙草の香りも混じっている。

ベイブは目を開けた。

ダグの顔がすぐ近くにあった。

真っ直ぐ前を向いている。

ベイブはダグが見ている方に目を向けた。

赤褐色のうろこを持つドラゴンの頭越しに、太陽の光にきらきらと煌いている青い海が、どこまでも広がっている。

ダグの赤いドラゴンは海風に乗し、ゆったりと空に羽を広げていた。

ダグの胸越しに後ろを振り返ると、

ベイブが苦勞して上ったドラゴンの島の岩壁が、遠くなりつつある。

足元を見下ろすと、青い海の波が見えた。

思ったよりも飛んでいるドラゴンの体の動きは静かで、こうして目を開けて見なければ、空にいることも気がつかないくらいだ。

「飛んでるの?」

ベイブはかすれる声でダグに聞いた。

「ああ」

ダグがベイブが起きたのに気がつき、答える。

「凄い」

ベイブはダグの胸から体を乗り出すと、首を伸ばして辺りを見回した。

ダグの後ろにはジャスパーのゲージもくくられているのが見える。ベイブのブロンドの髪が風で舞い上がり、ダグの頬をくすぐった。「じつとしてる。危ないだろう」

ダグはベイブの髪の甘い香りにどきりすると、わざと厳しい口調で言う。ベイブは大人しく体の位置を元に戻した。「これからいくらでも飛べるし、飛び方も教えてやる。だから今は眠っておけ。

あと数時間はかかる」

ダグの無愛想な物の言い方。

けれど今はもう、ベイブはその言葉の下に隠れている情の深さを理解していた。

この世でたった一人、ベイブを必要だと言って助けてくれた人。

ベイブは、ダグの顔を下から見上げた。

海賊に襲われたあの日、ベイブを助けてくれたハンドラーが、今またベイブを救ってくれた。

その胸は厚くたくましく、温かった。

耳を胸に寄せると、ダグの心臓の音が聞こえる。

人の心臓の音を聞いたのは初めてだ。

ベイブは目を閉じて、その心臓の音を聞いて、今まで感じたことのない安心感を覚えると、また眠りに戻っていつ

た。

討伐団に戻り、ドラゴンの卵を手に入れたと知らせると、

コンドラッドはベイブに、ドラゴンの飼育棟がついているハンドラーの住まいを一棟与えた。

そして、卵が孵るまでの期間はベイブは自宅待機を命じられた。

ドラゴンが孵化した時に、

一番最初にベイブの顔をドラゴンに見せなければならぬからだ。鳥と同じ刷り込みの習性を持つドラゴン。

それが一番最初の、ハンドラーとしてのトレーニングだった。

ドラゴンの島で、穴に落ちた際にくじいた足を薬で冷やししながら、ここ数日、ベイブは卵を一日眺めていた。

わらを敷いた大きな入れ物の中に入れてある。

卵を光に透かして見たダグによると、

孵化までそう長くはかからないとのことだった。

ベイブの部屋には、最低限の家具しか無かった。
ベッドとテーブル、ソファが一つ。

部屋の作りはダグ達のもと一緒にだったので、
三部屋ある広い場所に、ぽつりと一人きりしているのはとても寂しい。
それに朝から夜まで、ダグもドーンも海賊討伐だったり、
巡回だったりして、ドラゴンと一緒に出かけてしまっていて、
ハンドラー棟のあたりはシーンとしていた。

しかし、ベイブのドラゴンが孵った後は、
緊急以外の時間は、ダグが専属でベイブのトレーニングに付き合っ
てくれることになっていた。
ダグの代わりに、コンドラッドのドラゴンも討伐に参加するとのこ
とだ。

コンドラッドが言った。
所有するドラゴンが四頭に増えれば、このストリレーツ王国の海域
の安全保障の風評も、
隣国諸国にますます知れ渡ることになる。
ストリレーツ王国の国王も、新しいハンドラーが誕生するといふこ
とを、
とても歓迎しているいう。

実は死んだはずの第三王女が、その新しいハンドラーだと知ったら、
それでも父上は喜んでくれるのだろうか、

それとも婚儀を放り出して逃げ出した自分に怒るのだろうか。

不安はどうしても残ってしまうけれど、

結果を出して認めて貰う以外には無いのだ。

ベイブはドラゴンの誕生を、今か今かと待ちわびていた。

ドラゴンの卵の側を離れられないベイブのために、

食事はライスが棟まで届けてきてくれていた。

昼食にとライスが運んできてくれた、

パンにソーセージを挟んだサンドイッチを食べ終わると、

ベイブはそのままソファでうたた寝をしてしまった。

ふと何かの音に気がつき、ベイブは目を覚ました。

水の入ったゴムボールを踏み潰したような音。

なんとも形容しがたい音だった。

ベイブははっとして卵を見る。

緑かった卵は上の方が破られていて、覗くと中は粘膜だけが残っていて、

何も入っていないかった。

ベイブは慌ててソファから降りると、床にはいつくばって音の主を探した。

テーブルの下に、白っぽい色をした何かがいいて、

それが水の入ったゴムボールを踏み潰したような音を、立てていた。

よちよちと、ままならない二本の足を動かすたびに、
よじれて小さい翼とも呼べない前足を、左右に広げている。

丸い幼稚な顔は、それでもちゃんとドラゴンの風貌をしていて、
息をする度に小さい鼻腔の穴が開いたり閉じたりしていた。

このドラゴンの特色の頭の後ろから生えているけむか鶏冠のようなひだが、
呼吸に合わせて揺れている。

「ホープ」

ベイブはドラゴンの名前を呼ぶ。

「ホープ、こっちにおいで」

そして、テーブルの下に手を差し伸べた。

ホープは少し首を傾げ、ベイブを見た。

その丸く黒い瞳がベイブの顔をじっと見つめる。

そして、危なっかしい足取りでよちよちとベイブに近づいてくると、
ベイブの手をその鼻先でつついた。

「ホープ！」

ベイブは笑顔になると、ホープを両手でそっと抱き上げる。

ホープは手の中からも、ベイブの顔をじっと見ている。

まさに、今刷り込みが行われているのだろう。

まだ生まれたてのホープの白っぽいその体は、卵の粘膜でぬめって

いた。

ベイブはタオルを持ってくると、ホープの体を優しく拭く。自分をじっと見つめるホープの目に、絶対的な信頼が生まれるのを感じて、

ベイブは驚異を感じていた。

まるで、ベイブが母親かのような信頼。

「これからは私があなたを守るから」

ベイブはホープの頭を撫でる。

ホープはベイブを見て瞬きをする。

水を入れたゴムボールを踏み潰したような声で、一声鳴いた。

戸惑い

ホープが孵化してから数日、
トレーニングが始まっていた。

「まず」

ホープをテーブルの上に乗せて、ダグがベイブに言った。

「今の段階でホープに教え込むのは、

常に意識をこちらに向けさせるということだ」

ダグは言いつとホープの丸い顔の前に指を持っていき、

ホープの気を指に向けさせて、すぐに自分の顔の前にその指を持ってきた。

ホープが動く指につられて、ダグの顔を見る。

「顔を見たらすかさず、褒めて餌だ」

よし、いいぞと褒めながら、

ダグは小さく千切った生の魚をホープの口に持っていく。

ホープは美味しそうに丸呑みした。

ホープはまだダグがくれるのではないかと、ダグの顔を見上げている。

呼吸をするたびに、ホープのとさかのような物は左右に揺れた。

それがとてもチャーミングでもある。

ベイブはその愛らしさに微笑んだ。

「とにかく今は、この繰り返しで、

ホープがベイブの事を常に意識するようにしていくんだ。

目の前にベイブがいる時は、ホープが常にベイブに集中するように」

ベイブは真剣な顔をして頷くと、ダグに習った通りを繰り返した。

ドラゴンは半年で成獣になるという。

ベイブはホープを訓練するのに夢中になった。

ここ数日、朝から晩までこの調子でトレーニングに根を詰めていたベイブに、

とうとう今日は夕方になるとドーンが言った。

「何事も、過ぎたるは及ばざる如し。たまには息抜きしなきゃ
ドーンが言っと、ベイブは首を傾げる。

「息抜き？」

「今日は町で大きなお祭りをやるのよ。ダンスパーティーなんかもあるから、

行ってきたら？ホープだってもう今夜は寝るだけだから、私が見
ていてあげるわよ」

そしてダグを見て言い、

「今日ばかりは町の女じゃなく、ベイブちゃんのエスコートしなさいよ？」

耳元に口を当てて言った。

「17歳らしい遊びもさせてあげなきゃね」

にこりと紅を塗った唇で笑うドーンに、ダグは肩をすくめる。
でも、拒みはしなかった。

「ダンスパーティーって、いわゆるあの堅苦しいやつなの？」

着飾って知らない人と踊って、品定めされるような」

ベイブはかつて城にいた頃の舞踏会を思い出して、ぞっとした。上の二人の従順で美しい姉達と、いつも自分は比べられていた。がさつで変わり者の第三王女のベイビールート。

「そんなもんじゃないわよ。皆お酒を飲んで陽気に、

好きな相手と楽しく踊るものよ。王宮の舞踏会じゃないんだから」ドーンが言う。ベイブは王宮の名前が出てどきっとした。

「ま、気分転換に町に出るのもいいかもな」

ダグは言う、ベイブも頷いた。

日が暮れかかった空には、綺麗な夕焼けが広がっていた。

ダグは珍しく襟のついた白いシャツと黒いパンツを着ている。

黒髪に強い意思の光を湛^{たた}えている黒い瞳。

こうして改めて見てみると、ダグは背も高く逞しい相当の美形だ。

黙ってればね。

ベイブはにやりと、心の中で呟いた。

ダグは口の悪ささえなければ、本当に完璧だとベイブは思った。

ベイブは持っている服がこれしかないので、

いつもの体にぴったりとしている白いシャツと、黒い皮のパンツだ。

馬の背に乗ったダグが、ベイブを引き上げてくれる。

自分も一人で馬に乗れると言ったベイブだったが、

町の祭りは相当の人ごみなようで、ダグの馬にベイブは乗ったのだ。
った。

「町の祭りに行くのは初めてか？」

ダグが背中越しに訊く。

「ええ、聞いたことはあつたけれど、
行ったことは無いわ」

「子供の頃に町の祭りに行かないなんて、一体お前は何をして遊んで
いたんだ？」

「遊んだ事なんてないわ。バルクの訓練か、勉強か」

ベイブは呟くように答えた。

ダグの中で、ベイブがドラゴンの島でダグに言った言葉が蘇る。

「私、まだ生きていていいの？」

バルクの訓練か、勉強？

「勉強って、何の勉強だ？」

ダグが問うと、

「色々。本当に言い尽くせないほど、色々」

ベイブは投げやりに言っ、黙った。

一体、ベイブが今までどんな生活をしてきたのか、
問い詰めたい衝動に駆られて、ダグは堪えた。
まだ知って間もない間柄な上、

ダグだって決してベイブに威張って言える過去を持つわけではない。

ダグは海賊上がりだった。

ベイブより若い頃、海賊船に乗って色んな国の船の襲撃に加担していた。

ストリレーツ王国領海で船を襲っていた時に、

バルクのドラゴンとストリレーツ王国の討伐団に捕まったのだった。

しかし、年若いダグの更正と資質を見込んで、

バルクはダグの身元を引き受けて、ドラゴンハンドラーに仕込んだ。

ダグが海賊から足を洗ったのが15才。

生きるためとはいえ、それまでではありとあらゆる悪を働いた。

命を奪ったかどうかは定かでも、人を刃物で傷つけたことも多数ある。

決して、人の人生をとにかく言えるような人生を歩んでいないことは、

確かだ。ダグは黙って、町へと馬を進めた。

人ごみが酷くなってくると、

ダグは馬を繋いで、ベイブとその先は歩いて祭り真っ最中の町に入っていた。

段々と押し合うような人込みに入るにつれ、

ベイブが先を歩くダグを見失いがちになる。

「ダグ！待って」

ベイブが言っと、ダグが立ち止まり振り向いた。

ベイブはダグの手を掴んだ。

「はぐれちゃう」

自分の手を握るベイブの手を見下ろして、ダグは戸惑った。
ベイブはにっこりと笑った。

「ダグの手って、大きくて暖かい」

ダグは自分の胸の鼓動に舌打ちして、
咄嗟に目を伏せた。

一回りも年下の少女に何を動揺している。

でも、ダグはベイブに手を握られるまま、
ベイブの手を引いて、雑踏を中を歩き続けたのだった。

町の祭り

町の広場には、所狭しと出店が並んでいた。

海賊討伐団がいるせいで、

ストリレーツ王国には貿易船が安心して取引にやって来る。

自国だけの出店ではなく他国の物も多数売られていて、

とても賑やかだった。

肉や魚を焼いたものを売る店、果物を切ってシロップをかけて売る店、

珍しい酒や飲み物を売る店、輪投げのようなゲームを景品をかけて開いている店、

服を売っている店、ベイブには珍しいものばかりで、ダグの手を握ったまま、

あちらこちらを楽しそうに眺めていた。

子供向けの色んなおもちゃを売っている店の前で、

おもちゃに群がっていた子供たちが、ふとダグを見て騒ぎ始める。

「ダグラス・マーレイだ！ドラゴンハンドラーの、ダグラスだ！」

12、3人いる腕白そうな少年達は、口々に言っ

て、ダグの体に触ろうと走り寄ってきた。

「俺も絶対、大きくなったらハンドラーになるんだ！」

「俺も！」

「おいらも！」

「そうか、頑張れよ」

わっと群がってきた少年たちを嫌がることもなく、

ダグは求められるままに少年たちに握手をしてやり、

その肩を叩いてやった。

「おねいちゃん、ダグラスのガールフレンド？」

一人の少年が遠慮なく、じろじろとベイブを見て言う。

ベイブはたじたとしながらも言った。

「ハンドラー候補よ」

ベイブに話しかけた少年はきょとんとして、

「うっそだー！女はハンドラーにはなれないもん！」

ベイブにあっかんべーをして逃げていく。

「ちょっと、待ちなさいよ！何で女だとハンドラーになれないのよ！」

ベイブの剣幕に、ダグに群がっていた少年たちも面白がって逃げ出した。

それを追いかけようとするベイブの腰をダグが掴む。

「本気でガキどもを相手にするやつがいるか」

「だって！」

プンプンと怒るベイブにダグは笑って、

「ハンドラーになって見返してやりやいい。そうすれば、

次の祭りの時には、少女たちがお前に群がって来るだろうよ」

言うつと、ベイブはダグを見て素直に頷いた。

ベイブはおもちゃ屋に並ぶ人形をみて、思わず指をさす。

「見て！ダグのバディの縫いぐるみがあるわ！ドーンのエシカも

！」

ダグはベイブの指した方を見て、

「そのうち、ホープも加わるといいな」

ダグが言うつとベイブは嬉しそうに笑って、

また無邪気にダグの手を取って歩き出した。

どうもその自分の手をつかむ温もりに慣れないダグは、

照れ臭さに苦笑いした。

女と手を繋ぎあって歩くなど、いつ以来だろうか。

しばらく歩いて、ふとベイブは足を止めた。
いつか見たような手書きの肖像画が、たくさん飾られている店があった。

色を染めているものも、白黒のデッサンだけの物もある。

王室の三姉妹の王女の絵がある。ベイビルートの絵もあった。

ベイブは一つ一つを見ていって、ダグの絵もあるのに気がつく、それを手に取った。

バディの背で、あの笑顔で笑っている絵。

「これ下さい」

店の主人に声をかける。

ダグがベイブの手にした絵を見て、

「俺の絵なんか買ってどうするんだ？」

金を払い絵を手に入れたベイブに、びっくりして言った。

「部屋に飾るのよ？どうして？」

ベイブが臆面もせず言うのに、ダグは目を見開いている。

「ダグ、あなたは私の憧れなの、昔から。」

今はもつとよ」

ベイブが笑顔でダグを見上げていうと、

ダグは言葉を失ってベイブを見た。

ダグは、今ベイブに言われた言葉の意味を考えあぐねている。

一回りも年下の少女が、自分に憧れていると。

って言っても、彼女だってハンドラー候補という優れた資質を持っている。

自分に憧れる理由が分からない。

ベイブの手を、また年甲斐もなく意識してしまう。
初心な少年でもあるまいし、情けない。
それでもこの手を振りほどく気にはなれないのは、
一体どうしたことなんだろう。
ダグは自分の感情に困惑していた。

ベイブの中でのダグの存在は、
ドラゴンの島から帰ってきてから、絶大なものになっていた。
もちろん、ホープの訓練を教えてくれる師でもあり、
尊敬と敬愛に値する存在でもあるのだけれど、
ベイブの中では、ダグに対する別の思いが芽生えていた。

あの穴に落ちていたのを助けてくれた時、
確かに、ダグは私を必要だと言ってくれた。

例えそれが色気の無い、
ハンドラーとしての資質を見極めたいという理由であっても、
ベイブの存在理由を見つけてくれたのには変わりない。
一方的にダグに対する恋に近い感情が、ベイブの中で生まれつつあった。

ダグの絵を大事に抱えて、
ベイブはダグの手を離さないように、祭りの雑踏を歩き続ける。

ふと、開けた場所に出た。

広場のような場所で、出店はその広場をぐるりと取り囲みながらも、場所を空けている。

そこでは、たくさんの人たちが流れる音楽に合わせてダンスをしていた。

お洒落をした町の男女が、今は軽いワルツの曲に合わせて踊っていた。

それは王宮の堅苦しい舞踏会なんかとはまるで別物で、皆心底、楽しそうに踊っていた。

ダンスなど義務で習いはしたけれど、

王宮の舞踏会では苦痛でしようがなくてきたベイブも、この町の人達の楽しそうな様子を見ると、踊ってみたくなる衝動に駆られた。

「ダグはダンスは好き？」

ベイブが踊る人達を眺めながら聞くと、ダグは肩をすくめる。

「ベイブが踊りたいなら、付き合ってもいいが」

キラキラ期待に光るベイブの目を見て、他に答えようが無かったダグは、

また苦笑して答えた。

自分の格好、袖なしの白いシャツに黒い皮のパンツを見下ろしたベイブは、

「でも、これじゃあ、あまりにも酷いから、

あそこの古着のお店でダンスに似合うドレス探してくるわね。ちよっと待ってて」

ダグは、ベイブが急いで行くのを見ていた。

すっかりなんだか本来の自分の調子がまるきり狂ったダグは、
一体どういうことなんだろうかと、さっきまでベイブが握っていた
自分の手を、

ため息をついて眺めていた。

ダンス

しばらくその場に立ち尽くしていると、
ふいに自分の手をとられて、ダグは振り返った。

肩を出したデザイン。

銀の糸の刺繍が美しい、裾が長い青いドレスを着たベイブが、
につこりと微笑んでいた。

短いブロンドの髪には、ドレスと同じ色の花の髪飾りをつけている。
「お店の人に選んでもらったの。着ていた服も預かって貰っちゃった」

ドレスはすらりとした体にあつらえたかのように、ぴったりと合っている。

足元にはかかとの高い銀の靴。

見たこともない美しいベイブの姿に、ダグの心臓がどきりと音を立てた。

ふと、ずっと憧れていたベイビールート王女の姿に、
ベイブの目の前の姿が重なる。

ダグは小さく首を振ると、その勝手な妄想を打ち消した。

「ね、踊りましょう？」

ダグの手を掴んで、ベイブは笑顔のまま、
音楽のかかる広場の中へと入って行った。

見慣れぬ美しいベイブと、

この国では知らぬ人のいない有名なドラゴンハンドラーのダグの登場に、

辺りの踊っていた町の人間たちが、

みなざわめいて二人のための場所を空ける。

ダグの手を離すと、ベイブは王宮の舞踏会でやっていたように、片足をドレスの中で曲げ、両手でドレスの裾を少しつまみ、ゆっくり腰を落として、笑顔でダグにお辞儀をした。

その仕草に見とれてしまったダグは、はっと我に返って苦笑すると、自分も貴族のように左手を胸にあて、頭を下げてベイブにお辞儀を返した。

ベイブが伸ばしてきた右手を、ダグは自分の左手に乗せる。左手でベイブがダグの肩の下に手を添えると、ダグはベイブの腰に手を回した。

ダグのリードに任せてベイブがステップを追うと、

「一体、どこで習ったんだ？」

ダグがベイブに踊りながら聞く。

「ダグこそ、どこで覚えたの？」

私が今まで踊った誰よりも上手だと思っただけれど」

ダグはふっと笑って、

「お前は謎が多いな。強くてがさつな女かと思えば、淑女のように振舞う」

「ダグこそ、海賊みたいに乱暴かと思えば、

こうして、優雅にダンスのパートナーをリードするなんて」

ベイブがダグの目を見て面白そうに言うと、ダグもベイブの目を見て小さく笑った。

ふと、胸の高まりに息が詰まって、

ベイブは視線を落とした。

背の高さの違いは、ベイブが履いている高い靴のせいで、普段より縮まっている。

ベイブの目の高さは、丁度ダグの唇の前だった。

辺りの町民達は、自分たちも踊りながらもダグとベイブの姿に見惚れ、ため息をついていた。

飲み屋の女たちの他には、これといってダグに恋人の噂はなく、町の女達は自分こそが、いつか彼の恋人になれるのではと淡い期待を抱き、

ダグに黄色い声を上げていたりしたのだけれど、
たった今、そのファン達の失望を誘う噂が生まれたところだった。

そういえば、この間崖から身投げした第三王女のベイビールートに似ているような、

ブロンドの美しい女性。

一体、あれは誰なのだろうか。

明日からの町の女たちの一番の噂話になりそうだった。

ワルツが終わり、もっとゆったりとした曲に変わる。

ダグが踊りをやめようとすると、
ベイブがダグの胸に寄り添ってきた。
さっきよりも二人の体の間に、隙間がなくなる。
ダグは戸惑いながらも、ベイブの手を自分の胸に持ってくると、
ベイブの背中を軽く抱いてダンスを続けた。

ダグの中に、ある焦燥感が生まれていた。
仕事仲間であり、指導していかねければいけない後進のベイブと、
こんな風に関わっていいのだろうか。
ドラゴンの島から帰ってきて以来、
どんどんベイブのダグに対する態度は変わりつつある。
それはきつと誰の目からも明らかに違いはない。

指導者を慕うというよりは、まるで兄か恋人に対する親密な思慕。
兄ならまだいい。
けれど、こうして自分の胸に頬を寄せているベイブからは、
いくら恋愛に鈍感な自分だとはいえ、もっと違う物を感じていた。

恋愛に慣れている女たちのあしらいならば、慣れている。
でも、こんなに何の計算もない、
無垢で純粋な気持ちに向けられることには、
ダグはまるきり慣れてはいなかった。

ベイブがダグを見上げる。

心なしか、潤んだ瞳。

その少し開いて微笑んでいる唇は、とても無防備で、
触れてみたい衝動に駆られて、ダグは自分に愕然とする。

馬鹿な。

一回りも年下の少女に。

ベイブが何を思ったか、

ダグに向かって顔を上げたまま、目を閉じる。

ダグは驚いて、ただベイブの目を閉じた顔を見下ろすだけだった。

そして、かすれる声で言うのがようやくだった。

「何をしている？」

ベイブは目を閉じたまま言う。

「男の人が顔を近づけてきた時には、目を閉じろと習ったから」

その言葉に、ダグは驚いて黙り込んだ。

今浮かんだ無意識な欲望が、ベイブに伝わってしまったのだろうか。

「そんな勉強もしたのか」

ふざけた口調でごまかそうとしている自分に、ダグは自分で呆れた。

「したわ。お嫁入り前に」

そして、自分が無意識に言った言葉に気がついて、
ベイブも自分で愕然として、思わずダグの胸を押して体を離れた。

「もう遅い時間だ」

気まずい雰囲気、我に返った二人。

「帰ろう」

ベイブも頷いた。

嫁入り前？

ダグがベイブの言葉を反芻する。

どう考えても、ハンドラー候補のベイブとはイメージが結びつかない。

一体、何者なのか。

でも、その疑問よりも今は、

己の中に生まれつつある感情がどう形を変えるのかの方が、
ダグには問題だった。

絆になる遊び

ホープが孵化してから、一ヶ月になった。

両手で抱えるほどだった体も、もう今はベイブの身長と同じくらいにまで、

成長している。

黒味を帯びたうろこ、頭の上の鶏冠とみかに似たひだ、丸くて黒い瞳。

生まれたばかりはよじれて小さかった前両足の鉤爪から伸びる翼も、今は立派に翼の形になってきていた。

体の割りに翼は小さかったし、まだ飛べはしないようだったけれども、結構早く歩けるようになっていた。

「だいぶ、ホープの意識がベイブに来るようになったな。

いつもホープがお前の姿を追うようになった。でも、今の段階ではあくまでも、

いつ餌が貰えるか、という期待だけからホープはベイブを見ている。

餌だけの意識だと集中は短い。これからはもっと長く集中を保てるようにしなければならない」

ダグとベイブはホープを連れて、近くの海の砂浜に来ている。

「つまりは、これからどういう風にホープを訓練していけばいいんだ。分かるか？」

ダグが言うのに、ベイブはホープの頭を撫でながら首を傾げる。

「いいか、海賊討伐なんて仕事は、はっきり言ってホープには関係のない事だ。」

それはあくまでもこちらの都合であって、ホープにはどうでもいい。

そのどうでもいい事に嫌がらずに、いかに付き合ってもらえる様仕向けるか、

どういう意識を持って訓練していったらいいのかっていうことだ」
ベイブは考えもつかず、ダグを見て首を傾げていた。

白い砂浜。ダグとベイブの他には誰もいない。

天気の良い日だった。穏やかな潮風が辺りに吹き渡っている。

ダグは黒いタンクトップに作業用のカーキのパンツ。

逞しい胸と腕があらわになっている。

ベイブは最近市場で買ったＴシャツに、短いパンツを履いていた。

そのすらりとした長い足は、日に焼けて小麦色になっていた。

ふと、ダグは口笛を吹いた。

遠くで待たされていた茶色いもっぷのような大きい犬のジャスパーが、

待っていたとばかりに、こちらに吹っ飛んでくる。

「基本、犬もドラゴンも訓練は一緒だ」

ダグは言った。

「種を超えたもの同士が、どういう風にコミュニケーションをとればいいのか。」

そついう点ではまるきり同じだからだ」

ダグはジャスパーに向かって、黙って人差し指を一本立てる。
ジャスパーは素早くその場で座った。

手のひらを開いて下に向ける。
ジャスパーは伏せた。

手のひらを上に向ける。
ジャスパーは四本足で立った。

そして手のひらを右に向ける。
ジャスパーが右回りをする。

手のひらを左に向ける。
ジャスパーは左に回った。

「すごい」
無言の指示を聞き分けるジャスパーのとの息の合い方に、
ベイブは感心して見入っていた。

指示が終わると、ダグはとんでもなく大きい声で楽しそうに大げさに褒めながら、
物凄い勢いでジャスパーに抱きつき、その体を砂浜に転がした。
ジャスパーも嬉しさと楽しさにはじけて、
負けじとダグの体に飛びつきダグを押し倒す。

しばらく、ダグとジャスパーは砂浜を走りまわり転げまわり、
楽しそうに遊んでいるのを、ベイブは微笑んで見ていた。

いつかもこうして、砂浜でジャスパーとダグが、
楽しそうに走りまわっていたのを見たことがあった。

そして、ベイブは気がつく。

ホープにとつて、訓練が遊びにならなければいけないのだ。
それも楽しい遊びだ。

ダグのバディにとつても、ドーンのジェシカにとつても、
空を飛び海賊討伐に付き合つて出て行くのは、あくまでも遊びの延
長。

楽しくなければ、ドラゴン空を飛んではくれないのだ。

ベイブは立ち上がると、腰にぶら下げてある魚の入った袋から、
小さい魚を一匹取り出すと、ホープに見せて、

「ほら、こつちだよ！」

言つてゆつくり走り出す。

ホープは首を傾げて、でもベイブの手の中の魚を見ると、
後を追つて歩き始めた。

追いかけてくるホープを誘うように明るい声をかけながら、ベイブ
は逃げていく。

ホープは一声小さく鳴くと、頭の鶏冠とさかのようなものを振りつつ、
早足になってベイブを追いかけた。

追いつかれたベイブが魚を放り投げる。

ホープは喜んでその投げられた魚を追いかけた。
そして拾つて食べる。

ベイブは大きな声でホープを褒めて、その体を大げさに優しくたた
く、

また袋の中から魚を出してホープを誘つた。

ホープは見るからに楽しそうに、はしゃいでベイブの後をついていく。

ダグがそれを見ていた。

楽しそうに遊んでいるベイブとホープに、自然と笑みが浮かんだ。しばらく眺めていて、十分だと察するとダグはベイブとホープを呼んだ。

「それでいい」

ダグは笑ってベイブに言った。

「次にこの人は何をして遊んでくれるんだろうという、ドラゴンの興味が絶えない事が、

ハンドラーの信頼へと変わっていく。

常に新鮮な遊びでもって、ホープの興味を常に惹きつけるようにするのが、

今の段階だ。気長な訓練だが、一番基礎となる大事な絆だ」

ダグが言くと、ベイブは満面の笑みで頷いた。

訓練の一日が終わり夜になると、ベイブはダグの部屋を訪れた。

「今日はね、ライスに借りたレコードがあるの。」

「すごくいい曲だから、一緒に聴かない？」

ベイブがいうと、ダグは出かける支度をしている手を止めて、

「悪い、今夜はドーンと他の野郎らと、飲みに行く約束があるんだな」

黒い皮のパンツにグレーのシャツのダグは、とてもセクシーで魅力的だった。

「そう」

ベイブは明らかにがっかりして、肩を落として自分の部屋に戻っていく。

ダグはベイブの去っていく姿を見送って、小さく息を吐いて、後ろ髪を引かれるような気分を振り切り、家を出た。

町の行きつけの酒場にはいつものように、討伐団のメンバーとダグとドーンがいて、

同じようなあまり柄の良くない客で溢れて煙草で煙った薄暗い店の中では、

それぞれカードやビリヤードをして賭けて遊んだり、時間制で恋人になってくれる、酒場の女達をからかっていたりしていた。

ダグと少し離れて座っているドーンは、

今日は鮮やかなオレンジの女物の服を着ていて、その隣には、いつもドーンが鼻^{ひいき}尻にしている時間制の恋人の少年が座り、

親しげに二人は寄り添って、酒のグラスを傾けていた。

ダグは一人で酒のグラスを傾けていた、

「最近、冷たいんじゃない？」

酒場の赤毛の女が、ダグに声をかけてくる。

体に張り付くような服の、ボタンが飛びそうな豊満な胸をダグに寄せて、

ダグのテーブルの端に腰をかける。

「前は週に二度も三度も、買ってくれたのに」
女が指でダグの胸元を撫でる。

「ここところ、仕事が忙しくてな」

ダグは女を見ずに、グラスに口をつけた。

「ダグラス・マーレイとなら、料金無しでサービスしてもいいわよ？」

女が言うのに、ダグは目を上げずにふっと笑った。

「それじゃ商売にならないだろう」

女はダグの頬に手を伸ばして、

「赤毛よりもブロードが好きになったなら、染めてあげるわ」

少し真面目な声色になって、ダグの顔を自分に向かって言う。

ダグはため息をついた。

「別に、赤毛が嫌いになったんじゃない。ただ気が向かないだけだ」
ダグは自分の顔を触る女の手を掴むと、

「悪いな」

謝って手を離れた。

体の相性が気に入って、以前は良く買っていた女だった。でも、ここところ、どうしても前のように気軽に女を買う気にならない。

欲求は相変わらず自分の中にくすぶっているはずなのに、いざこうして出てきてみると、その気になれない自分がいる。最近、自分で自分の気持ち理解できない時が増えてきていて、ダグは混乱していた。

ふと、ドーンがダグの側にやって来た。

ダグの飲んでいるものと同じ酒のグラスを持っている。

そして、ダグの目の前に置くと、

「これ飲んで、もう帰ったら？」

女も買わずに、ここにいてもしょうがないでしょう？」

ダグがドーンを見る。

「亡くなった第三王女のベイビルト様には申し訳ないけど、

ダグの心の中には、もう違う17歳が住み着いてるみたいね」

ドーンがダグの目を覗き込んで言う。

「そんなんじゃないよ」

ダグは言うつと、ドーンが超越したグラスの酒を煽って一息に飲んだ。

ドーンは肩をすくめて笑うつと、恋人の少年のもとへ戻って行った。

ダグはグラスを空けると、席から立ち上がり酒場を出た。

キス

酒場からの帰りがけ、
屋台の出店の店先に女物の雑貨を売っているのを見つけて、
ダグはふと足を止めた。

白い貝殻のモチーフをあしらった愛らしいネックレスが、ダグの目に付いた。

ベイブに似合いそうだと思った。

店の主人がダグに話しかける。

思わず、ダグはそのネックレスを買っていた。

手にした包みに、ダグは苦笑いをした。

一体、俺は何がしたいんだ。

自分に呆れて首を左右に振りながら、ダグは家へと向かった。

ダグ達が町に頻繁に出かける理由は、ベイブにはなんとなく分かっていた。

団員達が話している下世話な話なら、毎日のように耳に入る。

ベイブはライスに貸してもらったレコードをかけて、その切ない恋の歌を聴きながら、ソファの上で膝を抱えていた。昼間遊び疲れたジャスパーが、ベイブの隣で寝ている。一人が寂しくて、ベイブはダグの家から勝手に、ジャスパーを連れて来ていた。

やはりベイブは、ダグのような大人の男性にとっては、子供でしかないのだろう。

いくら嫁^{よめ}げるような年齢ではあっても、まだまだ実際は子供で、女としての魅力がないのは、重々承知だ。ましてや、自分はダグが幻想を抱いているベイビルトのような、おしとやかな王女でならない。がさつで変わり者の王女なのだ。

自分の頬に涙が流れるのを感じて、ベイブは驚いた。

今までこんな風に、誰かを思っ^て泣いたことは無かった。

涙が流れるままに、ベイブはダグを思った。

今頃は、大人の綺麗な女の人と一緒にいるのだろうか。

それ以上の妄想を抱いて嫉妬をするには、

あまりにもベイブはダグに依存していた。

ベイブにとって、ダグは自分が自分であるための、

唯一の存在だった。

こうしてハンドラーの仲間として、側にいれるだけでいい。そんな諦めが、ベイブを悲しい眠りに誘っていった。

ダグが家につくと、ジャスパーの姿がないのを不思議に思った。ベイブの家の前に行くと、部屋の明かりはついているのが、窓からもれる光でわかる。

扉に手をかけると、鍵はかかっていなかった。

ハンドラーの家は鍵をかける習慣がない。

いざ何かの時に、通りかかった団員の誰でもが、ドラゴンを助け出せるように。

少し躊躇して、ダグはベイブの部屋の扉を開けた。

明るい部屋のソファに、ジャスパーとベイブが抱き合うようにして眠っていた。

ジャスパーがダグに気がついて、ソファを飛び降りて駆けってくる。

ダグはジャスパーに静かにするようにと合図をすると、

ジャスパーは大人しく座って尻尾を振った。

ベイブはそのままソファの上で眠っている。

ダグはソファのベイブの隣にそつと腰をかけた。

その顔を見ると、頬に涙の後があるのがわかる。

ダグは不思議に思っ、その頬に指を伸ばした。

そつと頬を撫でて、涙を拭いながら思った。

何故、泣いていたんだ？

ダグは立ち上がってベイブを抱き上げると、隣の寝室まで運んだ。
ベッドに寝せて、肩までシーツをかけてやる。

ベイブの無防備な唇に、ふと目がいった。

ダグはその場に固まると、その魅力と戦った。

かろうじて、今回も何とか己の欲望を押さえ込む。

ダグは首を振って、ため息をついた。

今までどんな女にも感じた事のないような、

慣れない感情がこみ上げてくるのを押さえ込むのに疲れて、

急に酒の酔いがまわって来たダグは、

ふらつきながらベイブの寝室を出ると、

ベイブが聞いていたレコードに気がつき、

音を最小限にして、針をレコードに落とした。

食堂のコックのライスに、借りたと言っていた。

メランコリックな曲が流れ始める。

ライスがこんな曲を聞くのか。

苦笑いをして、ダグはソファに腰掛けた。

君が私を愛する夢を見たのを

君は許すにちがいない

私の眠りの中までも 君は怒りを忍ばさないだろう

ただ 幻の中にだけ、君の愛は生き
目覚めれば、私はただ涙するばかりなのだ

幻の中、

美しい君は微笑むのだろうか

わが罪の償いが足らぬと君は思うな
君の姿が夢にあらわれて、眠りを惑わすとも
目覚めることが、私の十分な責苦となるのだ

ソプラノの歌手の美しい声。

ベイブの聞いていた曲は、悲しい片思いの恋の歌だった。
ダグは、ソファから立ち上がれずにいた。
ベイブはこれを聞いて泣いていたのか？

まさか、俺のせいで？

その思いはきつと、自分の自惚れではないだろう。

ポケットに入っている貝殻のネックレスを、
包みから引っ張り出して眺めて、ダグは戸惑った。

これ以上、ベイブに気を持たせてしまうような事は、
慎むべきなのかもしれない。

ベイブは、ドラゴンハンドラーになり、
ストリレーツ王国のため、役立つ存在になるエリートだ。
希望に満ち溢れた存在。

それも女性初のハンドラー候補。
国の女達の希望の星になるのは必須だ。

ベイブにとって、ひと回りも年上で、
それも海賊上がりの得たいの知れない自分が、
ベイブのような少女にふさわしいのかなど、
考えるのすらも破廉恥だ。

自分はベイブにとって、単なる教官であり、
親しみやすい兄のような存在であるだけでいい。

ごちゃごちゃとした己の感情なんてものは、捨ててしまえ。
手にした白い貝殻のネックレスを、
またポケットにしまうと、ダグは自分の部屋に戻るため立ち上がった。

ベイブは、ふと目を覚まして自分がベッドに寝ている事に気がつく
と、

首を傾げた。

確か、ソファで眠ってしまったはずなのに。

時計を見ると、夜遅い時間。

まだダグ達は帰ってきていないのだろうか。

ベイブは水を飲み、部屋についているミニキッチンへ行くと、
グラスに水を汲みながら、窓から見えるダグの家を見た。
窓に明かりがついている。帰ってきたのだろうか。
そういえば、ジャスパーもいない。

ベイブは自分の家の扉を開けると、暗い外へと出た。
ゆっくりとダグの家まで歩いていく。

ダグの家の扉をノックする。

返事は無かった。

ベイブはそつと扉を開けた。

靴を脱いで、ダグの家に上がる。

ベイブの家と同じ造りの部屋。

ソファに身を投げ出すようにして座った姿勢のまま、
ダグは眠っていた。

ジャスパーは隣の寝室で寝ていた。

部屋に入ってきたベイブを見て尻尾を振ったものの、眠いのか、そのままそこで寝そべっていた。

ダグはこんな所で寝てしまうほど、お酒をたくさん飲んだのかしら。

ベイブはそろそろと近づいて、ダグの顔を覗き込む。

ウイスキーの香りがする吐息に、ベイブはやっぱりと思う。

普段少し位の酒でダグが酔ったのを見たことがないから、今夜は量を過ぎたのだろう。

ベイブはダグの顔に見入る。

日に焼けた浅黒い肌、意思の強そうなりりしい黒い眉、

閉じている瞳の瞳は、^{まっけ}とても長い。

広くて形のいい唇。

灰色のシャツに包まれているがっちりとした肩、

黒いパンツを格好良く着こなす、無駄な肉のついていない引き締まった体。

完璧だった。

きつと、国のエリートのハンドラーであるこのダグには、町の女の誰もが憧れているだろう。

穏やかな呼吸をしている。深く寝ているのだろうか。

試しに、小さくダグを呼んでみる。
それでも起きる気配はない。

ベイブはソファの前に膝をつくと、さつき散々聞いた、あのライスから借りた曲を小さく口ずさんだ。そして、ダグの顔を眺め続ける。それでも、ダグは起きる気配が無かった。

今夜はどんな大人の女性と、ダグは口づけたのだろう。

嫉妬にさえならない諦めの気持ちで、ベイブはダグの唇を見ていた。

そして、ベイブはゆつくりと顔をダグの顔へと近づけると、自分の唇をダグの唇に重ねた。

触れるだけのキス。

ベイブはゆつくり顔を上げると、小さく息を吐いて立ち上がり、ダグの寝室からケットを持ってくるとそっとダグの体にかけて、部屋を出て行った。

家の扉が閉まる音を聞いて、ダグは目を開けた。

ベイブの唇の感触の残る自分の唇に指をあてて、再びどうしようもなくこみ上げて来る、名前の分らないこの感情を、

なんとかかもとの場所に押さえ込もうと、ダグは必死になっていた。

キス（後書き）

作者 注 作中のレコードの歌の歌詞は、

「バイロン詩集 阿部知二訳」より引用です。

なお、もとの訳文のひらがな表記の部分を、

読みにくいと判断して、数箇所勝手に漢字になおしました。
ご了承ください。

生まれついた高貴さ

ホープの訓練が始まって3ヶ月目。

体の大きさも尻尾まで入れて4メートル近くになってきていた。翼もだいぶしっかりとしてきて、ホープも広い場所に出ると、盛んに前両足の翼を、羽ばたいてみせる。でも、まだ空を飛べるほどの翼にはなっていないのか、飛ぶことは無かった。

「実際に海の上を飛ばせるのは、来月あたりからだろう」
ダグが言う。
ベイブは頷いた。

今、ホープの首と両翼の根元には、訓練用の鉄の輪がつけられている。
その輪からは鉄の鎖が伸びていた。
このハンドラー用の鎖と輪は、正式なものではなく、体の大きさもまだ定まっていなかったため、あくまでもまだ訓練のための仮のものだ。

「方向付けの意識を、ここしばらく作っていく」
ダグは言って、ホープの前に置いた高い台の上にベイブを上げ、丁度ホープの顔の前あたりに立たせながら言った。

ダグはホープの後ろに回って、鎖を手を持ち、

「いいか、俺が鎖を引いて、ホープの首の輪の上部に振動が伝わった時に、

すかさず餌でつつてホープに上を向かせるんだ。そしてタイミン
グよく上を向いたら、

褒めて餌をやる。それを繰り返すことで、ホープが首の輪の上部
に振動があつた時は、

上を向くのだという意識を持つようになる。下も一緒だ。この上
下の頭の動きを制御して、

実際に飛ぶときには、上昇と下降をハンドリングすることになる。
振動の強弱はまだ後として、今はその意識をはっきりつけさせる
ようにするんだ」

ベイブは感心して、ダグの話を聞いた。

「翼も基本的には、一緒だ。右の翼の根元の鎖を引くと、反射でわ
ずかに翼が下に向くのを、

手でもっと押さえて翼を下に向けるという意識をつけさせ、褒美
をやる。

その地道な繰り返しで、ホープに上下左右の意識を植え付けてい
くんだ」

いつも空で自由自在にドラゴンを操るダグとドーンを見て、

まるで魔法のようだと感心していたベイブは、こうした日々の地道
な訓練の作業と、

信頼の積み重ねとがあるからこそ成り立っていたのかと、
改めて驚いていた。

ホープが次は何をするのだろうと、ベイブの顔を興味を持って見つ
めているのが分かる。

ベイブはホープのその愛らしい表情を見て微笑むと、

ダグに言われた地道な訓練を始めた。

一日終了後、ドーンがダグのもとにやって来た。

「今夜も私たちと、飲みには行かないわけね？」

ダグの肩に手を置いて言う。

ダグはドーンを振り返った。

「まあな」

「町の酒場の女達がどれだけ、やきもきしてるか、

あんたは知らないでしょうね」

ダグは仕事の道具を片付けながら、肩をすくめた。

「で、今夜の予定は？」

ドーンが面白そうに続けて聞くと、

ダグは倉庫のあちら側で、やはり訓練後の道具などを片付けている

ベイブを見て、

「ベイブが、芝居を見に行くんだと」

ダグがぶっきらぼうに言う。

「まあ、お芝居！で、それにあんたが付き合うつと」

ベイブを見て、ドーンは言った。

「柄じゃないわねえ。付き合い長いけど、あんたが芝居に行くなん

て聞いたこともない！」

ドーンが笑うと、またダグは肩をすくめる。

「でも、まあ、私は別にいいと思うけど？12歳年の違うカップル

も」

「そんなんじゃないって」

ダグがドーンの言葉を即座に否定して言うのに、

「じゃあ、どういうことなの？」

あんたたちが、毎日のように仕事だけじゃなくて、

プライベートまで一緒に過ごしているってのは」

ドーンが正しい両腕を女物の服の胸の前で組んで、首を傾げてダグを見た。

「あいつに恋人が出来るまでの間の兄貴みたいなもんだよ。

ベイブともそう話をしている」

「兄貴？」

「ああ。ベイブがお互いに決まった相手が出るまででいいから、一緒にいたいって言うから」

ドーンは微笑んだ。

17歳のベイブの方が、上手じゃないか。^{うわて}

ダグに他に好きな人が出るまででいいから、一緒にいたいって、ダグにちゃんと伝えてるんだから。

女にはもてるくせに、妙にメンタルな恋愛に免疫のないダグは、ベイブに他の男が出来るまでの間、兄貴がわりとして側にいるというけれど、

側にダグがいつも一緒にいては、ベイブに他の男が寄ってくるわけがない。

寄って来ても、きっとダグが追い払いさえするだろう。

自分で言っている矛盾にまるきり気がつかないとは、不器用にもほ

どがある。

けれどもまあ、不器用にでもお互いに思い合っているのなら、別にそれでいいのだろう。

ドーンは心の眩きを隠して笑うと、

「ま、二人の間で話し合っていることなら、

私が口を挟むことじゃないわね」

手をひらひらと振って、

「酒場の女たちには、当分あんたは来ないと伝えておくわ。

泣く女がどれだけいるか。今度数えてきてあげる」

ダグとベイブから離れて行った。

夜もふけてきた、町の雑踏。

興行で各地を回って歩いている劇団の芝居を見終えて、

芝居小屋から出てくると、ベイブは興奮気味に芝居の目次を抱えながら、

今見た舞台のセリフを人目もはばからず、手振りも加えてうっとりして繰り返している。

「愛の営みを司る夜よ、お前の帳をぴったりと閉ざしておくれ。」

駆け去っていく太陽も目を閉じて、あの人が人に知れず、誰にも

見咎められず、
みとが

この腕に飛び込んで来られるように。もしまた恋が盲目なら、それこそ夜の闇にふさわしい。

来ておくれ、慎み深い夜、黒一色に装いも重々しい老婦人よ！」

ダグはそんなベイブがはぐれないように、その背中にさりげなく手を回しながら、

苦笑してベイブのセリフを聞いていた。

「良く、覚えられたな」

「だって、とつても素敵だったもの！付き合ってくれて有難う、ダグ」

ベイブはにっこり笑って、ダグの顔を見上げた。

ベイブは今日は、白いシンプルなストンとした足首までのワンピースを着ている。

すらりとした体のラインが自然と出ていて、ベイブの手足の長さが良く分かった。

ダグは黒いパンツに、いつもと違う襟のついたジャケットを着ていた。

その長身の逞しい体は、雑踏を歩いていても目立っている。

すれ違う女達が、ハンドラーのダグラス・マーレイだと気がつく、振り返って目で追っていた。

「でも、どうして家の争いのせいで、好き合っている恋人同士が、不幸にもすれ違って悲恋のまま、二人とも命を落とさなければならぬのかしら」

ベイブが芝居の内容を思い返して、ダグに聞く。

「由緒ある家の子息令嬢の結婚となれば、家同士の都合もあるんだ

ろっ。

貴族や王族なんかには、別に芝居じゃなくても、良く聞く話だ。この間、身投げされたベイビールート王女のように、高貴な生まれの人ほど、その生まれに縛られてしまうものだ」

ベイブは唇を尖らせて、

「そんなもの、全て捨ててしまえばいいじゃない！死んだと思ったら、

何でも出来るわ。何事も言いなりになって、一生を死んだように生きることを思ったら、

死んだ気になって生きる方がいいに決まってる」

最初は勢い良く叫ぶように言っていたベイブが、言葉の最後の方は勢いを失っていた。

ベイブがかつて、王宮で二番目の姉に言った言葉だったからだ。

一番上の王位を引き継ぐ第一王女は、

国王と王妃のお気に入りだったせい、

両親に嫌われていたベイブには、まるきり近づかなかった。

二番目の姉のデイジールートとも、決して仲がいいとは言えなかったが、

でも、たまには言葉を交わすこともあった。

ある日、デイジールートが嫁ぎ先を国王に決められて泣いている時に、

ベイブは同じ言葉を言ったのだった。

そんなに嫌なら、やめてしまえばいい。

それとも、言いなりになって、

一生を死んだように生きていくのか。

確か、そのデージールートの婚儀が行われるのは、今年中だっただろうか。

今まで自分の事で精一杯だったけれど、

デージールートは、あれからどうしているのだろう。

姉妹を思い出すと、

ずっとベイブの胸に引っかかっている思いも蘇る。

「ねえ、ダグ。高貴な身分に生まれてしまったら、やはり、そういう人達は我慢しなければならないの？」

自分の思うとおりの人生を歩むためにだけに、生きてはいけなの？」

ベイブの口調が変わる。

すぐるように見上げるベイブに、

「俺はまるきり、そういう立場ってのは理解出来ないが」

ダグは両手を肩の上で軽く上げて見せて、

「なんせ、俺は親も分からない得体の知れない素性なんだな」

おどけた口調で言って、

「でも、もしお前がベイビールート王女のように、

高貴な身分に生まれていたとして、

自分の意に沿わない婚儀を進められていて、死にたいと思っているとしたら」

ベイブはダグの顔を食い入るように見ている。

「その時には、全てを捨てて逃げて来いと言う」

あまりにも真剣なベイブの顔から照れくさくて、一旦目をそらして、でもまた目を戻して、ダグは小さく笑って言った。

ベイブの顔が、ほつとした笑顔になる。

「ずっと、一緒にいてくれる？」

ベイブが言った。

ダグは頷いた。

「俺たちは、ストリレーツ王国のハンドラーだ。

仲間の絆は絶対壊れない。ずっと一緒だ。

っても、お前が早く一人前のハンドラーなればって話だが」

ダグがおどけたまま言つと、

「有難う」

ベイブは真面目に言つて、ダグの手を心を込めて握った。

「本当に、有難う」

あまりにも真剣なベイブの表情に、ダグは戸惑って、

「腹減ったな。おまえは何が食いたい？」

話題をそらすようにして、ダグはベイブに明るく言った。

「行きたいところなら、あるわ」

ベイブが答える。

「どこだ？」

ダグが聞く。

「いつも、ダグとドーンと討伐団の人たちが行っている酒場」

ベイブの言葉に、ダグは言葉を失う。

「だめ？」

ベイブが言うのに、

「何で、そんなところに行きたいんだ？ お前みたいな」

ダグが言いかけた言葉にすかさずベイブが口を挟む。

「私みたいな子供が行く場所じゃない？」

ダグはため息をついて、

「お前が思っているような、面白い場所じゃない」

かつて自分が買った娼婦達がうようよいる場所だ。

最近ブロンドの女を連れて歩いているという、

自分の噂が町で立っているのは、己でも知っている。

そこへ、ブロンドで小娘のベイブを連れて行ったら、
何が起るか知れたものじゃない。

「今夜もドーンとか、皆いるんでしょ？」

ベイブが言う。

「ダグが心配してるようなことは、何も起こらないわ」

まるでダグの心を読んだかのようなベイブの言葉に、

ダグはため息をついて、

「分かった、でも何か食べたらずぐ帰るからな」

ベイブは素直に頷いて、ダグを笑顔で見た。

生まれついた高貴さ（後書き）

文中の劇の台詞は、安西徹雄訳著から、シェイクスピアの「ロミオとジュリエット」よりの引用です。

酒場の恋人

酒場の入り口まで来ると、

本当に入るのか？という渋るような感じで、ダグが自分を振り返ったのを見て、

ベイブは笑顔でそんなダグの胸を軽く押しのけると、自分から店の中に入って行った。

薄暗い店の中には、柄の悪い男どもがたくさんたむろしていて、それぞれがテーブルで煙草をふかし、酒を飲んでいる。

カードをするもの、ビリヤードをするもの、嬌声を上げる女をからかうもの。

ベイブが店の中に入っていくと、

見慣れぬ若い女の姿に、男達の視線が集まった。

ベイブはダグを振り返って、

「これ、うちの団の食堂？」

眉をひそめてベイブが言うと、ダグは噴出した。

久しぶりに酒場に顔を出したダグを見つけて、

あちらこちらからの男達から、声がかかる。

団の男もいれば、ベイブの知らない男達もいた。

男だけではない。

ダグの姿を認めると、駆け寄ってくる女たちも多数いた。

ただ、側にいるベイブの姿に気がつく、慚然として女たちはベイブを睨んで、足を止めた。

空いているテーブルの一つに、ベイブとダグは腰をかける。

すると、ドーンが二人の姿を見つけてテーブルに近づいてきた。

「まあ、びっくりした！ベイブちゃんがこの店に来るなんて」

ベイブはにっこり笑って、

「いつもダグとドーンが、どんな所に遊びに来てるのか、

興味があつたから」

ベイブの白いワンピースの肩に手を置いて、ドーンが目を細める。

「最近のベイブちゃんのお洋服、とっても可愛いわ。

まるで討伐団に来た最初の時の、尖つて誰にでも噛み付きそうな雰囲気だったのが、

嘘のようね」

ベイブは笑った。

「だって、もう団員の人たちは知らない人たちじゃないし。

出かける時も、もう鞭ウインプも持ち歩いていないのよ？」

「お抱え用心棒がいるものね」

ドーンはダグを見て言った。

「あら、私素手でも戦えるもの」

ベイブが肩をすくめて言うのに、ドーンは大きく笑った。

「ここはこう見えても、シチューはとっても美味しいのよ？

食べてみるといいわ」

ドーンは言つと、自分のテーブルに戻って行った。

そこにはいつもの時間制の恋人の少年が座っている。

ベイブはその少年と仲良く肩を寄せ合つて話しているドーンをしばらく見つめて、

小さく肩をすくめた。

ベイブは店の中を見回して、意外と男たちの他に女の姿も多いのに気がついた。

壁のあちらこちら、カウンター席に、男達がカードで遊んでいる後ろに。

そして、多くの女の視線が、今ベイブの前にいるダグに集まっているのに気がつく。

ベイブは店の中を一通り見るとダグを見て、目を細めてにつこりと意味深な笑顔を作った。

ダグが居心地悪そうに、ベイブのその笑顔から目をそらしてウェイトレスを呼ぶ。

例の赤毛の女がこちらにやって来るのを見て、ダグは小さく舌打ちをした。

「ダグ、舌打ちをすると幸運が逃げていくつて、聞いたことがあるわよ」

咎めるようにベイブがいうと、

「確かに、そうかもな」

ダグが大きく息を吐いた。

テーブルにやって来た赤毛の女をちらりと見ると、

ダグは自分の酒とベイブのジュースとシチューを注文した。

女はしばらくじっとダグを見て、でも何も言わずにテーブルから去っていくと、

カウンターの中にオーダーを通した。

別のテーブルで、誰か男がダグの名前を大きく呼ぶ。

ダグはそっちの方を見て誰だかわかると手を上げて、

「悪い、ちょっと待っててくれるか」

ベイブが頷くと、そちらのテーブルに歩いて行った。

ダグは呼ばれた男のもとにいくと、肩を叩き合って挨拶をしていた。親しい友人なのだろうか。

やがて、さっきの赤毛の女が飲み物と料理の皿を持って戻ってきて、

ベイブの前に料理と飲み物を置いた。

そしてそのまま赤毛のウェイトレスは、

じっと自分の顔を見下ろしているのに気がついて、ベイブは顔を上げた。

「まさか、あんたみたいな子供がダグラスの恋人ってことはないわよね」

無遠慮な言葉に、ベイブは少しむっとする。

「ダグラスの親戚の子供とか？」

今にもシャツのボタンを飛ばしそうな豊満な胸を、誇張するようにベイブに突き出して、

面白そうな声で言いながら赤毛の女はベイブの顔を覗き込む。

「私は、もう大人よ」

ベイブが言くと、その赤毛の女は口の端に笑みを浮かべて、

ベイブの耳元に口を寄せた。

「なら、あんたも知ってるっていうの？ダグラスがどんな風に女に口づけるのか、

どんな風にあの手が女の体に触るのか、あの逞しい腕はどんな風に女を抱くのか」

その言葉を聞いて、ベイブの頬が青ざめた。

「私はダグの恋人じゃないから、そういう事は知らないけど」
かすれた声でベイブは言った。

「でも、今日一緒にお芝居に行ってくれたわ。」

あなたはダグと一緒に芝居に行った事ある？」

ベイブは赤毛の女の顔を見て、はっきりとした口調で言った。
赤毛の女がひるんで息を飲む。

「ダグの飼っている犬のジャスパーには会ったことがある？」

モップみたいな犬だけど、ダグはとっても可愛がつてるの」

ベイブが言葉を続けると、女はベイブから目をそらした。

「ダグのドラゴンを近くで見たことある？私はあるわ」

ベイブが口を閉じて、赤毛の女を見上げる。
女は悔しそうな顔をしてベイブを睨むと、テーブルから去って行った。

ベイブは違うテーブルで楽しそうに話をしているダグと、
今テーブルを去っていった赤毛の女とを見比べた。

ダグはあの女の人に口づけをし、
体に触り抱きしめたのだろうか。
きっと、ベイブをここに連れて来たくなかった理由が、
そういう事にあるんだろう。

ベイブは目の前に並んでいる、ダグが自分のために頼んだ飲み物の
グラスを掴むと、
息を止めて一息に飲んだ。

途端、胸が燃えるように熱くなるのを、ベイブは服の上から手で押
さえた。

体中の血が燃え上がるような感触。大きく息をつく。
酒を飲んだのは初めてだった。

悪くない。

ベイブは空になったグラスを掴むと立ち上がって、
カウンターまで歩いて行った。

中にあるバーテンに、その空のグラスを差し出す。
そして、そのままカウンターのスツールに腰をかけた。
隣に座っている男が、じろじろとベイブを見る。

ベイブは相手にせず、バーテンから酒を受け取ると、

また一息に飲み干す。

「いい飲みっぷりだな、お嬢ちゃん」

ひげの濃い体の大きい男だ。知らない男だった。

「いくらなんだ？」

男の言葉に、意味が分からずベイブは男の顔をまじまじ見つめる。

「一晚、買ってやるって言ってるんだ」

ベイブはここにいる女達がどういふつもりでここにいるのか、
ようやく、意味が分かった。

なおのこと、ダグはここにベイブを連れて来たくはなかったわけだ。
ダグもこうして、女の人を買っていたんだろう。

会ったばかりの時に、確かそんなことを自分でも言っていたつけ。

男がベイブの手を握ってくる。

酒の酔いも手伝って、ベイブはただそれを見ているだけだった。

「こいつは俺の連れだ」

ふとダグの声がして、ベイブの手を握っている男の手をダグが掴んだ。

ダグを振り返った男は、あわてて手を離す。

そして黙ってカウンターのスツールを下りて、どこかへ行った。

「お前、何を飲んでるんだ」

ダグがベイブの持っているグラスを取り上げて言う。

「もう大人なもの、少しくらい大丈夫よ」

言いながら、スツールから下りたベイブの足元がふらついた。

「悪い、水を一杯と、あと何か持ち帰りで食べ物を見繕ってくれ」

ダグはバーテンに声をかける。

バーテンはダグに頷いて、水のグラスを差し出した。

ダグはベイブをテーブル席に連れ戻した。

「好みのタイプは、あの赤い髪の人？」

綺麗な人だものね。スタイルも最高」

ダグに差し出された水のグラスを拒んで、

「ねえ、ダグ。もう一杯お酒飲ませてくれたら、

私先に帰ってあげる」

ベイブがテーブル越に、無邪気に言う。

ダグはカウンターの方からこちらを見ている赤毛の女に目をやって、そして、黙ってベイブを見た。

「何か、言われたのか？」

「特別なことは、何も」

ベイブは言って、また席から立ち上がろうとした。

「分かったから、もつと弱い酒ならあと一杯だけ飲ませてやる」

ダグはため息をついて、

カウンターに行き、バーテンに果実酒のグラスを頼んだ。

そして何気に、その赤毛の女の前を通るときに、

「あまり子供をからかうな」

低い声で女に言う。

「からかわれたのは、こつちよ。」

ダグラス・マーレイがああいう少女趣味もあつたとはね」

赤毛の女はダグの顔を見て、

「まあ、あんな寝んねに飽きるのもすぐでしょうから、

そしたらまた戻ってきてよね」

赤毛の女は強く言うと、ダグの側を離れた。

ダグが、小さな甘い酒の入っているグラスを持ってテーブルに戻ると、

ベイブはテーブルにうつ伏せていた。

ダグはしょうがないという風に苦笑しながら、店の勘定を済ませ、慣れない酒で朦朧としているベイブを抱え、店を出た。

ベイブの家の扉を開け、店から持ち帰ってきたサンドイッチをテーブルの上に置き、

ベイブをソファの上に座らせると、ダグはグラスに水を汲んできてベイブに差し出す。

だいぶ酔いの覚めてきたベイブは、水のグラスではなくダグの手をつかむと、

ダグを見上げた。

「私にも」

ベイブが潤んだ瞳でダグの目を見て、言葉を躊躇する。

ダグは首をかしげて、ベイブを見た。

「あの赤毛の人にしたように、口づけをしてくれないの？」

ダグはベイブの言葉の意味がわかると、愕いてベイブから目を逸らした。

「お前は酔っ払っているんだ」

「ダグ！」

ベイブがダグの手を掴む手に力を入れて言う。

真剣に見上げるベイブの瞳の力に、ダグは今度は目を逸らすことは出来ず、

小さくため息をつく、そんないにベイブの前髪を手でかき上げて、額に唇をつけた。

ダグが体を起こすと、ベイブはしばらく黙って俯いて、やがて小さく息を吐いた。

そして、にっこりと笑って、ダグを見た。

「今日は本当に楽しかった。有難う、ダグ」

もうそこには、今さっきダグに口づけをせがんだあの潤んだ瞳は無かった。

ダグはベイブの部屋を去って自分の部屋に戻ると、

まっすぐに酒の瓶のもとにいき、栓を開けてグラスに注いだ。

琥珀色の酒をストレートで煽る。

ベイブに口づけをせがまれたあの瞳が、ダグの目に焼きついて消えなかった。

もう、一回り年下という言い訳では、自分を止められなくなってきているのは、

自分でも分かっていた。

欲望なのか愛情なのか、自分の中にベИБに対する何らかの感情が生まれつつあるのは、確かだ。

一度、箍^{たが}が外れてしまつたら、もう止められないだろう。
でも、俺にはベИБをハンドラーとして育てる責任がある。
絶対に、そんな事は出来ない。

ダグは胸を焼く酒に顔をしかめながら、大きく息を吐いた。

ジェラシー

ホープの訓練も4ヶ月目を過ぎていた。

久しぶりに大規模な海賊の襲撃があり、ダグとドーンはもちろん、コンドラッドもドラゴンを伴って海賊討伐に出かけた日の夜、仕事を終えて団の食堂にダグとドーンがいると、ベイブがやって来た。

「お疲れ様、ダグ、ドーン」

テーブルについて酒を飲んでいる、ダグとドーンに声をかける。

「海賊側が、7艘もいたんですって？」

同じテーブルにつくと、ベイブが聞いて来る。

「三頭のドラゴンがいたから、楽勝よ。これでベイブちゃんのドラゴンも加わったら、

鬼に金棒ね」

ドーンがベイブにウィンクをして言う。

ベイブはにっこりとドーンに笑った。

「今日ね、ダグがいない間に、ホープが自分で飛んだの。

飼育棟の中で、あまりに翼を羽ばたいているものだから、

独断と偏見で申し訳なかったんだけど、外に出してやったら、

海の上を飛んだの！」

ベイブがダグに言う。

「もしかして、勝手にやっつては駄目だった？」

嬉しそうな表情を無理やり押さえ込んで、殊勝にベイブがダグに聞

く。

「いいや、そろそろ時期的にはいい頃だ。今のホープの状態なら、呼び戻しも聞くだろう？」

ベイブは大きく頷いた。

「ちゃんと呼んだら、戻ってきたわ」

ダグは笑って言った。

「そろそろ鞍をつけてもいい頃だな」

「そう！訓練が楽しみ！」

ベイブは言っと、ダグ達のテーブルから立ち上がった。

「あら、ベイブちゃん、今夜も約束があるの？」

ドーンがダグをちらりと見て、ベイブに言う。

ベイブは食堂のカウンターの方を見て、

「ライスさんがまた新しいレコード貸してくれるっていつから」

ベイブが言っと、ダグが面白く無いのを隠さずに、

「ライスに言い寄られてるのか」

ベイブを見ずにぶっきらぼうに言った。

ベイブはむっとして、

「ライスさんは、奥さんもお子さんもいる人よ。そんなわけないじゃない。」

奥さんが歌が好きで、たくさんレコードがあるから貸してくれてるだけよ」

ベイブはテーブルを離れながら、

「ダグの方こそ、町で待っている恋人がいるでしょう？」

会いに行ったら？待ってるんじゃない？あの赤毛の人」

言っと、食堂のカウンターの中にいるライスの方へ歩いて行った。

「あらあら」

ドーンが、テーブルを去るベイブと自分の脇に座るダグを見て、驚いたように声を上げる。

「どうしたの？あんなに仲が良かったのに」

「どうもしねえよ」

ダグは言うと、カウンターの席に座り食堂のコックのライスと楽しそうに、

レコードのジャケットを見て話しているベイブを横目に、食堂を出て行った。

町の酒場。

今日はダグ一人でグラスの酒を傾けていた。

最近のベイブは様子が変わった。

訓練中は別に相変わらずだったが、訓練が終わるとベイブはダグを避けるようになっていた。

あの日以来だ。ダグは思う。

ここにベイブを連れて来た日以来。

それまでは、まるでジャスパーの子犬の頃を思わせるように、
ベイブは自分に纏わりついていたというのに。

食堂のカウンターで、ライスと楽しそうに話しているベイブの姿が
浮かぶ。

ダグの胸に、痛みが生まれていた。

今までの人生でまるきり親しみのないものだ。

ライスを見るベイブの瞳に、

もし、あの時のダグに口づけをせがむようなものがあつたとしたら。

ダグは自分の想像に耐えられなくなると、

飲んでいた酒のグラスをテーブルに打ちつけるように置き、

椅子から立ち上がって、あの赤毛のウェイトレスのいる方に歩いて
いった。

「今夜、空いてるのか」

ダグが言つと、

「お久しぶりね、ダグラス。待っていたわ」

赤毛の酒場の女はすかさず、ダグの肩に両手を絡ませ、
ダグを奥の個室へと導いた。

部屋の扉を閉めると、

赤毛の女が、ダグの唇に貪りついてくる。

ダグは大きく口を開いて、激しく女の貪りに答えた。
同時に女の豊満な胸を手で掴んで強く揉み上げながら、
女の足の付け根に手を伸ばす。

部屋に据えられているベットに女を押し倒して、
その首筋に唇を這わせながら、ダグはふとベイブを思った。

今、何をしているんだろう。

その途端、ダグの中から、
刹那な欲望のたぎりが嘘のように消え去ってしまった。
目の前にいる女の肌に口づけている事に、嫌気さえ差す。
まるで燃え盛る炎に、誰かが冷たい水をたっぷりとかけたように。

「悪いが」

ダグは動きを止めた。

女の体から自分の体を起こす。

そして、女を見て言った。

「今夜は帰る」

服の乱れもそのままに、呆気に取られた女はダグをただ見ているだけだった。

ダグはポケットから札を取り出すと、
女がまだ体を横たえているベットに置いて、部屋を出た。

家に戻るとベイブの家まで、足を伸ばした。

明かりがついていて、まだベイブが起きているのが分かった。耳を澄ますと、小さく音楽が流れてくるのがわかる。

ダグは大分前に町の露店で買った、

あの白い貝殻のネックレスをパンツのポケットから取り出して、ベイブの家の扉の前で眺めた。

しばらくそこで立ち尽くして考え込んだ後、

ダグはベイブの家の扉を叩いた。

軽やかな足音が響いて、目の前の扉が開く。

目の前にダグがいるのを見て、ベイブは驚いた顔をした。

「町に行っただと思ってた」

ベイブが言うと、ダグは黙って肩をすくめた。

途端に、ベイブの部屋からジャスパーが飛び出してきて、

ダグに飛びかかる。

「ジャスパー！」

不意をつかれて、ダグはジャスパーに押し倒されそうになりながら、ようやくジャスパーを抱きとめた。

「ごめんなさい、また勝手に連れて来ちゃって」

ベイブが申し訳なさそうに言う。

「一人だと、寂しくて」

ベイブが俯いた。

「ライスに借りたレコード、俺にも聞かせてくれないか？」

ダグが思い切ったように言った。

ベイブは顔を上げて、ダグの言葉の意味が分かると嬉しそうな笑顔

になって、

「ホットチョコレートご馳走するわ、どうぞ」

ダグを家の中に招き入れた。

「ホットチョコレート！」

ダグは目をぐるりと回して笑うと、

ジャスパールと一緒にベイブの家の中に入って行った。

バルク

ホープの訓練が5ヶ月目に入った。

白い砂浜に立ち、きらきらと輝く海の上をゆったりと飛んでいるホープを、

ベイブはじっと見ていた。

体調も5メートルを越し、黒っぽい体は成獣になりつつある。翼も大きくなり、広げると左右10メートルに及ぶ。

翼は十分大きいせいで、飛んでいる姿はとても優雅で、

羽ばたくのも最小限度、海風を上手く使って飛ぶのが上手だった。

「ホープのような飛び方は、ハンドラーとしても乗り心地がいいだろうな」

ベイブの側に立つダグが、やはりホープの飛ぶ姿を見ながら言った。

毎日海に出ているせいで、半そでのシャツから覗いているベイブの腕は、

すっかり小麦色になっている。

その首には、前にダグに貰った白い貝のモチーフのネックレスがかかっていた。

「バルクが来る。ホープのために作ってくれた鞍を持って来てくれるそうだ」

ダグが言うのに、ベイブは嬉しそうに頷いた。

「会うのは本当に久しぶり。今の私を見てバルクは何て言うかしら」

一日の仕事が終わり、ベイブが団の倉庫で道具を片付けていると、ドーンがベイブの姿を見つけてやって来た。

「お疲れ様」

ベイブがドーンに声をかけると、

「ねえ」

ドーンがベイブの側に寄って、声を潜めて聞いてくる。

「ベイブちゃんとダグって、お付き合いしてるの？」

ベイブは体の動きを止めて、ドーンに聞く。

「お付き合いって、どんな？」

「って、私が聞いているのよ」

ドーンが笑った。

「何もないわよ？」

ベイブは言って、道具の片付けを続けた。

「何もない？」

ドーンが素っ頓狂な声を上げるのに、ベイブは不思議そうにドーンを見る。

「どうして、そんな事を聞いてくるの？」

「ダグは酒場通いもやめたし、あなた達また毎日仕事が終わった後も一緒にいるようだから、」

てつきり、そうだと思ったんだけど」

「そんなんじゃないわ」

ベイブが言うつと、首を傾げながら離れて行こうとしていたドーンが、また戻って来てもう一度ベイブに言う。

「あなた達、よく手は繋いでるわよね？」

「そうね、場合によっては」

ベイブが答える。

「町の雑踏で、お互いがはぐれないようにする時とかね」

「キスはしてないの？」

ドーンが食いついてくるのに、ベイブは苦笑いした。

「ずっと前に、額とかにあったかも」

「額？」

またドーンが、素っ頓狂に叫ぶ。

「ダグが、額にキス？想像出来ないわ。具合悪くなりそう」

ドーンは言つて、自分の頭に手を当てながらベイブから離れていく。

そして、ふいに大きく手を叩いた。

「何だ、そういうこと！」

ドーンは思いついたように大きい声で言うつと、

ベイブを振り返りながら笑つて去つていった。

ドーンの一人芝居のような一連の仕草に、

「一体、何なのかしら」

ベイブは呆れたように言つて、ドーンの去つていった方を見ていた。

ドーンはコンドラッドと一緒にいるダグを見つけると、

話が終わるのを待って、ダグに近寄って行った。

「今夜もベイブちゃんと、お出かけ？」

ドーンが言うのに、

「また芝居だとさ」

ダグが答える。

「あんた、初恋でしょう？」

ドーンの突拍子もない言葉に、ダグはきよんとして、

「何だ？」

ドーンを見て言った。

「女を抱いた数は星の数ほどあっても、女に恋をしたのは」

ドーンがダグの胸に人差し指を当てて言った。

「ベイブちゃんが、初めてなわけね」

ダグは呆気にとられてドーンを見て、そしてその言葉の意味が分かれると、

否定するだろうというドーンの予想を思い切り裏切って、何も言わずに目をそらした。

ドーンはそのダグの反応に、天を仰いで両手を肩の上上げる。

「男が30近くになって、ようやく初めての恋をすることもあるなんて。」

神よ、まさしくこれは奇跡」

ドーンは芝居がかって言いながら、

「あんた達の方が、よっぽどその辺のへっぱこ劇団の芝居より面白いわ」

ダグの背中をたたくと、

「続きを楽しみにしてるからね。ダグの初恋物語の一ファンとして」
言って一人で大爆笑して、ドーンは去って行った。

「面白がってんじゃねえよ。こっちは洒落にならないってんだ」
去って行ったドーンに、ダグは消え入るように呟いた。

これが恋というものなのかは、ダグにはまるきり分からなかったけれど、

一つ確かなのは、もうそれまでのようにふらりと酒場に行つて、
気軽に女を抱く気になれなくなってしまったという事だ。

金で買う女を抱こうとすると、必ずといっていいほどベイブの顔を
思い出して、

その気が失せてしまう。

といつて、ベイブとの間に何があるわけでもない。

毎日ホープの訓練と一緒にして、仕事が終わった後も大体毎日一緒に
過ごす。

町へ出かけて芝居をみたり、買い物をしたりする時もあれば、
ただ団の食堂と一緒に食事をして、どちらかの部屋でレコードを聞
いたり、

ダグが酒を飲むわきで、ベイブがジャスパーとうたたね転寝をしていたり、
ただ一緒にいるというだけ。

それでもやはり今は、お互いから離れて一人にいる方が不自然にな
つてしまっている。

ダグは自分の部屋へ戻り、ベイブと出かけるために着替えた。

鏡に映る自分をちらりと見て、果たしてベイブと一緒に町を歩く年
上の自分は、

周りにどう見えているのだろうと思つた。

部屋の扉を叩く音が聞こえて、ダグが出て行くと、

今日は美しいブロンドの髪が一段と映える、

鮮やかな緑色のワンピースを着ているベイブがいて、ダグは目を細めた。

その首にはダグの買った白い貝のモチーフのネックレスが、いつもと同じようにある。

ベイブは一日一日、大人びてくる。

ダグは自分の心の中でざわめく感情の動きをごまかすことが出来ずに、

自嘲するように小さく笑うと、扉を閉めてベイブと歩き始めた。

自然に腕に回されるベイブの手のぬくもりに、

柄にもない小さい痛みがダグの胸にうずく。

まるで自分も10代に戻ってしまったかのような初心な感情^{つづ}。

ダグはそれをどう扱っていいのか、自分でも正直困り果てていた。

討伐団の施設から出るところで、

ベイブは見覚えのある懐かしい人が、コンドラッドと話しているのに気がついた。

皮のベスト、ごついブーツ、片方の足は義足だ。

長いあご髭。焼けた黒い肌の奥に光る鋭くも、優しい瞳。

「バルク」

ベイブはダグを見てバルクの名前を言っ指差すと、
ダグもそこにかつての懐かしい昔の師の姿を見つけた。

「バルク！」

ベイブは叫びながらダグのもとから、バルクのもとへと駆け寄る。
バルクが気がついてベイブを見た。

そして、そのごつい顔が満面の笑顔になる。

ベイブはバルクの胸に飛び込むようにして抱きつくと、
その大きい体を力一杯抱きしめた。

「元気にやっていたのか」

バルクがベイブの顔を両手で挟んで、自分の顔に向けさせる。
幼いころから毎日のように見て来た教え子の顔をまじまじと見た。

「しばらく見ない間に、綺麗になったな」

バルクは目じりを下げて、ベイブの頬を撫でた。

ベイブははにかんでバルクを抱く手を緩めると、

「私のドラゴンのために、鞍を作ってくれたって聞いたわ」

「ああ、持ってきた。明日早速つけてみることにしよう」

バルクが言くと、ダグがやって来てバルクに両手を差し出した。

「お久しぶりです」

バルクが気がついて目を見開く。

「ダグか、立派になったものだ」

そして、また目じりを下げるとダグの両手を自分の両手でつかんで、
二人は固く握手をしあった。

「バルク、しばらくゆっくりとしていくんでしょう？」

今日はちょっと出かけちゃうけど、明日たくさんお話出来るわよね？

あ、あれが私の鞍？」

ベイブははしゃいでバルクに言って、
バルクが乗ってきた馬につけてある台車の上のものを見つけると、
駆け寄って眺めた。

緑色のワンピースでお洒落をしているベイブと、それに合わせた身
なりをしているダグを見て、

バルクは首を傾げてしばらく二人を見比べていた。

そして、おもむろに口を開く。

「ダグ、あまりベイブに思い入れをするな」

真っ直ぐダグを見て、バルクは言う。

ダグは言われたことの意味が分からず、
何も言えずにバルクを見るだけだった。

「あの子はお前のものにはならないだろう」

ダグの胸にバルクの言葉が突き刺さる。

一体、どういう意味だ？

バルクはダグから視線を離すと、

「ベイブ、あまりいじるな。取り付ける前に壊れる」

鞍を一心不乱に見て触っているベイブに声をかけて、

コンドラッドと共に討伐団の施設の中へと入っていった。

ダグはバルクの後姿をじっと見つめる。

ベイブはダグの元に戻ってくると、

「お待たせ、さあ行きましょう」

ダグの腕を取って歩き出した。

去って行くバルクをじっと見ているダグに、ベイブは首をかしげる。
「どうしたの？」

ダグは我に返って、

「いや、何でもない」

答えると、ベイブと一緒に町へと向かった。

ハンドラーの責任

昨夜、一緒に芝居を見に行った後、最新新しく二人で行きつけるようになったカフェで、珍しくダグが酒の量を過ぎていた。

ベイブが朝日と共に起きて寝室を出ると、扉を開けて見えるベイブの部屋のソファに、ダグが眠っている。昨夜ダグの体にかけて毛布は、きちんとそのままになっていた。

まだ今日の仕事が始まる時間にはかなり早い。

そのまま寝かせようと、ベイブは足音をひそめて寝室から出た。

ダグの寝顔を見下ろす。

黒い髪が目にかかっている。静かで深い寝息。

ベイブはそつと指を伸ばして、ダグの髪をその目からどけた。長いまつげが現れる。綺麗な寝顔だった。

酒に強いダグが、酒を過ぎて酔っ払っても、いつもは、別に何が変わるわけでもないのだが、昨夜のダグは、いつもと違うところがあった。

ベイブの手を離さなかったのだ。

酔ってきているなと思った頃から、

ずっとダグはベイブの手を握っていた。

今まで、歩きながらお互いの手を繋いだり、

腕を組んだりはしたことがあったけれど、
食事をしたり、ダグが酒を飲んだりしている時に、
お互いの体に触れることは無かった。

何かあったのかしら。

ベイブは思ったけれど、

なんとなく、言葉にしてダグに聞くことは出来なかった。

でも正直な気持ちで言えば、

いつも大人で冷静なダグが、片時も離さずにベイブの手を握り、
自分の家にも戻らず、ベイブの部屋でこうして寝てしまった事は、
こそばゆくも、嬉しかった。

何故ならベイブはとうの昔から、

ダグラス・マーレイに恋焦がれていたから。

7歳の頃から。

ベイブは、自分の首のネックレスを指で触った。

このネックレスは、どういう気持ちでくれたんだろうか。
それは分からない。

けれど、一回り年の離れているダグの気持ちは、

日に日にベイブに近づいてきているような気がしていた。

ベイブはダグの寝顔に微笑んで、ホープの飼育棟へと向かうべく、
家の扉を出て行った。

朝焼けの海が目眩しい。

ベイブは目を細めて海をしばらく眺めると、

ホープの飼育棟の入り口の大きい扉を開いた。

土の床に草を敷き詰めた寢床で、

ホープは器用に、尻尾をくるんと丸めて寝ていた。

ベイブが棟に入って行くと、首をもたげる。

そして、大きい丸い黒い瞳を瞬^{まばた}いてベイブを見た。

「今日、バルクがあなたに鞍^{くら}をつけてくれるの。

体を綺麗に拭いておきましょうね」

ベイブがにつこり笑って話しかけると、ホープは大きいあくびをして、

翼のついた前足を片方ずつ伸ばした。

バケツにお湯を汲んでタオルを濡らし、大きいホープの体を拭く。

黒味がかったうろこは生温かく、ベイブがタオルで拭くとうろこが波立った。

丸い顔の鼻腔は、呼吸をするたびに開いたり閉じたりしている。

それに合わせて頭の後ろの大きい鶏冠^{とさか}のようなものが、上下左右に揺れていた。

ホープはドラゴンの中でも、愛らしい顔立ちだ。
ダグやドーンのドラゴンのように大きな口も、鋭い牙も少ない。
変わった種類のようなのだ。

汗まみれになってホープの体を拭き終わって、
「お疲れ様」

ホープの耳元に話しかけると、ホープは自分の丸い鼻先をベイブに
押し付けてきた。

ベイブは微笑んで、その鼻先を撫でる。

途端、ブシューと鼻の穴から吐いたホープの息の唾液に、顔をびっ
しり濡らされて、

ベイブは悲鳴を上げると、大笑いしてタオルで顔を拭いた。

自分の顔を拭き終わった後、ベイブはホープの大きい体に腕をまわ
して、

そのまましばらく寄りかかって抱きしめた。

ホープの呼吸をする動きが、波のようにベイブの体に伝わってくる。
ベイブは目を閉じて、ホープへの温かい愛情が自分の中から溢れ出
てくるのを感じていた。

しばらくして、汗まみれの服を取り替えるために、
部屋に戻ると、もうダグの姿は無かった。
きっと自分も着替えに行ったのだらう。

昨夜の出来事を、ダグは覚えているのだろうか。

ずっとベイブの手を握っていたことを。

ベイブはソファの上にたたまれている毛布を見ながら、シャワーを浴びるために浴室に行った。

朝食をとる為に食堂へ行くと、他のたくさんの団員はいるけれど、ダグもドーンも、コンドラッドもバルクの姿も見えない。

ライスに挨拶をしながら、朝食のスコーンとミルクを受け取り、ベイブは不思議に思っただけでもないので、どうして皆していない

別に海賊の襲撃があつたわけでもないのに、どうして皆していないのだろうか。

朝食をとり終わり、自分のハンドラー棟の家へ戻った時、その理由が分かった。

ホープの飼育棟の前に、食堂にいなかった面子が揃っていたからだ。バルクを始め、コンドラッドとダグにドーンまで。

ベイブはてっきりホープの鞍をつけるために集まっているのだろうと思って、

小走りに近づいて行き、でも何かその四人に自分の期待と反した不

穏な気配を感じると、
足取りは急に重くなった。

「何かあったの？」

ベイブが朝の挨拶をするのを忘れるくらい、四人の様子は変だった。
近くまで来ると、バルクがベイブを真っ直ぐ見て言う。

「ホープは、炎を吐く器官を口の中に持っていないことが分かった」
「え？」

ベイブが理解できずに、バルクの長い顎鬚あごひげの生えている顔をぼんやり見る。

「調べたら、ホープはダグやドーンのドラゴンのように、
口の中に炎を吐く器官が見当たらなかったんだ」

続けて、コンドラッドがベイブに向かって残念そうに言う。

「ベイブ、ホープは海賊討伐のドラゴンにはなれない」

「……どういうこと？」

ベイブはコンドラッドの顔を見て言った。

「ホープに鞍をつけることは、出来ないということだ」

「だって、半年毎日こんなに訓練してきて、

後は一緒に飛ぶ訓練だけになっていたのよ？

ダグだって、ホープはとっても優秀だって」

ダグを見て、ベイブは叫ぶように言う。

昨夜とは違う仕事用の服装に着替えているダグが、
ベイブを見て気落ちした声で言った。

「ベイブ、ハンドラーとドラゴンが、

何故討伐団の船より先駆けて、海賊に向かっていくか分かるだろう。

団の船よりも先に、一刻も早く海賊に攻撃を仕掛けに行くためだ。

だが、炎を吐かないドラゴンでは海賊の船に攻撃を仕掛けることが出来ない」

「そんな！」

ベイブは叫んで飼育棟の中に駆け込み、ホープを見上げた。

ホープは棟の外で集まっている人間たちの騒動を、一体何事なのかという感じで、

首を傾げてベイブを見る。

ベイブの目に見る見る涙が溢れ出した。

「討伐団のドラゴンになれないならば、ドラゴンの島にホープを返すの？」

ベイブは涙が流れるのもかまわずに、四人を振り返って言う。

四人が全員目を伏せた。

ベイブは涙を流しながらも首を傾げて、

バルク、コンドラッド、ダグ、ドーンを順番に見る。

全員が、苦虫をつぶしたような顔をしている。

「だって、討伐団のドラゴンになれないなら、

島に帰すしかないでしょう？」

ベイブが強く言うと、

「ベイブ、人に育てられたドラゴンは島では生きてはいけない」

ダグがベイブを見て言った。

「なら」

震える声で言葉を続けながら、

ベイブは心に迫る不吉な予感に、何者かに心臓をひねられるような恐怖を感じる。

「ホープはこのままで、別な新しいドラゴンを見つけなければいいじゃない」

ベイブが言うと、コンドラッドが言った。

「ベイブ、討伐団のドラゴンはペットじゃないんだ」
ベイブはコンドラッドの言葉に息を飲んだ。

「俺がまだ一人きりしかない、この国のハンドラーだった頃、
海賊の大砲の弾に当たって、俺と俺のドラゴンは負傷した」
ふと、バルクが自分の義足を見下ろして言う。

「ドラゴンは治る怪我だったが、俺はご覧のとおり、
ハンドラーとしては再起不能だった。でも、一度ハンドラーにな
ったものは、

最後まで自分のドラゴンに責任を持たなければならない。

何故なら、一頭のドラゴンのハンドラーは一人きりだからだ。

刷り込みで育てたドラゴンに、他のハンドラーという代えはきか
ない」

バルクの言葉に、ベイブは恐怖さえ滲ませて、

「バルク、あなたはあなたのドラゴンをその後どうしたの」

バルクは小さく息を吐いて、言った。

「薬殺による、安楽死をさせた」

ベイブはバルクの言葉に硬直した。

「まさか」

しばらくして、ようやくベイブは口を開く。

「ホープを、薬殺すると?」

言葉を搾り出すように言う。

ベイブの前に立っている四人は、黙ってそれぞれベイブを見た。

「そんなこと」

ベイブは四人を睨んだ。

「絶対させない!」

ホープに駆け寄って、その丸い鼻先を抱きしめてベイブは怒鳴った。

「ホープを殺すなんて、絶対させない！」

自分の顔を抱くベイブの顔から、涙が滴り落ちるのを、

ホープは不思議そうにみて、

ペロリと長い舌を出して、そのベイブの頬を舐めたのだった。

新しいハンドラーの誕生

ホープの飼育棟。

コンドラッドとバルク、ドーンは去って行き、今はベイブとダグしかない。

ベイブはホープの体に手を回して、ずっとしがみついて離さなかった。涙は後から後から湧いて出てくる。

理性では分かっている事柄も、感情ではどうにも受け入れることは、不可能だった。

「どうして、こんな事に」

ベイブはホープを手に入れた自分を、心底呪っていた。あの穴に落ちたときに、卵だったホープを穴の外に放り出した時に、あのままあそこで自分が命を落としていればとさえ、ベイブは思っていた。

ダグは飼育棟の壁に背中をつけて佇んだまま、ベイブを見ていた。「ベイブ、ホープに朝飯を食わしてやれ。ホープは腹が減っているだろう」

団員が運んできたホープの朝食、たくさんの魚の入った樽を見て、ダグが言う。

「それに毒が入ってるってわけ？」

ベイブは囁くような声で、ダグに言った。

「これには薬は入っていない」

ダグはため息をついて、樽から魚を一匹掴んで出すとベイブとホープの方へ近づいた。

ホープにとっても、ダグはずっと一緒だった存在だ。

ダグが魚をホープに差し出すと、ホープは嬉しそうに鼻を鳴らして魚を口にくわえた。上を向いて魚を喉に落とし込んで飲み込む。

ホープの頭の後ろにある鶏冠とさかのようなものが、嬉しい感情を表すかのように、前後左右にゆさゆさと揺れた。

「ダグ、お願いよ。ホープを見逃してあげて。

一人で生きていけるかどうかなんて、島に帰してあげないと分からないことじゃない」

ベイブはホープを抱きながら、ダグにすぐるように言った。

「もし島に帰したとしても、他のドラゴンからの縄張り争いに負けて、

ひどい目に遭って苦しんで死ぬだけだ。そんな思いをさせるなら、楽に死なせてやったほうがいい」

ダグはベイブに首を振って、静かに言った。

ふと、閉めてあった飼育棟の扉が開く。

数人の団員が、バルクとコンドラッドと一緒に入ってきた。

その団員達の手に、大きな注射器のようなものを持っているのが見える。

ベイブはホープの体を強く抱くと、今入って来た男達の方を見て、恐怖に表情を強張らせた。

「お願い、やめて！」

ベイブが男達に叫ぶ。

その悲痛な声色に、ホープがベイブの顔を見下ろした。

頭の上の鶏冠とさかが、不安げにわさわさと揺れる。

「バルク、コンドラッド、お願い！そんなことはやめさせて！」

コンドラッドはため息をつく、飼育棟の入り口に立ったまま、団員達に頷いて見せた。

大きい注射器のようなものを、それぞれ手に持った5人の男達が、ベイブとホープの方に近づいてきた。

「いやよ！来ないで！」

ベイブが体を引き裂くような悲鳴を上げる。

ホープがベイブを見て、そして近寄ってくる男たちを見た。

「やめて！」

ベイブがもう一度悲鳴を上げる。

その瞬間、ホープの頭の上の鶏冠とさかが、振動するように硬直したかと思うと、

ホープは男たちに向かってその頭の鶏冠とさかを向けた。

バリバリという重く鈍い発射音が響いたかと思うと、

近づいて来ようとしていた男たちが驚きの声を上げて、

その場から体を投げ出して逃げる。

ホープから自分達に向かって来たものから、すんでの瞬間で避けられた。

男たちがいた場所に、長さ1メートルくらい、

人の腕くらいの太さがある硬い棘とげのようなものが、

10本ほど、突き刺さっていた。

まともに当たっていたら、男達は体を串刺しにされていただろう。

ベイブを始め、今の出来事を見ていた全ての人間が、息を飲み、体がすくんで動けずにいた。

しばらくしてダグが動き、魚の入っている桶から魚を一匹取り出して、

ホープにそろそろと近づく。

「そうだ、ホープ。いいぞ」

ダグはわざと明るく言って、ホープに魚を差し出した。

ホープはダグを振り向いて、魚に気がつく戸惑ったように瞬きをして、

でもゆっくりとその魚を口に入れた。

頭を上げて魚を喉に落としこむ。

「よし、いい子だ」

ダグはホープの体を数回軽く叩いた。

「ベイブ、今度は男達じゃなく、あそこにある大きな樽を指差して、同じように大きな声を上げるんだ」

ダグが言うのに、ベイブはまだ涙のたまっている目を向けて、眉をしかめる。

「時間を置いてしまつては、ホープが分からなくなる。早くやるんだ！」

ダグは怒鳴るように言った。

ベイブは瞬きをして涙を振り払うと、ホープを見てお互いの視線を合わせ、

大きな声で「打て！」と叫びながら、棟の隅に置いてあつた樽を指差した。

ホープの鶏冠とさかが振動して硬直する。

そして、ホープは鶏冠とさかを樽に向けた。

次の瞬間、バリバリという発射音と共に桶は木っ端微塵に弾け飛ん

だ。

桶の無くなった棟の壁と土の床に、さつきよりも多い15、6本位の太い棘とげが刺さっている。

ベイブはダグを振り返って、目を大きく見開いた。

ダグが頷いている。そしてベイブに魚を渡した。

ベイブが笑顔になって、ホープに魚を差し出す。

「よし！ホープ、いい子よ！」

ホープは今度は躊躇ちゅうちうしないで、魚を口に入れて飲み込んだ。

バルクがベイブに近づいて、ベイブの肩を抱く。

そして、もう片方の手でホープを触った。

「素晴らしいドラゴンだ」

バルクが言くと、ベイブはまたこみ上げて来る涙を手で拭いながら、

「ね、私のドラゴンは凄いのよ」

言って、笑ってバルクの顔を見上げた。

「鞍くらは、今日中につけさせよう」

コンドラッドが言いながらベイブに近づいてくる。

そして、片手を差し出した。

「おめでとう、新しいドラゴンハンドラーの誕生だ」

ベイブはコンドラッドにも満面の笑顔を向けると、

「有難う」

言って、コンドラッドの手を握った。

ベイブはダグを振り返った。

「明日からは、実際にホープに乗って飛行訓練だ」

ダグが言うのに、ベイブは大きく頷いた。

そして、ベイブはダグに駆け寄ると、

飛び上がって背の高いダグのその肩に両手を回し、ダグをきつく抱き締めた。

ダグは自分達以外の視線がある中のベイブの大胆な行動に、

苦笑して、でもベイブの背中に手を回すと、

ベイブを抱きしめた。

コンドラッドとバルクが、その様子を見て肩をすくめる。

バルクは小さく首を左右に振って、ベイブの飼育棟を出た。

ここにいる人間の中で、バルクだけが知っているベイブの秘密が、幸せそうなベイブとダグに、この後どんな試練をもたらすのか、考えるとバルクは気が重かった。

ストリレーツ王国の第三王女のベイブが、

ハンドラーとして活躍するようになれば、

自然とその活躍は、王族達に伝わるだろう。

そして、ベイブは家族である王族と、

きつといつか、顔を合わせるようになる。

しかし、死んだと見せかけた王女が存在が、

生きていると分かったなら、王室はどう動くだろうか。

その時頼るダグとベイブの見方は、

若さだけだろうか。

バルクは自分の心の呟きに頷く。

若さと情熱だけが、困難を乗り越えるのだろう。

必ず、乗り越えて欲しいと、
バルクは、そう祈るだけだった。

夢が叶う時

ホープの訓練が始まって6ヶ月。

海風が、肩より少し長く伸びたベイブのブロンドの髪を踊らせている。

ベイブは被っている目のゴーグルを直すと、ホープに下降を指示するための右手の鎖を引いた。

それまで海と平行に飛んでいたホープが、瞬時に頭を下げた下降の姿勢をとった。

きらきらと煌めく青い水面に向かって、ホープとベイブは急降下した。

海上にダグが仕掛けたロープの合間をすばやく潜り抜け、係留してある的方向に向かって、ベイブは大声でホープに打てと叫んだ。ホープの鶏冠が硬直して震え、次の瞬間、的めがけて棘が発射された。

ドドドッ！と大きい音を立てて、ホープの棘は全体的に命中する。的は弾けて割れ飛び、海上に散った。

ベイブは上昇を指示する手の鎖と足の右旋回の鎖を同時に引く。

ホープは右に体を捻りながら、急上昇をした。

ダグが仕掛けた2本のロープの狭い間をすり抜けて、海上を振り返り、

ダグが仕掛けたもう一つの的に目をやる。

もう一度、ホープに急降下を指示すると、

ベイブはもう一つの的も見事にホープに打ち壊させた。

両手の鎖を同時に引いてホープを平行飛行に戻し、
ベイブはゴーグルを取って砂浜の方を見やった。
腕を組んでベイブの訓練を見守っているダグの姿が見える。

ベイブが手を振ると、ダグも振り返ってきた。
遠目でも、ベイブとホープの出来栄に満足して笑っているが見える。

ふと、ベイブはある事を思いついて小さく笑うと、ゴーグルをつけてホープを上昇させた。

そして左旋回の鎖と下降の鎖を同時に引く。

ホープは指示通り、左に体を曲げて下降する。

ベイブはタイミングを見て、ホープの鞍くらから足を外した。
鎖からも手を離す。

そして、ホープと体が離れて落ち始めると、

ベイブはホープに「バック、ベース！」と声をかけた。

ホープはベイブをちらりと見ると、一声鳴いて一人で上昇を始め、
飼育棟へと向かって戻り始めた。

ベイブは海の水面に飛び込む衝撃に構えると、勢い良く海へと落ちていった。

物凄い水しぶきがあがり、ベイブの体は海に消える。

それを見ていたダグは、しばらくしてもベイブの姿が水面に現れないのを見ると、

焦ってシャツを脱ぎ捨て、海へと急いで入っていった。

力強く泳いで、ベイブの落ちたあたりに向かう。

ベイブはわずかに海面に顔を出して息を続けながら、こちらに向かってダグが泳いでくるのを見ていた。かなり近づいてきたのを見て、ベイブは大きく息を吸って海に潜って体の動きを止めた。

ダグがベイブの体を見つけて、力強く抱える。そして砂浜に向かって戻りだした。

ダグにされるがままにして目を閉じたまま、ベイブはぐったりと気を失っている振りをしている。

ダグは海から上がると、ベイブを抱き上げて砂浜に寝せた。

「ベイブ！大丈夫か？ベイブ！」

ベイブの頬をダグは叩いて声をかける。

それでもベイブの反応はない。

ダグはベイブのゴーグルをはずした。

その口元に手をやって、呼吸をしていないのがわかると、

青ざめながら、ベイブのあごを引き上げて両手でベイブの唇を開き、自分の口をつけて息を吹き込んだ。

その後ベイブの心臓の辺りを両手で押す。

もう一度、人工呼吸をしようとベイブの唇に自分の口を当てようと
して、

ふと、ベイブの体が小刻みに震えているのに気がついて、ダグは動きを止めた。

ベイブは目を閉じながら、必死で笑いをこらえていた。

「ベイブ・・・？」

ダグがベイブを見下ろして、何が起きているのか分からずにベイブの名前を呼ぶ。

すると、そのダグの不思議そうな声にベイブは噴出して笑った。

啞然としているダグの手からベイブは抜け出すと、その場から走っ

て逃げ出す。

しばらくして、状況が読めたダグは苦笑いしながら、
ベイブを追いかけた。

「騙したな！」

楽しそうに笑いながら逃げていくベイブに、ダグは追いつくとその
手を掴んだ。

ベイブがバランスを崩してその場に転ぶと、ダグもつられてバラン
スを崩して砂浜に転ぶ。

ダグは両手をついてかろうじて、ベイブの体の上に自分の体が倒れ
こむのを防いだ。

ベイブの綺麗なブロンドも、ダグの黒髪も白い砂にまみれてしまっ
ている。

その砂まみれのお互いの姿に、また二人は声を上げて笑った。

ひと通り、お互いの笑いの波が引くと、ベイブはダグを見上げて言
った。

「ダグ、必死だったね」

「性質の悪い冗談だぞ、洒落にならない」

ダグは笑みを残したまま、でも真面目な口調で言う。

「ごめんなさい、もうしないわ」

ベイブも小さく微笑んだまま、でもやはり真面目な口調で言った。

二人の間に沈黙が流れて、聞こえるのは波の寄せる音だけになる。
きらきら光る海面の光が、二人の顔に反射した。
その光が反射している二つの顔のシルエットが、次第に近くなっ
ていく。

ベイブがゆっくり目を閉じた。

ダグはベイブの唇に自分の唇を重ねた。
優しい触れるだけのキス。

顔を上げて、ダグはベイブを見おろす。

年齢の差などとはもう関係ない。

ベイブはダグにとって、今は素直に愛しいと言える存在だった。

ベイブは目を開けてダグを見上げると、

シャツを脱いでいるその裸の濡れた背中を手をまわした。

ダグも砂浜に寝ているベイブの首に片手を回し入れる。

そして、もう一度ゆっくりと唇を重ねた。

さつきよりも深い口づけ。

ベイブは少し驚いて、でもダグに答えた。

ダグはベイブから顔を離すと、ふっと笑顔になった。

「もう俺の訓練も終了だ。ベイブ、お前も明日から実戦待機に加わる。」

今まで良く頑張ったな」

ダグは体を起こして、ベイブに手を貸して砂浜から立たせながら言った。

「ハンドラーの最後の訓練が、キスなの？」

ベイブは面白そうにダグを見ながら言う。

ダグは照れるとベイブから目をそらして、

「なわけあるか」

ホープの飼育棟に戻るため、さつさと砂浜を歩き出した。

ベイブは笑ってダグを追いかけると、

その腕に自分の腕を絡ませて、一緒に歩き出した。

ベイブの夢は叶った。

ハンドラーになる夢も。

幼い頃からのダグへの憧れも。

ベイブは満ち足りた幸せな思いで、

目の前に広がるストリレーツ王国の海を眺めていた。

露見

ベイブがダグのハンドラー訓練を卒業して数日後、団の食堂でダグとドーン、そしてベイブが同じテーブルで昼食を食べていると、

コンドラッドが食堂に走りこんできた。

「北北東20海里、ケアンプ岬の先で複数の帆船が海賊に襲われていると、

巡回船から知らせがあった。海賊の数は4隻以上。数ははっきりしていない。

ダグとドーン、それに今日はベイブも直ちに出勤してくれ」コンドラッドの声とともに、ベイブ達は立ち上がる。

食堂にいた他の団員達も、即座に全員が席から立ち上がった。ハンドラーを追いかけて討伐船で出向くためだ。

海賊船が4隻以上では、討伐船もそれ以上出向かなければならない。

食堂をダグとドーンに続いて出ようとしているベイブに、禿げて太った男が声をかけてきた。

「すぐ追いかけるからな、頼んだぞ。ハンドラー」

討伐団にやって来た初日に、

ベイブの尻を触り、ベイブに親指を捻りあげられたあの男だった。相手が誰だか分かったと、ベイブはにっこり微笑んだ。

「任せという！」

そしてベイブが元気に言うと、太った男は小さくベイブに敬礼をしてみせた。

ベイブは息を大きく吐き、ダグとドーンの後を追いかけると、

飼育棟へと向かった。

「いいか、ベイブ。今日は初めての襲撃だ。

俺とドーンの後ろに控えて、まずはよく敵の船を観察しろ。

大砲の流れ弾に当たらないよう、あまり高度を下げるな。

今日は実戦に加わるというよりも、まずは見学みたいなものだ」

ダグがベイブに言って、自分の飼育棟へと走っていく。

ベイブはダグの言葉に頷いた。

飼育棟の扉を開ける。

ホープがベイブを見て、翼を大きく動かした。

ベイブが棚に歩いて行って、ゴーグルをつけ手袋をするのを見て、

ホープがベイブと一緒にする、

これからの「遊び」への期待の鳴き声を一声あげる。

「ホープ、今日があなたと私のデビュー戦よ。頑張ろうね」

ベイブは言って、ホープの背に飛び乗った。

ダグの赤いドラゴンとドーンの灰色のドラゴンが、

ベイブの前方を飛んでいる。

ベイブは少し遅れて、二頭の後についてホープを飛ばせていた。

赤いドラゴンと灰色のドラゴンが、向きを揃って右に変える。

ベイブも従って、後について行った。

やがて海に大きく張り出した岬が近く見えてくると、船が複数、海上にいるのが見えてきた。

ここから見ると、大きい帆船が一つ、小さい帆船が二つ、それを取り囲む黒い海賊旗を掲げた船が五つ。

ダグとドーンのドラゴンが、加速して海賊船に向かって降下した。ベイブは取り合えず、言われた通りに様子を見ることにして、そのままホープをゆっくりと飛ばせる。

飛び交う砲弾を難なく交わしながら、ダグとドーンは海賊船に向かっていく。

二頭とも、十分な距離まで下降すると、炎を吹いて海賊船を襲い始めた。

砲台を中心に攻撃している。

襲っている船への攻撃を止めるためなのだろう。

ベイブは襲われている船を見て、

二つの小さい船は他国の貿易船なのを確認すると、

残りの大きい船に目をやり、

そのマストに、ストリレーツ王国の国旗が掲げられているのに気がついた。

王族の乗っている船なのだろうか。

ベイブはホープの高度を下げて、その王国の国旗を掲げている船に近づいて行った。

海賊船の一隻が、その王国の国旗を掲げている船に船体を寄せ、柄の悪い男達が乗り込もうとしている。

ベイブは高度をぎりぎりに下げて、ホープに打てと命じた。

バリバリという破裂音と共に、その海賊船の砲台のあたりが破壊される。

近くにいた海賊達は悲鳴を上げて、空からの襲撃に逃げ惑った。

それでも間に合わず、

王国の国旗を掲げている船にすでに乗り込んだ海賊がいるのを見ると、

ベイブはさらにホープの高度を下げた。

三人、四人。

船に乗り込んだ海賊の男たちを数えると、

ベイブは腰につけた2本の鞭ウィフを手で触って確認し、ホープの高度を船の上ぎりぎりにまで下げさせた。

「ラウンド！」

ベイブはホープに、

しばらくこの場所を離れて呼ばれるのを待ての合図を出すと、ホープの背から船の上に飛び降りた。

次の瞬間に、ホープが船の上から飛び去っていく。

ゴーグルはしたまま、ベイブは駆け出すと、

船室に入ろうとしている海賊の一番後ろの男の背中を、飛び上がって、力いっぱいブーツの底で蹴飛ばした。

男がうめいて床に倒れる。

ベイブはそのわき腹をもう一度蹴り上げ、

仰向けに体が向いたそのこめかみを、振り上げた足の反動を使って、思い切りかかとで蹴とばした。

鉄の錘おもりの入っているブーツの衝撃で、男は気を失った。

ベイブは後の三人を追いかけて、船室の中を走る。

海賊の男たちに気がついた乗員達が悲鳴を上げている。

船の操縦室に向かう一人の海賊が、追ってくるベイブに気がついて、銃をこちらに向けた。

ベイブは瞬間、鞭ウイプの脇に挿してあるナイフを手にとると、男に向かって投げつけた。

ナイフは男の手に刺さり、男は銃を落とす。

ベイブは男に走りよってその腹を思い切り蹴飛ばすと、銃を拾い上げ、倒れた男のみぞおちの上に、片足のかかとで全体重をかけて飛び乗った。

ぐええと、蛙をつぶしたような声を男があげる。

男の体から飛び降りる時に体を回転させ、その反動で男のわき腹をつま先で蹴り上げる。

急所に蹴りがはまり、男は体を丸めて動かなくなった。

ベイブは銃をかまえながら、船室を進む。

操縦室を開けるとそこには海賊の姿はなかった。

驚いている操縦士たちを横目に、ベイブは扉を閉めて違う部屋に向かう。

ふと、女の悲鳴が上がるのを聞いて、ベイブは声のした船室の扉を開けた。

部屋の中をざっと見回すと、二人の従者に飛び掛っている海賊と、ドレスを着ているブロンドの女を襲っている海賊が目につく。

ベイブは長い鞭^{ウィフ}を手にとると、従者を襲っている海賊に向けて、思い切り振り出した。

その首に鞭^{ウィフ}の先をからみつかせて、力いっぱい後ろに引いた。

首を絞められた男が悶絶して、背中から床に倒れる。

ベイブはドレスを着ている女を捕まえて、その首にナイフを当てている男に、

銃を向けた。

そして、捕まえられているブロンドの長い髪、

美しいドレスを着ている女と目が合い、ベイブは息を飲む。

ストリレーツ王国の第二王女、すぐ上の姉のデジールトだった。

デジールトも、急に部屋に入ってきたベイブに驚いている。

ただ、ゴーグルをしているせいで、

デジールトには、ベイブの正体はわかっていないようだった。

デジーお姉さまの船だったの。

ベイブは心の中で呟いた。

ふと、後ろで鞭^{ウィフ}に倒れたはずの男がベイブに飛びかかろうとしている。

ベイブは持っていた銃を向けて一発撃った。

男の足をかする。男は悲鳴を上げてその場に倒れた。

そしてまたベイブはデジールトを捕まえている男に銃を向けて、

「私、あんまり銃の使い方には慣れていないの。」

その女性の方を放した方が、あなたの身のためよ」

海賊はナイフをゆっくり手から離して落とすと、両手を上げてデ

ジールートの側から離れた。

ベイブの声を聞いたデイジールートが、いぶかしげにベイブを見る。銃を向けたままデイジールートから離れた海賊と、床に倒れている海賊にも立つように指示して、ベイブは部屋から二人に出て行くように促した。

そして船の甲板の手すりに、二人の両手を縛りつけて動けなくする。ついでに、ベイブはまだ伸びて動かずにいる海賊たちの両手両足も縛った。

「もうじき、討伐団が到着するから、それまで大人しくしててね」
ベイブは言って、船の上にダグとドーンのドラゴンが旋回しているのを見て、

大体片付いた様子なのを悟った。

「助けてくださって、お礼を申し上げます。有難うございます」

デイジールートがベイブを追いかけてきて言う。

そして、空を旋回しているドラゴンを見上げた。

「ご無事で何より」

ベイブはゴークル越しに懐かしい姉の顔を見て、微笑んだ。

デイジールートはベイブをじっと見つめている。

ベイブはデイジーから目をそらすと、

腰につけている小さい銀色の笛を出して口にくわえた。

人間の耳には聞こえない音が振動で鳴っているのが分かる。

しばらくすると、ホープの姿が空に見えた。

みるみるまに、一頭の黒っぽい色をしたドラゴンが船に近づいてくるのを見て、

デイジールートは息を飲んだ。

「女の方がハンドラーをなさっているの？」

ベイブはデイジールトを見て言った。

「幼いころからの夢でしたから」

その言葉を聞いたデイジールトが、ふとベイブに近づく。

ベイブは近づいてくるデイジールトを見て、後ずさった。

「お顔を拝見出来ないかしら」

デイジールトはベイブを船の端まで追い詰めて、そのゴーグルに手を伸ばした。

ベイブは焦って抗おうと、デイジールトの手を押さえる。

けれど、デイジールトの方が一瞬だけ早かった。

その時、海の風が強く吹き渡り、

船の上にいるベイブとデイジールトのブロンドの髪を、空へとかき乱した。

「デイジールト様！ご無事ですか！」

デイジールトの姿を探していたのか、数人の従者が船の甲板に出てくる。

ベイブははっと従者たちの方を見て、ゴーグルをしていないことに気がつくと、

顔を伏せた。

そして、ホープがベイブが乗れるくらいにまで高度を下げているのを見て、

ベイブは手すりにたち上がりマストをよじ登ると、ホープの背に手をかけて乗り移った。

ホープの背の鞍くらに腰をかける。

そして、ふとベイブは思った。
恥じることも、恐れることも何もないじゃない。

ベイブは小さく息を吐くと、ゴーグルの無い顔で、
船の上を見下ろした。

「ベイビールート」
デিজールートが呟いた。そして周りにいた従者達も、
見慣れぬハンドラーの顔を見上げて息を飲む。

「第三王女のベイビールート様だ！」
従者の一人が叫び、残りがざわざわとベイビールートの名を口に
した。

ベイブはホープに上昇の指示を出すと、ダグとドーンのいる空へ
上がっていった。

愛してくれる存在

飼育棟に戻ると、ダグはベイブに詰め寄った。

「何故、勝手な行動をした」

口調は冷静だけれど、物凄く怒っているのがベイブには分かった。

ホープに褒美の魚を与えつつ、ベイブはダグを見ないで、

「分かってるわ、ドーンにも叱られたわ。ごめんなさい」

俯いて言った。

ドラゴンから降りるなり、ベイブはドーンに肩をつかまれて言われていた。

「これはかなり嚴重注意ね。初めての襲撃なのに、勝手にホープから降りて、

海賊の乗船した船に一人で突っ込んで行くなんて」

優しい言葉を選んでいるけれど、その口調は厳しかった。

「ベイブちゃんはそりゃ、強いけど」

ドーンに顔を覗かれて、

「あなたよりも強い男は、海賊の中にもたくさんいるの。」

私やダグのような海賊と当たったら、あなた勝てないわよ。

実際に私たちは海賊上がりだしね。あなたは今回運が良かっただけ。

分かった？」

何か言い返そうにも、ドーンに言われた事は正論だった。

ベイブは何も言えずに、

「ごめんなさい」

謝っていた。

胸の中に溜まっている小言を続けて口にしようとして、
ダグはうな垂れているベイブを見ると、大きく息を吐いて、
「分かっているならいい。今後は二度と勝手な行動は許されないからな」

ダグはホープの飼育棟を出て、自分の飼育棟へと戻って行った。

ダグとドーンの二人に怒られるのは、
自分が勝手な行動をしたことからなので、重々承知の事だったが、
自分で招いたこととはいえ、実はそれ以外の事が、
今のベイブの胸の中を占めて気持ちを重くしていた。

ベイブはホープの体を撫でながら、
きつと今頃、城で起こっているであろう騒動を考えた。
姉のデジールトだけだったら、
きつと自分の事は両親の耳には入らなかったかもしれない。
昔から二番目の王女のすぐ上の姉は、ベイブに対して寛大なところ
があつた。

けれど、ベイブは従者に姿を見られている。
きつと今頃は、従者から国王と王妃に話が行っていることだろう。

両親のストリレーツ王国の国王と王妃は、
ベイブがドラゴンハンドラーとして働いていることを、
一体、どう思うのだろうか。

国の海域を守るための特殊な仕事。

前から父の国王は、謁見に来た他国の使者たちに、

自国のハンドラーを自慢していたのをよく聞いていた。

でも、行方不明になっていた娘が実はハンドラーになっていたと知ったら、

またその価値観は、違ってくるのだろうか。

決められた婚儀を拒み、崖から身投げを装ったベイブの罪は、ベイブがハンドラーとして働く国の利益を、上回るのだろうか。

どっちにしろ、城からの迎えが来れば分かることだ。

ベイブはため息をついて、ホープの大きい体を抱きしめた。

その日の夜。

この日の海賊討伐も成功して、

ストリレーツ王国領海において船を襲った5隻の船の海賊は、全て投獄されていた。

大規模な襲撃を抑えられたことに、

団員の中では、またお祭り騒ぎの雰囲気の流れている。

団の食堂で他の団員達が騒ぎ浮かれているのを横目に、ダグとドーンは同じテーブルについて酒を飲みながら、

ベイブが食事に来ないのを、不思議に思っていた。

「私、怒りすぎちゃったかしら」

ドーンが気にしてダグに言う。

「いや、ベイブはそういうタイプじゃない。

何か、用事でもあるんじゃないか」

ダグは自分でドーンに言いながらも、

ベイブに用事などが出来るはずもないと思っていた。

もし、そんな事があれば、

真っ先に自分に言ってくるはずだ。

しかし、今も不思議に思うのは、

何故、ベイブが勝手な行動を取ったかということだ。

どうして海賊が乗船した船に、一人で向かって行ったのか。

コンドラッドが食堂に入ってくるのが見えると、
ダグとドーンは、コンドラッドに目を向けた。

「ダグ、ドーン」

コンドラッドは二人のテーブルまでやって来ると、
改めて二人の名前を呼ぶ。

二人の顔を見て、コンドラッドは続けた。

「明日、朝一番に王宮に出向く。」

支給されている軍服を着て、準備をしておいてくれ」

コンドラッドの言葉に、ダグとドーンは顔を見合わせる。

「国王への謁見だ^{えっけん}」

その言葉に驚くダグとドーンに、

「明日になれば、もっと驚く事がある」

コンドラッドは首を左右に振りながら、二人のテーブルを去って行った。

「どういうこと?」

ドーンがダグに言う。

「さあ」

ダグは答えながら、コンドラッドが食堂から出て行くのを見ていた。

とうとうベイブは、今夜団の食堂には現れなかった。

ダグはライスからベイブに頼まれたという、

レコードを預かりながら食堂を出て、そのままベイブの家へと向かった。

ベイブの家の扉を叩く。

返事は無かった。

扉に手をかけて、ノブを回す。

鍵はかかっていなかった。

扉を手前に引いて、ダグはベイブの家の中を見る。

まだ夜も早い時間にもかかわらず、部屋の中は真っ暗で、人の気配は無かった。

ダグは部屋に上がって、寝室の扉も開ける。
でも、やはりそこにベイブの姿は無かった。

一体、どこに行ったんだ？

ダグは不安と心配で、押しつぶされそうになりながら、
ベイブの部屋の中を見回していた。

懐かしい自分の部屋。

窓を開けると、高台に立っている王宮の立地のおかげで、
ストリレーツ王国の海が見渡す限り一望できる。

ベイブが生まれてから、17年暮らした部屋。

半年ほど前、この部屋から出た時には、

もう二度と戻ることはないと思っていた。

窓から見える海は、落ちる太陽の夕焼けの美しい赤に染まっていた。

ベイブは討伐団に来た王宮からの迎えの馬車で、城に戻っていた。
ひっそりとまるで辺りを憚^{はば}るかのような迎えだった。

コンドラッドには従者が伝言を伝えたはずだ。

ダグとドーンには何も言って来なかった。

今夜ベイブが部屋に戻らないのを、ダグは心配するだろう。

初めて会った頃、

ダグがストリレーツ王国の第三王女の肖像画を集めていると聞いたのを思い出す。

成り行きとはいえ、ダグをだましたような結果になってしまった。

ベイブがその第三王女のベイビールートだと知ったら、

一体、ダグはどう思うのだろうか。

色んなことを考えれば考えるほど、

自分は軽率な行動を取ったのかと、後悔の念が沸く。

あのままベイビールートは死んだと装い、単なる海賊討伐団員の一人として、

暮らしていけば良かったとも思う。

でも、心の中ではどこか、

国王と王妃に面と向かって、自分という存在をぶつけてみたい衝動にも駆られていた。

いつもベイブは変わった王女として避けられてきた。

両親からどこるか、従者たちからも。

「ベイビールート様、お召し変えを」

ドレスを抱えてベイブの部屋に入ってきた従者が、ベイブに声をかける。

ベイブは振り返って頷いた。

濃紺のベルベットのドレスを着て、従者が肩より少し長く伸びたブ

ロンドの髪を綺麗に結うと、
ハンドラーのベイブは消え、そこにベイビールートの姿が現れた。
首にかかっていた白い貝のモチーフのネックレスは外されて、鏡台
の上に置いてある。

ベイブはため息をつき、国王と王妃に会うために部屋を出た。

ベイブが広間に出向くと、すれ違う従者たちは廊下の隅で頭を下げ
控えるのだけれど、
ひそひそと話しているのが分かる。

以前よりもあからさまで、知らない王女が戻ってきたとさえ聞こえ
てきた時には、

ベイブは深く傷ついた。

広間に入ると、国王と王妃が並ぶ玉座の一段下に、
第一王女のナンシールトと、第二王女のデイジールトが控えて
座っていた。

ベイブが近づいていくと、

国王が手を上げて他の従者たちに部屋から出るよう指示をする。

ベイブは家族の座る椅子の前に膝をついて頭を下げた。

茶色の口ひげを長く伸ばしたストリレーツ王国の国王は、
青ざめた顔でベイブを見た。

「お前に聞きたいことはたくさんあるが」

国王が重い口を開いた。

「ドラゴンのハンドラーとして、海賊討伐団に所属していたというのは、

本当のことなのか」

ベイブと同じ青い瞳で、ベイブをじつと見下ろして言う。

「はい」

ベイブは国王を見上げて、まっすぐとその目を見ると返事をした。すると、ベイブと同じブロンドの髪が美しい王妃が大きくため息をつく。

「ストリレーツ王国の王女が、あんな得体の知れないやくざもの達と一緒にいたなんて」

同じブロンドの美しい髪を高く結い上げている第一王女のナンシールートが、

相変わらず冷たい表情でベイブを見て、

「自分の着ていたドレスを海に投げ捨てて身投げした振りをして、お父様の決めた婚儀を無断で放り出したかと思えば、

男だけしかない海賊討伐団にいたなんて、

私、ベイビールートを実の妹だなんて思うのもぞっとしますわ」

両親の寵愛を一身に受けている長女らしい発言に、

ベイブはいつもどおり傷ついた。

「お言葉ですが、海賊討伐団がいるからこそ、

ストリレーツ王国の海の安全が守られているのです。

お父様もよく他国の使者に自慢なさられていたではありませんか」
ベイブが言うと、国王はびしりと言った。

「悪をもって、悪を成敗している効率性を自慢していたのだ。

海賊討伐団といえど、もとは同じ穴のむじなどもだ。

別に海賊討伐団そのものを自慢していたわけではない」

ベイブは国王の言葉に、ショックを受ける。

「従者が言っていました。まるで海賊のようにピストルを振り回し、男のような格好をして、ドラゴンにまたがっていたと。」

ストリレーツ王国の王女ともあるうものが、そんな野蛮なことをしていたなんて、

他国に知れたら国の恥です」

王妃が強い言葉で言った。

ベイブは俯く。

第二王女のデジールトだけは、黙って悲しそうにベイブを見ていた。

「お前が姿を消していた間の詳細は、あとで部屋に出向かせる家臣の者に話せ。」

どちらにしろ、国の定めた婚儀を嘘で避けた罪は重い。

お前を貰ってくれる予定だった国の国王には、申し訳が立たないのだぞ。

明日、討伐団のハンドラー達を呼びつけてある。

お前からも、くれぐれも王女がハンドラーだったなどと口外しないように話すように」

ベイブは国王の言葉に頭を下げると、自分の部屋へ戻るために広間を出た。

小走りに部屋に戻る。

やはり、この城には自分の居場所などとも無かったのだ。戻ってこなければ良かった。

ベイブは心底後悔した。

自分の部屋に行くまでは、涙を流すのをこらえた。
すれ違う従者たちに、泣き顔など見せたくはなかった。
自分の部屋の扉を勢い良く開け背中では閉めると、
ベイブは鏡台に置いてある白い貝のネックレスまで走り、
両手で握り締めて胸に抱えた。

涙が溢れ出てくる。

ダグに会いたかった。

この世で唯一、ベイブを愛してくれる存在。

ダグは許してくれるだろうか。

言えなかったこの秘密で、

結局はダグを騙すような結果になってしまっていたことを。

今、ベイブが一番恐れていることだった。

謁見（えっけん）

次の朝、肩に金の房のついている深い翠みどりの軍服に身を包み、ダグは厩舎で馬の用意をしながら、

やはり同じ軍服に身を包んでいるコンドラッドがやって来ると、足早に近づいて言った。

「ベイブが昨夜、飼育棟に戻ってこなかった。何か聞いていないか？」

コンドラッドはダグをちらりと見て、

「ああ、聞いている。心配するな」

言いながら、自分の馬の準備を始めた。

ダグはコンドラッドの詳しくは話そうとしない態度に、

いぶかしげに首をかしげ、自分の馬のたずなを引いて厩舎から出た。

馬の準備がすでに終わって、煙草を吸いながら待っている同じ軍服姿のドーンが、

ダグがやって来ると振り向いた。

「あたし、こんな格好嫌なのよね。男臭くてかなわないわ」

ドーンが自分の格好を見下ろして、顔をしかめて言う。

長く伸ばした銀髪を、今日はきちんと束ねて背中におろしていた。
国王謁見こくおうえっけんのせい、今日は赤い口紅もつけてはいない。

「しかし、一体急に国王から呼び出しされるなんて、

どうということなのかしら。私たち別に何もしてないわよねえ」

ドーンが言うのに、ダグも頷いた。

やがてコンドラッドが二人に追いつき、

三人は馬に乗ると町へと出て行った。

普段は着慣れないとはいえ、コンドラッドもダグもドーンも、その長身でがっしりとした体軀に軍服はよく似合っている。

城へと向かう道を行くと、町民たちはドラゴンハンドラーの凛々しい姿に歓声を上げた。

子供たちは三人の後を走って追いかけるものまでいる人気ぶりだった。

「凄いわねえ」

ドーンがその様子を見て肩をすくめる。

「もと海賊出身のちんぴらみたいな俺達でも、

仕事で少しは人の役にたってるってことだろう」

ダグが言う。

「多少は罪滅ぼしにはなってるのかしらね」

ドーンが小さく笑って言った。

町を抜けると、やがて道は王宮へと続く上り坂になる。

三人は馬を走らせて、門番の複数立つ城内へと続く大きい門を入って行った。

やがて王宮につくと馬を従者に引渡し、

コンドラッドを先頭に三人は城内へと入っていった。

軍服の帽子を脇に抱えて、ダグとドーンは吹き抜けの高い天井を見上げ、

その彫刻をどこさされている立派な装飾に、感嘆の口笛を吹いた。大理石の床、広い廊下の両脇に置かれ磨きこまれた高級な調度品の数々を見回す。

「さすが、この辺りで一番の繁栄を謳うストリレーツ王国の王宮だ」ダグは小さく呟くと、ドーンも頷いた。

謁見の間となる広間に通され、

目の前にある玉座を見てダグとドーンに少し緊張が走る。

ハンドラーになりたての若い頃、ドラゴンの上から国王の姿を見たことはあったが、

こうして目の前で間近で見る機会に恵まれたのは、初めてだった。謁見など、海賊だった頃にはまるで思いつきもしないような事だ。

やがて広間に国王が来るといふ合図のラッパの音がする。

コンドラッドに習って、ダグとドーンも片膝を床について腰を落とし、

帽子を胸に抱え頭を下げた。

従者が広間の扉を開くと、黒いビロードの王室の正装をしている国王が入ってくる。

茶色の顎鬚あごひげを神経質そうに撫でながら歩いてくると、玉座に座った。

「いつもその方達の働き振りには、感心しておる。

ストリレーツ王国の海は、安全して航海出来ると近隣の国々からも感謝されておる。

改めて、礼を申す」

国王が言うつと、三人のハンドラーは深く頭を下げた。

「楽にしてよい」

その言葉に、コンドラッドはダグとドーンに立ち上がるように手振り以示した。

「今日、そなた達を王宮へ呼んだのは他でもない。実は事情があったな」

国王は言つて、広間の入り口にいる従者に目で合図をする。

従者が扉を開いた。

コンドラッドは落ちつかないに扉から目をそらし、ダグはそんなコンドラッドを不思議に見て、ドーンと共に開いた扉を見た。

美しいブロンドの髪を頭上にきちんと編み上げ、レース使いが美しい緑のドレスを着た若い婦人が、広間に入ってきた。

俯き加減のその顔を見て、ダグは見覚えがあるような気がして目を細める。

そしてはつとして、その姿を見直した。

その胸元には、ダグがいつかベイブに買い、そして片時もベイブが肌から離さなかった、

あの白い貝殻のネックレスがあつた。

玉座の近くまで来るとベイブは顔を上げて、

コンドラッドとダグ、ドーンの三人の顔をそれぞれ見た。

そして、力なく笑顔になると、

「ごきげんよう、皆様」

王室で教育されてきたように、ドレスの裾を両手でつまんで腰を落とす挨拶をする。

「ベイブちゃん？」

ドーンが素っ頓狂な声を上げた。

ベイブはドーンを見ると、小さく頷いて見せた。

そして、ダグを見る。

ダグは目を見開いて、美しいドレスに身を包んだベイブを見ているだけだった。

コンドラッドは、やれやれという風に小さく肩をすくめている。

「この第三王女は昔から変わっていて、王宮の誰でもが皆、ほとほとこれの行動には困ってきたものだったのだが、まさか、今回の身投げ騒動の後に、海賊討伐団に自身が入り込んでいるとは思わなかった。今現在、ストリレーツ王国の王位継承権を三番目に持つ身の王女でありながら、

男だけの組織に身を置いていたなどとは、言語道断。

このベイビールートの処遇は後で考えとしても、とにかく、その方たちにはこれが討伐団にハンドラーとしていたことを、

どうか、決して口外しないで欲しいのだ」

国王が言う。

ベイブは俯いた。

「第三王女？この方がベイビールート様ということですか？」

ダグが、国王に訊く。

「そうだ」

国王は真っ直ぐにダグを見て答えた。

いつか、ベイブがダグに言った言葉が蘇る。

「第三王女は変わり者で有名だったんですから」

あれは、自分のことを言っていたのか。

ダグはベイブから目をそらして、混乱した頭を整理しようと、頭を振った。

ベイブは自分から目をそらしたダグに、
一歩足を踏み出して言った。

「ダグ、決して私は、あなた達を騙そうとしていたわけじゃないの」
その目に涙が浮かぶ。

「幼いころ、あなたとバディを見て以来、
ハンドラーに憧れて、いつか私もなりたいたずっと思っ生きて
きた」

ダグがベイブを見た。

「私なりに努力をしたの。そして、ハンドラーになった。それだけ
なの」

ベイブは唇をかむと、

「ただ、どうしても言えなかった。自分が何者なのか。

でも、嘘はつくつもりは決して無かったわ。どうか許して」

最後の言葉は、ダグに向けての精一杯のベイブの気持ちだった。

しかし、ダグは何も言わず、青ざめた顔でベイブから目を伏せた。

国王が咳払いをして、

「用件はこれだけだ。その方達の待遇はこれからも優遇しよう。

どうか、重々よろしく頼んだぞ」

三人のハンドラーを見て言った。

国王が玉座から立ち上がる。

もう一度、三人は国王に対して敬礼をした。

国王がベイブの肩に手をかけ、部屋から一緒に出るよう促す。

ベイブはもう一度ダグを見た。

ダグはベイブを見ずに俯いていた。

「ダグ！」

ベイブは叫んだ。

でも、ダグはベイブを見なかった。

父である国王に連れられ、ベイブは広間から退出した。
ベイブの目から、涙が一筋流れた。

王宮から討伐団の施設に戻り、一日の仕事を終えて自分の飼育棟に戻ると、

ダグは琥珀色の酒のグラスを前に、
自室のソファで、今日の朝の出来事を考えていた。

ベイブが、ストリレーツ王国の第三王女？

ダグは立ち上がると柵に歩いていき、
集めていたベイビールートの肖像画を取り出す。

美しいブロンドの髪、ドレスに身を包んだ優雅な姿。
絵師によるベイビールートの顔は、

実際に本物の第三王女を知ってしまうと、
ベイブにも、また違う他の女にも見える。
でも、肖像画などはその程度の写実性なのだろうが。

第一、本当のベイブは、

この絵のように、か弱い八方美人の印象などはない。

いつも一杯一杯強がって見せて、
それでも何とかやりこなせてしまう器量と、
その気の強さ。その割りに、たまに見せる純粹で無垢な、
ダグへの依存心。

「まだ生きていていいの？」
ドラゴンの島でのベイブの言葉が蘇る。

ダグはベイブが恋しかった。
でも、もうベイブは手の届かない存在だ。
もともと、すぐ近くにいたことが幻だったのだ。

ダグは自分の腕に絡ませてくる、ベイブの手を思った。
無邪気なぬくもり。
重ねた唇の愛しさ。
ダグの人生にベイブが現れてから、
いつも、側にその笑顔があった。

胸を襲う息苦しさに、ダグは息を飲んだ。
そして思いを振り切るように息を吐くと、
酒のグラスに歩いて戻り、一気に飲み干した。
身分違いにもほどがある。

ダグは酒の力を借りて、もと犯罪者である海賊あがりの自分を皮肉にも悲しく笑うと、酒をまたグラスに注ぐのだった。

帰る場所

デイジールトはただ黙って、父である国王と母である王妃と、上の姉のナンシールトの会話を聞いていた。

「西の塔にベイビールトを住まわせて、

一步も外へ出さなければいいんじゃないかしら」

第一王女のナンシールトが良い考えだといわんばかりに、国王と王妃に言う。

「行方が見つかったが、崖から落ちた後遺症で病に伏していると、近隣には知らせを送るか」

国王が言う。

「そうすれば、婚姻を結ぶ予定だった国の王も、納得をしてくれるのではないですか？」

王妃が続けた。

ベイビールトを西の塔へ監禁するということ？

デイジールトはその家族の会話を聞くと、

もう堪えられないとばかりに、椅子から立ち上がった。

「父上、母上。今度は本気でベイビールトを殺す気ですか？

塔に閉じ込めるということが、ベイビールトの性格上どういうことか、

お分かりでしょう？」

冷静な声と冷静な視線で、デিজールトは両親を見る。

「何故、ベイビールトが崖から飛び降りる振りまでして、王宮から抜け出たのか、ベイビールトの気持ちを、一回でもお考えになったことは無いのでしょうかね」

いつもは従順で大人しいデিজールトの強い言葉に、国王と王妃、姉のナンシールトは言葉を失って、

デিজールトを見ていた。

「いいではないですか。ベイビールトはあの日崖から落ちて死んだのです。」

ドラゴンハンドラーとして働いている女は、似ているけれど別人。それでどうしていけないのですか？」

デিজールトは国王の近くに寄つてくると、

「私はもういいのです。こういう人生を生きなければいけないのは、何の努力もせずに諦めた自分のせいなのですから。」

来週お父様に決められた方に、私はきちんと嫁ぎます。

そして、あなたがたが寵愛しているこのナンシールトは、妹の事すら思いやれない君主では、やがて国民から嫌われ苦労するでしょう」

デিজールトは姉を見ていうと、

ナンシールトは気色ばんで妹を睨んだ。

「お父様、せめて三人いる娘の一人にくらい、

自分の思う幸せを与えてやっては貰えないでしょうか。

せめてベイビールトだけにでも」

デিজールトは国王をまっすぐ見て言った。

そして王妃にも目を向ける。

「その代わり、ベイビールトには二度と王宮には出入りしないよ

うに伝えます」
うむを言わさぬその強い口調。

来週のデイジールートの嫁ぎ先は、
ストリレーツ王国に多大な利益をもたらす政略結婚でもある。

ここでデイジールートの機嫌を損ねてその結婚がこじれでもしたら、
大問題になる。

国王は唸った。

「良かるう。ベイビールートの遺体が上がったと近隣諸国には知らせるよう手配いたす。

ストリレーツ王国の第三王女は死んだ、それでいいのだろう」

苦虫をつぶしたような表情で国王が言うと、デイジールートは玉座
から下がり、

お辞儀をして国王の前を辞した。

王族という身分だけは高いけれど、まるきり愛のない家族の間で育ち、

デイジールートにとって、愛がこういうものなのか今も分からない
のだけれど、

せめて、ベイビールートだけでも本当の愛を見つけて欲しいと、

デイジールートは心の底から思っていた。

自分という存在を諦めなかった、勇気あるベイビールート。

デイジールートは今の話を知らせるために、
妹の部屋へと向かった。

「ダグ、飲みすぎじゃない？」

仕事が終わった後、今日は珍しく時間制の恋人の少年を買わずに、ドーンが町の酒場のテーブルで、ダグに付き合っ酒のグラスを傾けている。

「まあ、気持ちは分かるけど」

ダグの肩に手を置いて、ドーンは小さくため息をついた。

今日は酒場の女も遠ざけて、二人の席の周りにはひと気が無かった。

「まさか、第三王女がハンドラー候補として団に来ていたとはな」

ダグが大分酒の回った口調で、楽しげに言う。

「俺はその王女を訓練していたわけだ」

「ダグがあんなに懂れていた、第三王女ね」

ドーンがダグの顔を心配げに見ながらも、調子を合わせて言う。

「ああ、しかし大したもんだった。

自分一人でドラゴンの島に行き、一人で卵を手に入れた。

半年間、俺の厳しい訓練についてきて見事ハンドラーになり、初の出勤では違反をしたとはいえ、海賊を一人で4人も片付けた。ストリレーツ王国の末王女だぞ？こんな痛快な話があるか？」

ダグはグラスの酒を飲み干すと笑った。

そして笑い終わると、テーブルに肘をつき両手を額に当ててため息

をついた。

今までの饒舌が嘘のように、ダグは黙り込む。

ドーンはそんなダグの背中を優しく撫でると、

「ベイブちゃんを、愛してたのね」

ドーンの言葉に、ダグは額に手を当てて俯いたまま、黙っていた。そして、しばらくして口を開く。

「俺はベイブが、自分と同じような身の上だと信じて疑わなかった。愚かだろう？ベイブの口から聞いたわけでもないのに、

俺の側にいるということは、きっとそういうことなんだろうと勝手に思っていたんだ」

ドーンはダグの俯いた横顔を見つめて、ダグの心の痛みを思いやっていた。

「ベイブはストリレーツ王国の王女で、俺はもと犯罪者の海賊出身のならず者だ」

搾り出すように言って苦く笑うダグに、ドーンの胸が鈍く痛んだ。

ドーンはウェイトレスを呼ぶと、

空になった二つのグラスの代わりを持ってくるように頼み、

黙り込んだダグの背中を撫でるだけだった。

「お父様、お母様、ナンシーが何を言おうが」

デিজールトは、ベイブに言う。

「私は、あなたを誇りに思うわ」

ドレス姿のまま馬にまたがるベイブに、デイジールートは言った。

「有難う、デイジーお姉さま」

ベイブは馬上から二番目の姉を見て、

「ドラゴンハンドラーという仕事に、私も誇りを持っているわ」

笑顔になって言う。

「それに」

ベイブは真っ直ぐデイジールートを見て言った。

「討伐団には、私が愛している人がいるの」

「そう」

デイジールートは一瞬黙って、でも真っ直ぐベイブを見ると微笑んだ。

「嫁いでストリレーツを去る前に、

こっそりあなたに会いに行くわ。ハンドラーとしてのベイビルトに。」

その時、私にあなたの愛する人を教えてくれる？」

ベイブは頷いて、

「ちよつと乱暴で言葉も悪い人だけど、とても素敵な人なのよ」
満面の笑顔になって言った。

二人の間にしばし沈黙が流れる。

「さよなら、ベイビルト」

デイジールートが言う。

「さよなら、デイジールートお姉さま」

ベイブは目を上げると王宮をしばらく見上げて、そして馬に鞭を入れた。

ベイブはデイジールートからの話を聞いて、もう迷うことはなくなっていた。

王族の身分にも両親である国王と王妃にも、今は何の未練もなかった。

馬をひたすら走らせ、海賊討伐団の施設へと向かう。ただのベイブとして、ドラゴンハンドラーとして、これからの一生を過ごしていこうと決めていた。ダグの側で。

団の施設につき、真っ直ぐに自分の飼育棟へ向かう。すれ違う団員達が、ドレス姿で馬に乗っているベイブを見て驚いている。

でも、ベイブは気にしなかった。

施設の前の慣れ親しんだ海は、今夕焼けに輝いていた。馬から降りて馬をつなぐと、

ベイブはホープのいる飼育部屋に走った。扉を開けるとホープが顔を上げる。

「ホープ！」

ベイブはドレス姿のまま、ホープに駆け寄るとその大きな体を抱きしめた。

「元気だった？」

ベイブがホープの顔を見て声をかけると、

ホープが低くうなづいてベイブの顔に鼻を押し付けてくる。

ベイブはくすぐったくて笑うと、ホープの鼻先を叩いてやった。

「これからは、ずっと一緒よ」

ベイブは飼育部屋から自分の部屋に行くと、
煩わしいドレスを脱ぎ捨て、いつものシャツと皮のパンツに着替える。

結ってある髪はすべてほどいた。
ほっと心地がつく。

そしてベイブは自分の部屋を出て行くと、ダグの家まで走って行った。

ハンドラー棟の習慣として、扉に鍵はかかっていない。

ダグの家の扉を開けて、まだダグは帰ってきていないのが分かった。
ベイブはダグの家の扉の前に座り込んだ。

そして、そこから見えるストリレーツ王国の夕日に燃える海を眺めて、

初めて自分の人生が自分だけの物になったのを感じて、ベイブは微笑んだ。

ダグは酒場から戻りドーンと別れると、

自分の家の前に人影があるのに気がついて、足を止めた。

もう夜も遅い時間。家の常夜灯の明かりの他は暗い夜の闇だ。

ダグは酒でふわりとしている気を引き締めて、

その人影に近づいた。

扉の前に座り込んで、膝を抱えて座り頭を垂らしている。

眠っているのだろうか。

そして、その髪の色はブロンドだった。

「ベイブ？」

ダグは驚いて名前を呼ぶ。

扉の前に座り込んでいるその人影は、はっと頭を上げると、ダグを見た。

ベイブは見る間に笑顔になり、立ち上がるとダグに駆け寄る。

そしてダグの背中に手を回して抱きついた。

ダグは驚きのあまり動けずに、自分の胸の中にいるベイブを見下ろしている。

やがて、ダグはベイブの肩に両手を置くと、ゆっくりとベイブの体を自分の胸から離れた。

「こんな所で何をしている？王宮に戻れ」

ダグはベイブの顔を見ると、かすれてはいてもはっきりとした口調で言った。

ベイブはダグに言われた言葉の意味が分かると、目を見開く。

「ダグ？」

ベイブが悲痛な声で言う。

「ずっと一緒にいてくれるって言ったじゃない」

ダグはふっと悲しく小さく笑って、

「ここはお前の属するような場所じゃない。自分に相応しい身分の男と一緒にいるんだ」

ベイブを真っ直ぐ見つめた。

「ストリレーツ王国の海は、俺たちが命をかけて守る。

だからお前は安心して幸せになればいい。

今、コンドラッドに言って、王宮まで誰かに送りに行かせよう」

ベイブはダグの言葉を遮るように叫んだ。

「私だって、ドラゴンハンドラーよ。」

この国の海は私だって命をかけて守るわ」

ベイブは言いながら、自分の目に涙が浮かぶのを感じていた。

「どうしたの、ダグ？安心して幸せになればいいってどういう意味？

私が身分を隠していた事に怒っているの？」

ダグは何も言わず、黙ってベイブを見ていた。

ベイブはその沈黙に耐えられなくなると、絶望的な悲しさにうな垂れて、

ダグの側を離れた。

「ベイブ」

ダグの声にベイブは振り向いて、

「一人で帰れるわ」

静かに言った。

そしてダグの姿が見えなくなるところまでベイブは走り、

やがて夜の暗闇に一人きりになるところまで来ると立ち止まった。

ベイブは声を出さずにひとしきり涙を流した。

他に帰る場所なんてない。

心細い肩を自分で抱きしめると、

ベイブは自分の飼育棟に向かって戻って行った。

銃弾

ベイブは自分の飼育棟に戻ると、毛布を一枚持ってホープの部屋へ行った。

暗い部屋にランタンを一つ点し見ると、

眠っていたらしいホープが顔を上げてベイブを見る。

「私にはあなたがいるもの」

ベイブは力なく呟くと、ホープの側に毛布を敷いて座った。

うずくまって丸くなっているホープの体に顔を寄せ、

ベイブは静かに涙を流しながら、そのままホープに寄りかかって眠った。

寝付けなかったダグは、明け方近く自分の部屋から出ると、

ベイブの飼育棟まで歩き、そつとその扉を開けた。

部屋の中は暗く寝室の扉も開いたままで、入り口から見ても人の気配は無かった。

王宮へ戻ったんだろう。

ダグは心の中で呟く。

自分でベイブに戻れと言ったくせに、

ベイブの姿がないと分かると、ダグの心を落胆が占めた。

ダグはため息をついてベイブの部屋から出ると、自分の部屋へと戻って行った。

早朝、ダグの部屋の扉が叩かれた。

ほとんど眠れなかったダグはベッドから飛び起きると、部屋の扉を開ける。

そこにはドーンがいた。

「海賊よ、貿易船がやられているわ。相手は5隻」

「すぐ用意する」

ダグは言つと部屋に戻り、着替えを始めた。

朝目が覚めると、ベイブはホープに微笑んで言葉をかけた。

「後で偵察兼ねて、飛ぼうね」

身支度を整えて、家の外へ出る。

途中でダグの飼育棟の前を通り、その扉を横目で見ながら、ベイブは団の食堂へ出向いて行った。

食堂に入ると、朝食を食べていただろう団員達が、皆殺気だつて、食堂を出て行くところだった。

ベイブは食堂の入り口で、見覚えのある団員がいるのを見ると、その手を掴んで聞いた。

いつかベイブに敬礼してみせた、あの太った禿げている男だ。

「一体、どうしたの？」

「おお、ハンドラー。今日は朝から大規模な襲撃が同時に二つも起きて、

てんやわんやなんだ。先に起きた襲撃に、ダグもドーンも出向いてしまっている。

今さっき分かった襲撃には、ハンドラー不在により、

先に討伐団が出向かなければならないと、コンドラッドから指令が出たんだ。

って、ここにあんたがいるのに、何でコンドラッドはそんな指令を出したんだ？」

ベイブは男の最後の言葉は無視して、

「二つ目の襲撃の場所は、分かる？」

ベイブは早口で聞いた。

男は頷いて、印のついている海図をポケットから出した。

「でも、敵の海賊の船は6隻だと聞いてる。

コンドラッドと一緒に出向いた方がいい。いくらあんたが優秀なハンドラーでも、

一人では無理だ」

男が言うのに、ベイブは男に頷いて見せて、

「あなた、コンドラッドと一緒に追いかけてきてよ。

先に行ってるわ。このたった今も罪のない人たちが海賊に襲われているのよ。

手薬煉^{てくすね}引いて待つてるわけにいかない」

ベイブが言くと、男は頷いた。

そして、駆けて外へと出て行く。

他の団員も食堂から走って去り、討伐に向かう姿を見て、ベイブは思った。

お父様は、海賊討伐団が悪だと言った。

悪をもって海賊の悪を討伐しているだけだと。
でも、私はそうは思わない。

例え討伐団に属する前は、柄の悪い生活を送ってきたかもしれない人達でも、

今はこうして人を助けるために、必死に命をかけて働いている。

純粹に他人を助けようと必死になる人間が、

一体この世にどれだけいるというのか。

私は、この海賊討伐団に属するのを誇りに思うわ。

ベイブは心の中で呟いた。

ベイブも踵を返すと、自分の飼育棟へと駆け出す。

飼育棟のホープの部屋の扉を開け、

ベイブがゴーグルと手袋を身につけると、ホープは期待の鳴き声を上げた。

「行くわよー！ホープ」

ベイブはホープの背の鞍に飛び乗り、鎖を引いて勢い良く上昇の指示を出した。

船が、複数見えてくる。

目に被ったゴーグルを直して、船を見つめる。

ベイブはホープの高度を高く保ったまま、近づいて行った。

他国の貿易船と見られる船が二隻、それを囲むように六隻の黒い旗を掲げた海賊船。

「ホープ、行くわよ」

十分に船らの上空に近づくと、ベイブはホープに一気に下降の指示を送った。

「撃て！」

一隻目、砲台に近づきホープに叫ぶ。

ホープは鶏冠とさかから、海賊船に棘を撃ち込んだ。
三度撃ち込み、一隻目の攻撃力を喪失させた。

ドラゴンハンドラーに気がついた他の海賊船の船員たちが、ホープに向かって砲台を向け始める。

ベイブはすかさず、二隻目の攻撃にかかった。

砲弾がホープに向かって飛び始める。

ホープの体を砲弾から守るため、ベイブは神経を張り詰めて飛んでくる弾を避けた。

隙について、二隻目の砲台を攻撃する。

二度ホープが棘を撃つと、二隻目の攻撃力は失われた。

海賊船に近づいた高度の低さのせいで、船の上から打たれた銃の銃弾がベイブの足をかすった。

鋭い痛みには歯を食いしばり、ベイブはホープの高度を上げる。

ホープの体を傷つけないよう、敵の上空への攻撃に神経を張りつめながら、

もう一度、体を回転させて砲弾をよけつつホープを降下させる。

三隻目、ホープに四度棘を撃たせた。

海賊船の船体のわき腹に大きな穴が開く。

船が傾いて、海賊たちは慌てた。

四隻目が貿易船に船体をくつつけて、

今にも乗り込もうとしているのを見ると、ベイブはホープをそちらに向かせる。

船体を近づけるため、貿易船へと投げ込まれた海賊船の錨いかりに向かつて、

ホープに棘を打たせる。

バリバリと音を立てて、ホープの棘が海賊の錨を引きちぎった。

ふと見ると、すでに乗り込んだ数人の海賊が、

貿易船の船員に襲い掛かっている。

ベイブは船の甲板に向けて、人を傷つけないようにホープに棘を撃たせた。

そして船上ぎりぎりまでホープを急上昇させ、

ベイブはそのホープの勢いで仰向けに鎖から手を離し、足だけで体を固定すると、

船員を襲っている海賊に、両手で腰のナイフを放った。

ナイフは海賊の腕や足に当たり、海賊たちは悲鳴を上げる。

その瞬間、ベイブに見えない場所にいた別の海賊の男が、

ベイブに向かって銃を撃った。

わき腹に走った衝撃と激痛のせいで、ベイブの足がホープの鞍の鎖から離れる。

ベイブは自分がホープから落ちるのを知ると、咄嗟に大声で叫んだ。

「バックベース！」

ホープがベイブを見下ろす。

ベイブは落ちていきながら、もう一度懇願するようにホープに叫んだ。

「バックベース！」

ホープは首を上げると、空へと急上昇していった。

ホープを見送るベイブの肩に、また激痛と衝撃が走る。

もう一つの銃弾が、ベイブの肩を貫いたのだった。

ベイブの体が海面に落ちた。

水しぶきと、海面への衝突の衝撃。

やがてベイブの体はゆっくりと海の中に沈んでいった。

自分の体から流れる赤い血と、

ブロンドの髪がゆらゆらと、青い海面に向かって上に流れるのを見つめる。

ダグを思いながら、ベイブは意識を失った。

追放

ドーンとの早朝の討伐を終え自分の飼育棟にバディを戻していると、ふと海上の空にホープの姿を見つけて、ダグは驚いて立ち尽くした。こちらに戻ってくる。

ダグはベイブの飼育棟まで走った。

見ると、ホープの飼育部屋の扉が開いている。

「どうしてだ？」

呟いて、ダグはホープが戻ってくるのを待った。

やがて翼を羽ばたいて、ホープが飼育棟の前に降りてくる。その背の鞍は空っぽで、誰の姿もない。

「どうして、お前外にいるんだ」

ダグは首を傾げて言いながら、ホープを飼育部屋に戻した。

飼育部屋から続くベイブの部屋の扉を開けても、もちろんベイブの姿は無い。

ダグは不思議に思いながらも、自分の飼育棟に戻った。

バディの世話をしていると、ダグはコンドラッドの飼育棟の方で、数人の大きな声がするのを聞いて、外へ出た。

ドーンがこちらにやって来るのが見える。

「ダグ、大変よ！」

ドーンの尋常じゃない声色に、ダグは不思議そうにドーンを見る。

「どうしたんだ、何か騒がしいようだ」

コンドラッドの飼育棟の方に目をやって、ドーンに聞く。

「ベイブちゃんが、襲撃に一人で出向いて、

銃で撃たれて重傷を負ったそうよ」

ダグはドーンの言っている意味が分からず、ドーンの顔を見る。

「だって、ベイブは王宮に戻ったんだぞ？」

「私にも、いつベイブちゃんが戻って来たのか分からないけど、今日の朝は団の食堂にいたらしいの。」

そして、今朝あたし達が討伐に出た後に、もう一件襲撃があつて、相手の船は6隻もいたのに、ベイブちゃんが一人で向かつて行つたつていうのよ」

ダグはドーンと一緒に、コンドラッドの飼育棟に向かって走り始めた。

昨夜、あれからベイブは王宮には戻らなかったのか。

そして、今朝一人で討伐に出向いたという。

ならば、話が分かる。

海賊に撃たれてホープから落ちた時に、

ベイブはホープに飼育棟に戻れと指示したのだろう。

だから、ホープは一人で戻ってきたのだ。

ダグの顔が青ざめた。

ベイブが重傷とは。

コンドラッドの飼育棟に行くと、青い色をしたドラゴンの側にコンドラッドが立っていた。

その服には大量の血がついている。

ダグはコンドラッドに走り寄った。

「ベイブが重傷を負ったつて本当なのか？」

コンドラッドの服の血を見て、不安に駆られながらダグは聞いた。

ゴーグルを顔から外し、手袋を脱いで、自分のドラゴンを飼育棟に入れながら、

「ベイブは腹部と肩を二箇所銃撃されて海の中にいた。

後から追いついた討伐団員が救い出したが、出血が酷い。

取りあえず、応急処置をして先に俺が運んで来た。

今、担架で医療部に運んで行ったところだ」

コンドラッドが言つて、討伐団の医療部がある施設の方へ顔を向けて言った。

「しかし、いつベイブは王宮から戻ってきたんだ？」

コンドラッドが独り言のように呟いているのを横目に、

ダグとドーンは、医療部に向かって走り出した。

討伐団の仕事内容から、いつもけが人は絶えない。

施設の医療部は町の大きい病院よりも、設備は整っていた。

ダグとドーンが医療部に入っていくと、

ベイブは施術中になっていて、顔を見ることは出来なかった。

廊下の長椅子に腰をかけ、ダグはうな垂れた。

昨夜、自分がきちんとベイブを王宮に送り届ければ、

こんなことにはならなかった。

後悔の念で、ダグは押しつぶされそうになっていた。

「あなた、ベイブちゃんが王宮から団に戻っていたのを知ってたのね」

ドーンがダグの様子を見て何かを感じたのか、ふと口を開いた。

少し間を空けて、ダグは頷いた。

「ああ、昨夜、俺の飼育棟の扉の前にいたんだ」

「もしかして、ダグ。あなた自分を責めているの？」

隣に座るドーンが、ダグの顔を覗き込んで言う。

「そんな事したら、ベイブちゃんに失礼よ？」

もし、今朝のベイブちゃんとあたし達が同じ立場になっていたら、きつと同じ事をしていたでしょうね。違う？」

ドーンが言うのに、ダグは顔を上げてドーンを見た。

「彼女は王女であると同時に、ハンドラーでもあるの。」

ベイブちゃんは誇りを持って、国を守るための仕事をしたのよ」

ドーンはダグの肩を強く掴んだ。

「ベイブちゃんの、運の強さを信じて待ちましょう」

力強いドーンのその手の力に、

ダグは唇に両手のこぶしを当てて小さく頷いた。

施術は一応無事に済み、ベイブは医療部の病室へと移された。

ベッドに寝かされているその肩には包帯が巻かれ、顔は青ざめて目を閉じている。

呼吸は浅い。治療を担当した医師は小さく首を横に振りながら、コンドラッドに言った。

「出血が多すぎました。ここ二、三日で意識が戻らなければ、

体力の消耗により、難しいでしょう」

病室の隅で、やはり医師の言葉を聞いていたダグは表情を凍りつけた。

コンドラッドは頷いて、ダグを振り返るとため息をついた。

ドーンも立ち上がり、ダグを見ながらコンドラッドと医師と共に病室を出て行く。

ダグはベイブのベッドにふらふらと歩いて近づくと、

ベッドの脇に膝をついて、ベイブの手を握った。
冷たい手だった。

医師のさっきの言葉を胸の中で反芻し、
一体それがどういうことなのか改めて言葉にして、
ダグは愕然とした。

ベイブが死ぬかもしれない。
ベイブがこの世からいなくなる。
そんな事をちらりと想像してだけで、ダグはぞつとした。

「お前がどこかで幸せになるならこそ、俺はお前を諦めようとした。
俺よりもふさわしい男と一緒にになって幸せになるならと」
血の滲むような声で呟くと、ダグは握るベイブの手に額を当てて、
「お前がどこにもいないなんて世界は、俺には耐えられない。
頼む、ベイブ戻ってきてくれ」
生まれて初めて、ダグは神に祈っていた。

それから毎日、仕事が終わると、
ダグは真っ先にベイブの病室へと足を運んだ。
しかし三日目になっても、ベイブの意識は戻らなかった。

「今晚が山でしょう」
医師が無情にも言う言葉に、ダグが病室で打ちひしがれる。

ドーンはダグの肩を叩いてその悲痛な姿に目を伏せると、医師と一緒に病室を出て行った。

ダグはベイブのベッドの脇に座りながら、ベイブの青い顔を見つめていた。

手を伸ばして口元にやると、弱々しいけれど呼吸を感じる事が出来る。

ダグは天に、ベイブを返してくれるようにとひたすら祈っていた。

ふと、病室の扉が開いて、ダグは顔を上げた。

黒いマントを被った一人の人物が、病室の中を覗く。ダグはいぶかしげに、その黒いマント姿を見た。

その人物は黒いマントを脱いだ。

美しいブロンドの髪が現れて、ダグは驚く。

「ベイビールートがここにいます、

コンドラッドさんに聞いてきたのですけれど」

そのブロンドの髪の婦人は、ダグを見て言った。

顔をよく見ると、ベイブにとっても似ている。

ただ決定的に違うのは、その眼差しだった。

目の前の物を見ているようで、まるで見ていないという表現が合うかもしれない。

それは別の言葉で言い表すとしたら「諦め」が宿っている瞳と言うのかもしれないと、

ダグは思った。

そして、そのブロンドの婦人は、
ベイブの眠るベッドの脇にいるダグをじっと見ると、
ベイブのベッドに近寄ってきた。

「突然に失礼をいたします」

婦人が言って、着ているドレスの裾をつまみ小さくお辞儀をする。
いつかみた仕草。

王宮でしたベイブのお辞儀を思い出して、ダグは目の前の婦人が誰
なのか確信した。

「私の名前は、デイジールート・オブ・ストリレーツ。この国の第
二王女です」

婦人は言つと、ベッドの上のベイブを見た。

「そして、これは私の妹。第三王女のベイビールート・オブ・スト
リレーツ」

言つて、デイジーは真っ直ぐダグを見た。

しばらく、視線を交わしながらも、
お互いは黙っている。

「海賊討伐をして怪我をしたベイビールートの容態が、良くないと
聞きました」

やがて、デイジールートがダグの視線から目を伏せて、
ベッドの上のベイブを見て言った。

「今夜が山だと、さっき医師に言われました」
ダグが言った。

デイジールートはベイブに近づき、

その頬を指で撫でながら、

「例え、このままベイビールートが儂はかなくなってしまっても」
そして、ダグに視線を戻して言う。

「私は、ベイビールートが羨ましい」

デイジールートは俯いた。

そして、一つ息を吐くとデイジールートは言葉を続ける。

「ベイビールートは、王宮を追放されました」

デイジールートが顔を上げてダグを見た。

「ストリレートツ王国の第三王女の遺体が、海から上がったと、

国王が近隣諸国に伝令を発したからです」

ダグはその言葉に衝撃を受けて、目を見開いた。

それでは、あの夜ダグの部屋の扉の前にいた時、

ベイブは王宮へ帰ることは出来なかったのか。

それを、俺は追いつくとした。

ベイブはどれだけ心細かったろうか。

「一緒にいてくれるって言ってたじゃない」

と、ダグにすぐるように言ったベイブの言葉を思い出す。

取り返しのつかないほど、ダグはベイブに可哀想なことをしたのだ
と、

愕然とした。

ダグはベイブの顔を見て青ざめながら、改めて、自分を責めた。

「最後にベイビールートに会った時、彼女は私にはつきり、愛してる人がいると言っていました。

それは、あなたですね？」

デイジールートは、ダグが握るベイブの手の上に、自分の手を重ねた。

「命をかけられる程の誇りを持てる仕事があり、そして、こうして自分を心配してくれる愛する人がいる」

デイジールートは悲しく微笑んで、

「ベイビールートは幸せです」

ダグを見て言った。

そしてデイジールートは弱々しく眠るベイブを見ると、

「ベイビールート、私は明日嫁ぎます。多分、もうストリレーツには戻らないでしょう。

今度会うときは、神様のもと、天国になるわね。

私にもこうして、私が儂くなる時に悲しんでくれる人が出来ればいいけれど」

ベイブの手を力を入れて握り、デイジールートは小さく言った。

そして黒いマントのフードを被り直す。

「それでは、私はこれで失礼をいたします。

あなたにお会いできて、良かったです」

ダグを見てデイジールートは微笑み頭を下げると、もう一度ベイブの頬に手を当てて、デイジールートは病室の扉から出て行った。

しばらく、ダグはベイブの顔を見つめて、

ふと何を思ったか立ち上がり、ベッドの上の眠るベイブを抱き上げた。

ベイブを胸に抱えあげると、ダグは病室から出て行く。

廊下にいたドーンが、ベイブを抱き上げて歩いているダグを見て、驚いて声をかける。

「ちよつとダグ、あなた何してるの？」

ダグはドーンの言葉を無視して、歩き続けた。

ドーンは呆然とダグの姿を見送る。

すれ違う医師や他の団員も、ダグの様子を見て驚いた。

ダグは立ち止まらず、ベイブを抱きかかえたまま医療部を出る。

そしてそのまま歩き続け、ダグはホープの飼育棟にたどり着いた。扉を開け、ホープが眠っている部屋の中に入る。

「ホープ、頼む。お前の力を貸してくれ。

王室を追放された事を知らなかったとはいえ、

俺がベイブを今回の無謀な討伐へと追い詰めてしまったんだ。

ベイブは、もうお前にしか引き止められない」

そして、ベイブを抱きかかえたままホープの側にうずくまり膝をついた。

「ホープ、頼む」

ダグは言うつ、胸に抱えるベイブを抱きしめて、

搾り出すような声で言った。

ホープはそんなダグと、その胸の中に眠る自分のハンドラーに、自分の鼻先を伸ばすと一声高く鳴いた。

マーレイ

足元に穏やかな波が寄せては返している。

ベイブは一人きり、砂浜を歩いていていた。

どうやら、ここはダグとホープとの飛行訓練をした、討伐団の施設の前の海のようなのだ。

だけど、どこまで見渡しても施設も見えないし、誰もいなかった。ベイブは一人きりだった。

でも、心は安らかだった。

何を思うこともない、ただひたすらな平安。

もともと私は何も持つてはいなかった。

失ったと思ったものも、もともとは自分の物であったものなんて、何一つ無かったのだ。

このままでいい。このままずっとこうしていればいい。

一人きりの砂浜をずっとこうして歩いているだけで。

決して何かが変わるわけなんかじゃない。

生まれた時から、私はいつも一人きりだったのだし。
誰にも愛されなかった。
お父様にも、お母様にも。

ベイブは俯いて、足元の波を見つめた。

そして気持ちを切り替えて、
これからずっといるであろう自分のこの場所を見る。
穏やかな青い海がどこまでも続き、太陽の光にきらめいている。
澄んだ空の青と海の青が溶け合って、水平線は消えてなくなっていた。

いつかきつと慣れるのだろう。
この孤独に。

ベイブは空を仰いで、目を閉じた。

ふと、顔にしずくが落ちてきて、
ベイブは目を開けた。

雨？

二つ、三つ、しずくは落ちてくる。

ベイブは目を瞬^{しばた}かせ、温かいぬくもりのある顔に落ちたしずくに手をやって、
首を傾げた。

ふと、遠くで聞き覚えのある鳴き声がする。
愛しいあの声。

ベイブははっとして、辺りを見回した。

ホープ！

そうだ、ホープは今どこにいるのだろう。
私のドラゴン。

私をハンドラーとして慕ってくれ、
一緒に海賊を討伐してくれたホープ。

一体、私はどこにホープを置いてきてしまったのか。

ベイブは焦って、砂浜を走り始めた。
声はどこから聞こえたのか。

「ホープ！」

ベイブは力の限り、ホープを呼ぶ。

「ホープ！」

ふと、ダグは抱きかかえるベイブの腕が動いたような気がして、
はっとベイブの顔を覗き見た。

青白いベイブの唇が、わなわなと震えている。

「ベイブ！」

ダグはベイブの頬に手を当てると名前を呼んだ

「ホープ・・・」

かすれて聞き取れないような声だったけれど、
でもベイブははっきりと、ホープの名を口にした。
「ベイブ！しっかりしろ」

ダグがベイブの髪を撫でて、声をかけ続ける。

やがて、ベイブのまぶたが震えて、
ゆっくりとベイブは目を開けた。
焦点の合わない瞳。

ベイブは首を小さく傾げて、自分を抱え覗き込んでいるダグの顔を
見上げた。

「ダグ？」

ダグはベイブが自分の名前を呼ぶ声を聞くと、
神の名前を口にして、ベイブの胸に顔を押し当てた。

「泣いてるの・・・？」

ベイブは不思議そうな声で言った。

ホープがベイブの声を聞いて、
高らかに再び鳴き声を上げた。

「乾杯！」

コンドラッドが声をかけると、

団の食堂に集まった討伐団の団員たちが、一斉に声を合わせた。

「乾杯！」

その後、団員たちのそれぞれの拍手と歓声が響いて、壁や床が震えるような怒号になった。

ベイブは笑って耳を塞ぐ。

討伐団の男達はどれも体も大きいが、声も負けぢやいない。

「おめでとう！」

口々に言って、団員達はベイブの快気を祝っていた。

あの禿げて太った団員は、ベイブの座る席までやって来ると、

ベイブを見て感極まり、大きい図体をしてぼろぼろと涙をこぼした。そしてようやく口を開いて、

「俺は、あんたに一生ついていくよ、ハンドラー」

言って、流れる涙を腕でぬぐった。

「有難う」

ベイブは言ってにつこり笑って、

いつか自分が親指を捻じ曲げたその手を優しく握った。

やがて、宴もたけなわとなり、

それぞれが楽しげに酒を飲んでいる。

ドーンがしみじみとベイブの顔を見て言った。

「強運もハンドラーの実力の内。

もし、私とダグのどちらかが、

今回のあなたと同じ目に遭ったとしたら、

生き延びられなかったかもしれない。正直に認めるわ。

私たち4人のハンドラーの中で最強はあなたよ、ベイブちゃん」

ドーンの言葉にベイブは笑った。

「じゃあ、私は私のような海賊に出くわさないことを願うわ」
ベイブの言葉にドーンは大笑いする。

「本当にそうね、それこそ、最強の海賊だもの」

コック姿のライスが、ベイブに近づいてくる。

手に持っている包みをベイブに渡して、

「こいつらに付き合っていたら、治った傷も悪化する」

ライスが食堂の団員達を見て肩をすくめる。

ベイブは噴出した。

「確かに」

「初日にあんたが来た時に作ったものと同じ、

ハムのサンドイッチだ。部屋でゆっくり食べるといい」

ベイブは包みを受け取りながら、

「でも、この包み大きいわね」

言ってライスの顔を見ると、

「ダグの分も入っているからさ」

ベイブはふっと微笑んだ。

「有難う」

ベイブが言くと、ライスは口の端で小さく笑って食堂のカウンターに帰っていく。

コンドラッドに呼ばれていたダグが、ベイブの元に戻ってきて、大きくため息をついた。

「どれだけ俺が酒が強くても、これじゃあ体が持たない」

ベイブとの仲が知れ渡っている今、

今日のベイブの快気祝いでは、ダグは全ての団員達にからかわれていた。

「そろそろ部屋に戻るか？」

ダグはベイブの様子を見て、少し疲れているのを見て取ると言う。
「海が見たいわ」

ベイブが言っていると、ダグは頷いた。

ベイブとダグが食堂から出て行くのを見て、
数人の男たちが口笛を吹いた。

そしてまた怒号のような歓声と拍手と。

「いい人たちね」

ベイブが言っていると、

「ああ、俺たちの大事な仲間だ」

ダグは言って、ベイブの肩を抱いた。

夜の海。

討伐団の施設からもらえる明かりだけが、
うつすらと打ち寄せている波の白を浮き上がらせている。
後は潮風と潮騒と、穏やかな夜の闇。

「ダグの憧れていた第三王女のベイビールートは、亡くなっていた
ようね」

ベイブが言う。

「ああ、そうらしいな」

ダグはベイブの腰に手を回して、夜の海と一緒に眺めながら答える。

「私はただのベイブよ？何もないの。それでもいい？」

ベイブは言って、ダグの顔を見あげる。

夜風にダグの髪がなびいた。

「ただのベイブじゃないさ」

ダグは言ってベイブを見下ろす。

「ドラゴンハンドラーだ。」

国民の安全を命をかけて守っているお前が町を歩けば、

お前に憧れている子供らがお前の後を走ってついて来る。

民たちはみな褒め称えて歓声を上げる。

肖像画の絵描きは、こぞってドラゴンに乗っているお前の絵を描き、

市場で売るんだ」

ダグの言葉に、ベイブは微笑んだ。

「お前は、誰もが憧れる」

ダグが言いかけて、言葉を止める。

ベイブは不思議そうにダグを見上げた。

そして、ダグは思い切ったように口を開いた。

「ベイブ・マーレイだ」

ベイブは目を見開いた。

言葉を失っているベイブに、少し不安げにダグが訊く。

「俺の苗字を名乗るのは、嫌か？」

ベイブは目に涙を浮かべながら、

でもにつこりと笑って、ダグに抱きついた。

「最高よ！」

二人の抱き合う影は、
穏やかな夜の海のシルエットに溶けていった。

B A B E ベイブ（ドラゴンハンドラー）

了

マーレイ（後書き）

このベイブに付き合って下さった方々に、
本当にお礼を申し上げます。

無事、完結に持って行けたのも、
読んで下さる方々のおかげのほかなりません。

今、物凄い達成感の中にいて、
とても幸せです。

途中で、投げなくて良かった！

是非、また次のお話にも付き合って下さると嬉しいです。

有難うございました（ ）
b

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1341q/>

B A B E ベイブ（ドラゴンハンドラー）

2011年3月6日22時00分発行